
お前はいっぺん死んでこい！

一宮 秋臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お前はいつぺん死んでこい！

【Nコード】

N3336W

【作者名】

一宮 秋臣

【あらすじ】

自分を凡人と信じこむ黒野真雪は、天才と呼ばれる姉・白雪にコンプレックスを抱く、悩める高校生（女難の相有り）

高校卒業を機に、悩みの根源でもある愛すべき呪わしき家族のもとからの一人立ちを決意していた彼は、卒業を間近に控えたある日、自宅にて謎の侵入者に襲われ、ひっそりと死を迎えた筈――が、何故か再び真雪が目覚めた時、そこは平安時代の京都だった！？

家族だけでなく、予想外に現代社会からも独り立ちをとげたてしまった真雪は、果たして無事に新天地にて生き延びる事が出来るのか？

導入部ちよい長めですが、気長にお付きあい頂けると嬉しいです。

『無能な僕と天才な彼女』から題名変更しました。

*以前、某サイトに載せていたものを引っ越しさせてます

ある姉弟の会話（前書き）

初投稿です。

この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件、国や歴史的背景とは一切関係ありません。具体的にいうと、陰陽師という名称はあくまで異端児の別名であって、本来陰陽師は男性しかなれないという事実は頭から無視しています。

ある姉弟の会話

愛する君と共に生きるより

愛する君の為に死ぬ方がたやすい。

バイロン

「思うに、人間っていうのはひどく不便な生き物よね」
「は？」

ある日。

何の前置きもなく何の前触れもなく、実に唐突にごくごく自然に彼女はそう言った。

実際に、それはよくある事だった。気まぐれに彼女が問いかけ、自分が答える。内容は日々によって様々だが大抵は常に益体もないことで、平々方法幾何学論理とか、嘘しか言わない八人の証言についての審議だとか、あるいはもつと単純に明日の天気だとか。いずれにしても次の瞬間には吹けば飛んでしまうような、中身の会話だ。

——用はお前、単に暇なんだろ。

いつか言ってみたい誘惑に駆られる科白ではあるが、現在のところまだ人生に未練があるのでやめておく。

とはいえ、気持ちは分からなくもない。

窓から吹き込む柔らかな薫風が、ふわり…と彼女長い髪をさらっていく。生まれつき色の薄いその髪は、一度も染めたこともないのに綺麗なセピア色で、彼女の自慢の一つだった。春の陽光を透かし

てきらきらと飴色に輝いている。

降り注ぐ日差しは暖かだが、外の空気はまだ若干の寒を含んでいる。空は青く高く――木々は薄紅色の蕾をまとい、春の訪れがそう遠くないことを告げていた。

散歩するにはまだ寒く、午後のまどろみは如何にも気だるいものだった。

「――どういう意味だよ、それ」

別に興味があつたわけでもないが、とりあえず聞き返す。と、姉はその反応を待っていたかのように、もつともらしく頷き、

「だってそうでしょ。人間に限らず、生き物は生まれながらに様々なものに縛られているわ。自分の生まれだつたり育ちだつたり時代だつたり周囲の環境だつたりね。その全てのものから一切の影響を受けずに生きていくなんてことは、事実上不可能よ。その最たるものが人間ね。彼らには身に纏う枷が多すぎるもの」

「そうでもねえだろ」

論拠はないがとりあえず反論する。もとより、明確な趣旨があつてしている会話ではない。労なく論議を続けようとするならば、とりあえず相手の意見の全てに反対する。彼はYesと言わない日本人だった。

「封建時代はとくに終わつたんだぜ。本人の努力と望みと環境と才能さえあれば、何にだってなれるだろ」

「最後の二つは、誰しも平等に持つてるものじゃないと思うけどね」姉は苦笑した。くすりと笑いながら肩をすくめてみせた。やはり色の薄いブラウンの瞳に、どこか面白がるような色が浮かぶ。

「とはいえ、残念ながら私がしているのはそんなポジティブで前向きなお話じゃないのよ。そうね、例えばの話、ここに独りの殺人鬼がいたとしましょう」

もう少しマシな例え話を出来ないのかこの女。

「彼は『殺人鬼』という己の存在起源に則つて、当然殺人を行おうとするわ。人を見れば殺す事しか思い浮かばない。殺したくて殺し

たくて堪らない。なぜなら彼は存在そのものが『殺人鬼』であり『人を殺す事』こそが彼にとってのアイデンティティでもあるから。生きることが殺す事でもある彼にとって、殺人行為はそのまま存在理由になっっている。でもそんな彼でも現実には決して人を殺さない。なぜだか分かる？それは彼が優しいからだとか、殺人が法律で禁止されているからだとかいうちっぽけな理由ではなくて、もし自分が思いのまま望みのままに人を殺したら『殺人鬼の家族』となってしまう身内に迷惑がかかるから、よ」

「人を殺すような奴が家族の立場を気にするかよ」

「あら？気にするかもしれないじゃない？一体どうして殺人鬼は家族思いじゃないなんて断言できるの？家族に対する愛情は、この世界で何よりも強いものよ」

「まあ、そこにはあえて反論はせんが」

「大体、ゆーちゃんだって最愛の家族である私達の世間体を気にしてくれるから、趣味の猟奇殺人を我慢してくれているんでしょ？」

「仮定の話であろうと、実の弟を勝手に変態犯罪者扱いするなよ！」「ていうか。酷い例え話の対象が実弟だった。」

「いいのよ。私の前では嘘つかなくて。貴方のことならお姉ちゃんは何でも分かっているんだから。家族の為とはいえ、ずっと自分に嘘をついて生きてきてさぞかし辛かったでしょう…ありがとう。私達のために、こんなに無理してくれて…」

「待て！その設定で話を続けるな、続けたあげくどさくさに紛れて、自分の好感度をあげようとアピールするな！そんなことをしたって猟奇殺人ネタに自分の弟を絡めてきやがった時点で、お前の好感度は存在しない！」

「あ、でもゆーちゃん。どうせやるんだったら、やっぱり最低限足がつかないように物的証拠は残さないで欲しいわ。身内から縄付きが出たら、いくら月日つきひでも底いきれるか分からないし」

「さらに現実的な方向に視線を向けるな！あくまで俺を犯罪者に仕立てあげる気かこの野郎！」

無視し続ける姉に対し断固と

して反論を続ける。

「でもこの殺人鬼の彼——つまりゆうちゃんに、もし家族がいなかったらどうかしら？自分が氣遣うべき愛する家族がいなかったら？既に天涯孤独の身であるとしたら？彼を縛るものも彼を規制するものも、彼が守ろうとするものも何もなかったとしたら？果たしてそうだった時、彼は今までと同じく殺人衝動を我慢できるのかしら？したくてしたくてしょうがない事を、抑制もなく制御出来るのかしら？一切のしがらみを持たない人間が、自制なんてするかしら？」

「出来るだろ」

そう。別にそんなのは考えるまでもない。

「選ぶのも決めるのも結局は自分だ。自分の選択さえ周囲のせいにするなんて、見当違いにもほどがある」

当然の事を言っただけだが。それを聞いた姉はなぜ嬉しそうに微笑んだ。舞い散る桜の一片のように儚げで穏やかな微笑み。その笑顔だけを見れば、彼女の本性を知っている自分でさえ思わず見蕩れてしまいそうになる

「そうね。ゆうちゃんならそうでしょうね。でも普通の人間はそんなに不動ではられないわ。神経が登山用のザイル並みに頑丈で太いゆうちゃんと違って、人間はまず迷うの。他人にどう見られるか、他人にどう思われるか。自分のすることが正しいのか否か。自分にとっては正しい事であれ、身内から、周囲から、世間から、世界から見たら間違っているんじゃないか？何が正しくて何が間違いなのか。自分の望みが果たして叶えていいものなのか。臨んでいいものなのか。誰もが常に迷ってる。誰もが何かに縛られている。この地上で本気で何一つしがらみなく生きているのなんて、私ぐらいなものじゃないかしら」

「なんでだ？」

本気で理解出来なくて姉に聞き返す。姉が自由気ままに生きているという点には、なんら疑問もないが。人間というものが、そんなに揺らぎやすい生き物だとは到底思えない。

「分かりにくかったかしら？でもゆーちゃんだってそうじゃない？もしもなんて、実際には何の意味もない仮定だけ——もし貴方がうちに生まれてなかったら、ゆーちゃんは今の貴方になっていたかしら？」

「当然だろ。俺は変わんねーよ」

迷う余地がなかったので、断言する。と、彼女はそんな弟の答えを予測していたかのように笑みを浮かべ、

「でも、もしも貴方がこの家の生まれでなかったら、果たして貴方は本当に目指す夢を追いかけていたかしら？史上で最も偉大な異端児^{イレギュラー}と言われる『彼女』の末裔としてこの世に生を受けていなければ、あるいは今とはまったく別の道を目指していたかもしれないじゃない。何も好き好んで世界の忌子と呼ばれるような道を選ばずに、もっと普通に当たり前の人生を送っていたかもしれないな、とは思わない？一度でも、そんな風に考えたことはない？」

「ねえよ」

伺うような姉の言葉に即答する。

「いつの時代のどこの場所に生まれておまけにその時の家族が誰だったとしても、俺は確実に俺になってたって断言するね。『彼女』のことは切っ掛けだったかもしれないけど、あくまで切っ掛けであって決定打じゃない。俺の道を決めたのは俺自身だ」

「ゆーちゃんは単純ねえ」

あくまで揺るがない弟に、彼女はあきれ混じりにつぶやいた。

「でもそうなんでしょうね、結局。貴方は昔っから恐ろしくシンブルだもの。けどねえ、知ってるゆーちゃん。周りを気にしない人は周りから気にされなくていいと思っている人なのよ。よく周りを気にするとか、自分と他人を見比べるなとかいうけど、本当の意味で周囲を気にしない人っていうのは、なかなかいないわ。なぜなら、人は本来群れる生き物だから。生物は単体では弱いからこそ、群集として生きる知恵を身につけた。その中で、自分の周りに他人を必要としない。人との関係性をまったく気にしない人間というのはと

ても希少で例外的な存在よ。集団の中で個を主張する存在は排除される。出る杭は打たれる。そういう意味でいうなら、まさに貴方は正しく異端児だわゆーちゃん。その出自に能力に関らず、貴方の精神性だけで人間として立派に壊れた異常者よ。私よりも月日よりもずっとずっと貴方のほうが異端だわ」

「いや、俺もお前にだけは異常とか言われたくないんだけど…」

「異常は異常を知るものよ」

自覚があつたのか。

「だったらお前に異常扱いされてる俺の方が、世間一般的にはまともなんじゃねえの」

「世間一般のまともな人間がこの私と会話出来るわけがないわ」

傲慢にも何もならないことを、妙に力強く断言する。

結局のところ、姉が何を言いたいのか分からない。

だけどそれもまたいつものことだった。

全知にして零能。森羅万象の全てを見通す存在の胸中など、もとより自分ごときに測りきれぬわけもない。生まれた時から世界の全てを知り尽くしてしまっている彼女を理解しようなどとは、悟りも得ずに涅槃へと踏み入れるようなものだ。

だから別に構わない。人間同士の会話なんて、所詮そんなものだろう？

「お前の話が冗長なのも意味不明なのも毎度お決まり事だから、そろそろ俺も決まり文句としてこれを言わせて貰うぜ。つまりお前は何が言いたいんだ？」

「特にないわ、言いたい事なんて。この世界に対して私が言うべき事なんて何一つないわよ。あるならせいぜい遺言ぐらいなものね。ただの戯言。いつもと同じ意味のない言葉よ——でも、そうね。たとえばゆーちゃん貴方だったらどうしたい？」

「は？」

「もし貴方がこの世界の全てから開放されたら。生まれも育ちも血筋も時代も関係ない、あらゆるしがらみも一切の枷も存在しない、

過去も未来も家族も仲間も全てを失ったとしたら。貴方は一体どうしたい？」

試すような、眇めるような。

表も裏も暗も明もこちらの脳裡を裏から根こそぎ覗き込むような眼差しで、彼女がこちらを見つめてくる。その強さに圧倒され、我知らず自然と息を呑む。

一体何を見ているのだろう。何を視られているのだろう。

過去を知り未来を知り全てを知る時詠みの魔女——世界で最も優れた予知能力者である姉の瞳には、この世界がどう映っているのか。その想像はパンドラの箱を開けるようなものだった。

姉がまっすぐにこちらを見据え、油断すれば聞き逃しそうな、けれど不思議と聞きもらさない、ごく小さな声でそつと呟く。

「もしこの世界の全てから自由になる事が出来たら、貴方はどこに行きたいの？」

「……俺は」

「貴方は、何になりたいの？」

「俺は——」

ある少年の日常

願わくば 花の下にて 春死なん

> i 3 0 6 0 1 — 3 9 2 6 <

花が舞う。

例年より一足早く訪れた春は長の眠りから緑を目覚めさせ、綻びはじめた蕾が蜜を含んだ甘い薫風を漂わせていた。

既に花開いた桜は空と大地を薄紅色に染め上げている。儂さと潔さと。相反する矛盾を同時に兼ね備えた桜は、日の下見るにはただただ美しくしかし夜の闇に映える様はどこか幽玄へと誘う妖しさも秘めている。

花散る季節は別れが似合う。

校舎の窓辺に腰掛け人を待っていた真雪さねゆきはなんとなく手持ち無沙汰になりながら、何をするともなく校庭の桜を見ていた。暖かな日差しの中かに抗いがたい眠気を覚えるが、時折、強く吹く春風がまどろみと共に彼の黒髪を浚っていく。

もうすぐで高校卒業だ。

日本では三月の卒業式も四月の入学式もどちらも満開の桜に囲まれているイメージがあるが（単に映像記録機器を販売しているメーカーの根強い販売戦略によるものという説もあるが）これはそもそもおかしい話だ。一般的に桜の花の寿命は普通なら一週間。例外的に長くてもせいぜい二週間が限界だ。ならば卒業式と入学式の両方

で花が見れる機会というものは、通常はありえない。

特に卒業式には散り際、入学時には満開の桜という印象がそれぞれ強いが——真雪は思う。

卒業式の時に散ってたら、入学式にはガクしか残ってねえだろ。と、そして、

花とイベントをマッチングさせたきや、開花予想にあわせてイベントの時期をズラせよ、とも。

桜の花は満開時よりもむしろ、地面に散った花びらの方が強い匂いを放つため、彼個人としては毎年散り際の方が印象が強い。そのため、入学式の祝いに満開に咲き誇る姿より、別れの時期に散る様の方が桜の花には相応しく思う。

ま、そういった意味じゃ今年はラッキーだったな。

既に卒業まで早三日となっている。新人生には気の毒だったが、個人的には今年の咲き具合はまさしく理想的だった。

「ああ…それに俺は別に四月の門出を祝われる立場でもねえしなくあ…と。

いい加減待ち続けるもの飽きてきて、つい眠気に負けそうになり真雪はあくびをついた。にじむ涙を指端でぬぐう。とはいえ、あまり眠気は覚めない。

別段、特にやる事もないのでこのまま素直に昼寝をしてしまってもよいのだが。どうせすぐに帰るのだと思うと、そんな気にもなれない。なんというか、ここで寝たら負けな気がする。何にだ。何かにだ。

せめて退屈を紛らわそうと、近くにあった鞆からDSを取り出したところで、

「おーっす！ ゆーちゃん、おっまたー！ 遅れてゴメンネ。ちゃんといい子に待ってたかー？」

がらがら——と。

それまでの穏やかな時間を根こそぎ容赦なくぶち壊すような遠慮のなさで教室の扉が開き、騒々しい声と共に深夜しんやが現れた。

「悪い悪い。思ったよりトークが長引いちゃってさ。いやあ老人の遺言は長いねえ。でも、もうキレーさっぱり片付いたからダイジョーブ。とつとと帰ろうぜ」

「オッケイ」

待ち人来る。

真雪は立ち上がると、窓を閉め教室をあとにした。

「——で、お前今日なんかリクあんの？」

「んー、希望はいっぱいあるけど。お前的な予算っていくらくらい？俺、どこまでおねだりしていいの？ジンバブエの国家予算くらいなら出せる？」

「頼むから一般的な男子高校生の予算で検討してくれ。大体、個人で国家予算枠なんか出せるか、王国築くぞこの野郎」

「いや、だってお前の家それなりにセレブじゃん」

「お前十年近く付き合ってて、俺が一度でも実家の恩恵受けてるところを見たことあるか？」

黒野家は子供の小遣いについてさほど厳しい家ではなかったが、それはあくまで自由が利くという意味であって、自由に金銭を恵んで貰えるという意味では決してない。基本的に、使える金額は等価労働で全て自分で稼いだ金だ。

あー、確かにそういうトコ難しいよね、お前んとこ。と、深夜はきやらきやらと笑いながら、納得したように頷いた。

織神深夜は俗に言う幼馴染というやつだ。腐れ縁ともいう。別に実家が隣同士というわけでもなく無論、親同士が勝手に決めた許婚というわけでもない。まあ、男同士なので当然だが（姉の白雪との可能性の方がまだ有り得るが、あの悪魔女を溺愛する父親がそんなことを許容するはずがないので却下だ）純粹にただの同級生なのだが、小・中・高と全て同じ公立校のためぐだぐだと無駄に付き合い

が続いている。縁自体が既に腐りきって白骨化しているという説もある。

愛嬌ある顔立ちに常に人懐っこい笑み。ふわふわとまとまりのない髪は明るめの茶色で耳にはピアス。髪型は一見すると単なる寝癖のように見えるが実は綺麗にスタイリングされたものだ。

着崩した学ランの下には、服装規定上等といわんばかりに明らかに校則違反な派手めのシャツを着こんでおり、常に教師陣に喧嘩を売っている。

一方で真雪にはそんな派手なところはない。むしろ地味すぎるくらい外見には無頓着だったが、それを差し引いて尚、彼の容姿は酷く目立つものだった。

身長は図抜けて高い。服の上からでも充分に分かる引き締まった体躯。冴えた白貌。冗談のように黒い髪と野性味を帯びた黒檀の瞳。顔立ちそのものは端整ですらあるのにこの無駄に悪い目つきが、ただでさえ無愛想な少年の雰囲気を一層近寄り難いものになっている。耳を彩る赤い石のピアスが唯一のおしゃれ。

場所は学校から移動して、池袋の東口方面にあるマクドナルド。

本日は無事卒業と大学への合格が決まった友人に（本気でかなりギリギリだった）祝いと激励を込めて真雪の奢りでメシでも食べようの会だった。ついでに第二の目的として電気屋に新型のPCを見に行く予定だったが目当ての品がなかった。さまよっているうちに小腹が減ってきたので、現在ハーftimeを挟み再戦の予定である。

まあ、普通に考えれば同時期に卒業する自分だけが、わざわざ奢ってやる義理も理由もないのだが。ないのだから、延々と続き続けた白骨縁が遂に切れるのかと思うと、それなりに思わない事がないでもない。何せ、計十二年間の就学期間の中で同じクラスにあたったことが十回だ。どんな奇跡だ。

加えて深夜が無事晴れて卒業出来る事となったのが意外だったという事もある。（本当にギリギリだ。いやマジで）卒業直前まで担任教師に説教くらいながら、脅迫、同情、誘惑、賄賂と最後は泣き

ついて拝み倒した結果に、もう面倒くさくなった担任が嫌々卒業を認めてくれたらしい。

「しっかしまー、なんとか卒業出来そうマジよかったですよ。俺としちゃー。高校留年とかはさすがになー。ちよつとやだしなー」

「ちよつとどころじゃなくかなり真剣に嫌だけどなそれ」

「だって留年とかしちやったら後輩とタメになってタメ口きかれちゃったりあだ名がダブリンになったりするんだぜ、きっと。ダブリンって。あーやだやだ。ありえないっしょそれ」

「有りねえのはお前のそのセンスだよ」

あと、留年の危機を迎えてまで気にするところがあだ名程度という感性だ。他人事ながら残念で仕方ない。そろそろ途切れる予定の縁とはいえ、いい加減この幼馴染の将来が心配になってくる。

こちらの至極常識的な突っ込みに対し、深夜は笑って誤魔化すという暴挙に出た。

「あつはっは！まー、結果的には無事卒業出来んだからそれでいーじゃん。これで俺も四月から晴れて大学生。合コン三昧のキャンパスライフが待ってると思うと心が躍るぜ」

「ああ。俺も漸くお前との腐れ縁が切断されるかと思うと、柄にもなく人知を超えた何かに感謝したくなってくるよ」

「まったまたー。ゆーちゃんってば意地張っちゃってー。俺とお別れが寂しくって、こんな思い出パーティーとか開いちゃうほど俺の事が大好きなくせに」

「いや別にこれお別れ会とかじゃないから。単に絶縁記念会だから」
あと、個人的には楔の意味も兼ねている。楔というか、厄払いと
いうか。

なんのリスクもなくこの馬鹿と縁が切れるとは思えない。そこま
でに達してしまった自分の思考回路が悲しい。

「けど心配はいらねーよ。学校分かれても他の奴ならともかく俺、
お前とだけは縁切れるつもりはねーからさ。義弟よ」

屈託のない笑顔でほんっ、と気軽に肩を叩く深夜に、真雪は深く

深くため息をついた。

ある少年の日常（後書き）

一話あたりの分量がどー考えても多いので、読んで下さる方にご迷惑かと思い、短くしました。手探りですいません。

姉

「だから、昔っから何度も何度も何度も何度も言うてきた事だし、もう今更って気もするがいい機会だから改めて言うておくぞ。いい加減、白の事は諦めろって。一応、曲りなりにも幼馴染としての好というか、武士の情けで忠告してやるが、いつまでもあんな奴追いかけてると、お前本気で一生無駄にするぞ。っーか合コンだらけの大学生活を謳歌する予定なんじゃねえのかよ？」

「そこはそれですよ。ほら、やっぱりいつも松坂牛ばっか食っていると、たまには吉牛とかも食いたくなるじゃん？味見して普通の味を思い出す事で、改めて松坂牛がスペシャルである事を知る——つまり、松坂牛の真の価値を知るためには、適度に他を知る事もまた必須なわけよ！そう、つまりこれは概念としては浮気ではなく、むしろ真実の価値を測りなおすために神が与えた試練！心配しなくても俺は白雪一筋だから。そこは変わらないから」

「世界中の浮気男に夢と希望を与える新しい理論だな」

声高らかに何恥じる事無く、力強く持論を展開し浮気を正当化しようとする深夜に、しみじみとぼやく。浮気という行為をこれほどまでに自身で正当化出来るのはお前と島田紳介ぐらいなものだ。いや、こいつの場合はそもそも、浮気ですらないのか。万年片思いだし。

「だって、白雪つゆひくってすげー美人じゃん。俺、今までの人生の中であいつ以上の美人を知らないぜ。もちろん、芸能界も含めて」

「確かに、それは俺も認めるが……」

その点については、反論しようがないので頷いておく。身内の鼻屑目なしにして、確かに姉は美人だった。それも頭に『絶世』がつくほどの。

「でもあいつ性格悪いぜ？俺は今までの人生の中であいつ以上に性格の悪い女を知らないぞ。勿論、歴史上を含めて」

「確かに、それは俺も認めるが…」

と、今度は深夜が黙り込む番だった。それについては反論しようがないので素直に頷く。

くろのしらゆき 黒野白雪。属性・姉。種別・悪魔。職業・暇人（フリーターという表現をしたら、本人が断固拒否した。曰く『そこまで自由な人生でもないわ』との事）真雪より一つ年上で現在十九歳、無職。外見良し、性格悪し。

基本的には排他的で応用的な社交性もなく発展的な成長の可能性は皆無。愛想はなく（そして恐らくは友人もいない）性格は最悪の一言。特に対人恐怖症や心因性の病を持つわけではないが、人との接触をとにかく嫌う。大したフラグがあるわけでもなく、単に面倒くさいだけらしい。

小・中・高校までの学校生活を一貫して登校拒否児として過ごしたまま、入学式にも卒業式にも参加せずに卒業資格を入手した生粋の引きこもり。そのため一時期、真雪の通う学校では姉の存在が伝説の珍獣扱いされており、その姿を見たものは3つまで願いが叶うとか、テストで百点が取れるとか、運気が向上するとだ、意味不明なジンクスがまことしやかに広まっていた。毎日その姿を見ているものとしては、とりあえず彼女が発見して運気が向上するようなおめでたい存在ではないという点についてだけ力強く断言しておきたい。むしろ運気を吸い取るタイプだ。

生まれつき色素が薄く、日本人にしては珍しい（最近はどうでもないか？）セピアの髪とブラウンの瞳。肌は病的なまでに滑らかで白く、全体のパーツの中で仄かに生身の色味を持つ赤い唇が妙に蠱惑的だ。見かけは控えめに言って絶世の美女。外見の美醜については人それぞれに好みがあるだろうが、それでも世界中を探しても白雪を『美人じゃない』と断言出来る人間は、恐らくこの世にはいないだろう。

高校卒業後の今では、自宅でのんびり余生を楽しんでいるらしい（早すぎる）卒業後とはいえ、卒業前にも学校に通っていた事はな

いのだが、真雪の友人ということで、家に遊びに来る事もあるので深夜とは一応面識もある。

どうもこの幼馴染はその時、姉に一目惚れをしてしまったらしく、百一回以上のプロポーズをし熱烈に愛を訴え続けているがすげなくあしらわれ続け、未だに片思い継続中である。

「考えてみたらすげー話だよな。その年で十年越しの片思いって。

お前は少女マンガの脇役か？物心ついて時点で既にストーカーとしての才能を開花してんじゃねーよ犯罪者予備軍め」

「むしろ超一途って言うてくれよ。俺、白雪がどんなに性格悪い人格破綻者だったとしても気にしないぜ？アイツ以上に性格悪い奴知ってるし」

「あ？誰だ？」

「俺」

そうでした。

自分で自分を指差し、にっこりと笑う深夜に真雪はうんざりと溜息をついた。

「…何で俺の周りって頭よくて性格悪い奴か頭悪くて性格の悪い奴しかないんだろ。たまには頭悪くてもいいから性格のいい奴に登場してもらいたいんだが」

「類友じゃね？」

深夜はポテトをつまみながらあっさりと冷たく言った。ついで、ずるずると行儀悪く音を立ててドリンクを飲みながら、思いついたように聞いてくる。

「そっぴやさあ、真はこれからどーすんの？考えてみりゃ俺、お前が卒業後どうするかとか聞いた事なかったわ。確か受験、してなかったよな？それとも、俺が知らねえだけで実はどっかの大学受けたのか？まさかグリーンゲイブルズよろしく姉弟で仲良くヒッキー生活始めるってわけでもねえんだろ？」

「いや、俺卒業したらWISに入団しようと思ってんだ」

深夜が飲みかけのドリンクを吹き出した。

吹き飛んだ飛沫は正面の真雪に直撃した。

「……………」

互いに沈黙したまま時間と共に数秒間フリーズ。

「……………おまえ、なあ」

ぎりぎりと。

自分の歯軋りすら聞こえてくる静寂の中で何かを——明確な何かを堪えながら呻く。とりあえず一発殴っておくか、とも思ったが。まずは汚れを落とす事が先決だ。真雪は無言のまま席を立ち、トレイの棚から紙ナプキンを取ってきてごしごしと顔を拭き始めた。さらにトイレでハンカチを濡らしてくると、服に飛んだ分を丁寧に落とす。

ていうか、なんでマックでハンバーガー食いながら、よりもよってホットミルクとか飲んでんだよあいつは。普通コーラとかだろ？ 相変わらずチョイズが微妙な奴だ。

おかげでいらん苦労をする。

顔面はともかくとして、問題は制服に飛んだ分だった。彼らの高校は制服が学ランなので黒い生地の上についた白い牛乳の染みは嫌でも目立つ。

あと三日着なきやいけないのに、なんて事してくれんだあの野郎。卒業式間際のタイミングでこの手の事をかますあたりが、毎度ながらに迷惑な存在だった。クリーニング代が勿体ねえ。

それでも根気よく頑張ってみたら、大分落ちたようなので最後に広げて目視確認。OK。よく見れば分かるかもしれないが、これなら注視しなければ気づかないだろう。

手を洗って席に戻ると、既に深夜のフリーズは解除されていた。こいつ相手に今更怒っても意味ないが、とりあえずすれ違い様に背後から椅子を蹴り飛ばす。突如椅子を奪われた深夜は呆気なく床に転がり落ちた。

ざまあみろ。

多少なりと溜飲を下げ、席につく。てっきり反撃してくるかと思

いきや、深夜は文句も言わずにあっさりと椅子を拾って座りなおした。

「お前、WISに入団すんの!？」

全ての空気をキャンセルし——ついでに謝罪もキャンセルして、さりとて会話を再開する。

「WISって…あのWISだろ？異端児の組織としちゃ最高峰じゃん。試験とかめちゃくちゃ難しーんだろ？そんな簡単に入れんのかよ？」

「簡単かどうかは知らんが、ま、なんとかなるだろ。つっても入団試験は毎年五月だから、受けるのはこれからだけだな」

WISの入団は年に一回。年齢制限・国籍や資格は一切なく名前からすると、一見異端児のみの集団にみられがちだが（事実、世間にはそう思っている者も多いが）実は普通人であつても受験が可能である。ただし、その能力や年齢に対しなんの保障も保護も得られないというだけで。

「なんでそんな中途半端な時期なんだろうね。普通四月か九月だろうちのばあさんの誕生日だからだよ。」

「で、どこの受けんの？確かあれって国籍関係なく各国の入団試験を受けられるんだよな」

「ああ。とりあえず俺は日本の受けるけどな」

「日本…てことは京都か。じゃあ、お前高卒で出家すんだ」

「出家とかいうな。意味が変わるわ」

真雪は惘然として烏龍茶を飲んだ。

WIS

WIS。正式名称World Irregular Society——世界異端社会連盟。あらゆる意味で世界からはみ出てしまった、文字通り『異端児』の集合組織。

一部では新規のオカルト集団だのと揶揄されているが、実はその門戸は広く一般的にも開かれており、普通人の構成員も数多く存在する。本国はイギリスのロンドンにあり、その支部は世界各国に存在する。その背景、組織の前身としての歴史は非常に古いものがあるが、それが今の形となって世に知られるようになったのは実はごく最近の事だ。

かつて。

魔女と呼ばれ聖女と呼ばれ仙人と呼ばれ妖怪と呼ばれ陰陽師と呼ばれ霊媒師と呼ばれ天使と呼ばれ悪魔と呼ばれ賢者とよばれ聖者と呼ばれ、あらゆる国、あらゆる時代、あらゆる場所において、尊敬であれ軽蔑であれ様々な差別を受けてきた、様々な区別を受け続けてきた異端児が、一般人と同様に公の市民権を得たのはそう遠い昔ではない。

時は十九世紀の産業革命時代。大英帝国を発端とする経済成長が地球環境を容赦なく蝕んでいくなか、とあるドイツの学者によって一つの論文が発表された。詳しく述べると専門用語やら何ならで難しくなるので、誤解を恐れず乱暴に言ってしまうとそれは、これまでに塵災害の原因とされてきた塵が電気やガスに変わる新しいエネルギー源として利用出来る、という内容だった。この論文は世界中に比喩ではない激震を与えた。彼は論文中で塵が空气中に含まれるような、ごく微量の存在では人体やその他の生物にとって無害であること。またその原子より小さな物質の中に核に匹敵する熱量が存在すること。停止し続ける物体が長期に渡って日光と月光にさらされた場合、空気中の塵と結合して塵災害を引き起こすこと。そして物

質との結合から分解された塵を神と名づけこれが環境に対し極めえてクリーンなエネルギーとなることを、世界に対して証明してみせた。それは世界そのものを否定するかのような、非常にシヨッキングな内容であり、同時に微塵の隙もない見事な理論だった。

産業的・社会的・環境的な面から見て塵は非情に魅力的な物質だったが、単体としての塵自体は相も変わらずただの厄介源に過ぎない。塵を有効なエネルギー源として利用するためには 塵を神へと加工するには塵に含まれる不純物を取り除くという濾過作業が必要となる。だが、神の技術開発についてはどこの研究機関でもまだ歴史が浅く、濾過設備の開発についても膨大な時間と莫大な費用がかかる。そこで注目を集めたのが、それまで迫害の対象とされてきた異端児の存在だった。彼らは自ら肉体を媒介にし、塵を神へと変換し自在に操る能力を生まれながらにして身につけていた。それが所謂、神威能力である。

かくて。

その論文の発表を契機に異端児達の社会的立場は飛躍的に向上した。一つの研究施設が三十年間かけて製造した設備機能を、生まれながらにして備えている存在がいるとしたら嫌でもその価値を認めざるを得まい。論文の作者である人物が異端児ではなく普通人だったことも、無視出来ない要因の一つだろう。

とはいえ、長年に渡り積み上げられてきた『悪しき歴史』はそう簡単に覆せるものではない。その異能によつて長きに渡り世間から蔑まれてきた異端児は、手のひらを返したような世間の態度に対し素直に研究対象とされる事を是とせず、逆に各国に散らばる同胞達と一致団結してある機関を作り上げた。それが現在のWISだ。

入団するには厳しい審査を受けなければならないが、資格については特に必要とされるものはない。設立当時は純粋な異端児の集団だったらしいが、今では普通人であれ異端児であれ分け隔てなく受け入れる。そんなWISが各国の支部で共通に掲げる唯一にして絶対のルールはただ一つ。

『我らは誰の支配も受け入れない』

世界中のありとあらゆる政治権力に属さず名誉や賞賛であつても外部評価など一切受け入れず、意の向かない事は命をかけてもやるうとしない。世界中から蒐集された非人間（異端児か普通人に限らず）の吹き溜まり。しかし反面、彼らがあげている塵研究の成果は絶大である。

月ステーションは第三宇宙居住区で使用されている生命維持装置に組み込まれた半永久機関の動力も、現代医学では不可能とされていた塵の物質再構成機能を利用した放射線を使わない末期ガン治療も、身近なところでは原子復元機能の応用によるアンチエイジングなど、その全ての神使用に対する技術提供をしたのがWISである。現代生活において塵はもはや欠かせない存在ではあるが、それに伴いWISの地位もまた不動なものとなりつつある。

「――以上、背景説明終わり」

「え？何？」

「いや、なんでもねーよ。ただの意味ない独白って奴だ」

「ああ、若年性アルツか。気の毒にな」

「誰がアルツだ」

突っ込みながら頭を叩くと、今度は深夜もやり返してきた。痛み分け。相身互い。

「けど真、お前なんでこんないきなりWISに入団なんてする気になつたんだ？　また随分と唐突じゃないですか」

「別にそんな急でもないだろ。特に隠してたつもりもねーし」

「でも俺知らなかったよ？」

「それはお前が今まで、他人の進路にまったく興味を示さなかったからだ」

よりを正確に言うならば、そもそも他人の将来を気にかけるほどの余裕がこれまでの彼には一切存在しなかったのだが。人間、余裕がないと人への気配りが出来ないというお話。

「つつても意外だなー。俺、お前はあんま異端児とか興味ないのか

と思つてた。そういうの氣にしてる雰囲気なかつたし」

「あー、まあ、氣にしてはいなかつたけどさあ」

まじまじとこちらを見つめる深夜の視線に、なんとなく決まり悪いものを感じて曖昧にぼかす。実際、隠していたつもりはないのだが、いちいち説明するのも面倒くさい。

が、深夜はそんなこちらの胸中など氣にも留めず、

「いや、てつきり俺、お前は趣味の猟奇殺人に勤しみながら殺人技術向上の研鑽を積んで、ゆくゆくは暗殺者としての人生を歩んでいくもんだとばかり思つてたから」

「勝手に人のプロフィールを捏造してんじゃねえ！誰がいつそんな犯罪歴をお前の前で披露した！？」

さらにと適当なことを抜かす深夜に、さすがに聞き捨てならず全力で怒鳴り返す。なんでどいつもこいつも人を犯罪者予備軍みたいな扱いをしやがるんだ。

しかしあるうことが、こちらの反論に対してむしろ深夜はちよつとびつくりしたように目を見張り、

「え？嘘？真の趣味つて通りすがりに道行く人を老若男女無差別に切り刻むことじゃなかつたの？」

「誰がだ。つーかお前は今まで自分の友人を何だと思つてたんだ」

「俺も幼馴染の好で通報はしないであげようとは思つてただけど

…」

「いらん氣遣いだし。ていうか別に、通報されるような事今までしてねーし」

少なくとも他人にバレる範囲では。履歴書の経歴はまだ真つ白だ。

「でも確かお前、ゾルティク家のキルアと従兄弟だろ？」

「何が確かだ！最もらしく何の根拠もないことを言うのはいい加減やめろよお前。そして自分の思いつき設定を生かすためにさらに現実の捻じ曲げようとすんのやめろ」

大体。

あんな物騒なセレブと親戚筋にあたるなら、家事手伝いのみで巨

万の富を得て一生遊んで暮らしてやるわ。だって小学生のお菓子代が億単位なんだぜあの家？

「全くどいつもこいつも…どうして俺の周りの人間はこうやたらと人を犯罪者扱いしたがる奴が多いんだ」

なんか聞き覚えのある設定だと思っていたら、よく考えれば冒頭シーンでの姉と会話時に使っていた内容だ。まるで接点のない二人から同じネタでからかわれてしまった。

…そんな物騒な印象かなあ、俺？

相手が相手なだけに、気にする必要もないがほんの少し傷つく。

ほんの少しだけ。が、深夜はあつけらかんと、

「え、そりゃそーだよ。この前、偶然白に会った時、ゆうちゃんを個性を出すためになんかネタ考えようって話になって趣味は猟奇殺人ってプロフィールを付け加える事で決定した」

「全身全霊余計なお世話だ」

絶対零度の冷たさを持つてきつぱりと告げる。ていうか、そもそも犯人お前らかよ。なんでさりげなく仲いいんだ。あの空前絶後の引きこもりとこの少年が、どこで遭遇したのがそもそも謎である。普通に生活をしていればはぐれメタル並みの遭遇率なのだが。

「それはそうとお前、いつから京都行くの？」

「卒業したらすぐにでも、の予定。つっても三月は引越し代が高いから四月の頭ぐらいだな」

「ふーん。一人暮らし？もう家とか決まってるの？」

「いや、一人暮らしってーか、親戚の家に居候させてもらう予定。

出張ばつかで普段つかから留守になる事が多いんで、家の管理がてら余ってる部屋を貸して貰う。管理人兼なんで家賃は無料」

「条件いいじゃん」

「まあな」

実際に、はたから聞く分には何一つ不足はない。なんの資格も持っていない高卒が独立し始めるには、いささかならず恵まれた条件である。深夜は素直に感心した。

「場所はどのへんよ？京都つつつても広いべ」

「千本……って言って分かるか？ま、一応市街地に近いところだよ。観光地つつつても碁盤目状を離れちまえば結構な田舎だからなあ、あそこも」

「そーなん？俺、京都つつつたら壬生寺ぐらいしか思い浮かばねえわ」

「……だからなんでお前はそこで微妙にマイナーメジャーな方向に走るんだよ」

普通に清水寺とかいえないのかお前。飽きれ混じりに突っ込むと「修学旅行で行ったじゃん」と、深夜はしししと朗らかに笑った。「ふーん。そつかそつか。ところで真。そーゆーことなら俺、一つお前にお願ひがあるんだけど」「断る。何だ？」

聴覚が認識した音声を脳に伝えてその情報を吟味するより早く、脊髓反射によつて一秒のタイムラグすらなく拒絶する。我ながら改行を挟むすらない見事な速度だった。

「断つてから内容聞くなよ。せめて聞いてから断れよ」

「お前からの頼み事なんざ、断るのにいちいち話聞く必要があるかよ。脳内で思考するまでもなく条件反射で断るわ」

「ちえっ、友情がいのない奴だなーゆーちゃんは。で、お願いっていうのは実はさー」

「だから断るつつつてんのになんでそこでナチュラルに話を展開させようとしてんだ！？俺はお前のそういう人の都合を無視して、いつの間にかさりと自分本位に話を進めていくところが本気で嫌なんだよ！」

「はっはっは。真は強情だなー。ま、別にいーじゃんよ。卒業後にお前が独り立ちするってんならこれが最後のお願ひって事になるかもしんねーし」

深夜は伺うようにこちらを見ると、にいつと笑みを浮かべた。この少年が持つ独特の、人を喰う笑み。そう、それはまるで こんな古典的な表現方法を許されるのなら、とある童話に出てくる世界

一有名な猫のような笑みだった。

明るい茶髪の下から覗く瞳が、きらきらと如何にも楽しげに輝いている。三日月猫のような彼は、確信に満ちた口調できっぱりと告げた。

「それに、お前が俺の頼みを断りきれた事なんて今まで一度もなかっただろ？」

WIS（後書き）

お気に入り登録をしてくださった方。ありがとうございます。
感想などお気軽に頂けると、より励みになります。

クロノ

黒野家は古い血筋の家系である。

さすがに神代の時代より延々と続く、とまではいかないが、それでも遡ればその起源は平安にまで辿り着く。遙か千年以上の長きに渡りその血筋を代々守り続けてきた、その血脈を脈々と繋ぎ続けたという、価値があるかどうかは知らないが少なくとも歴史のある一族だ。

その始祖となったのはとある一人の女性だったという。残念ながら正確な名前は伝わっていないが、伝承によるとその彼女は、神に等しき力を持つ花のごとく麗しい人物だったそうだ。昔の話ではあるし英雄譚には尾ひれ葉ひれがつくものとして、話半分に捕らえたとしても『神』の呼び名がつけられる時点で、彼女が一角の人物であつただろうという事は想像に難くない。実際、伝説の真偽はともかくとして始祖が残したとされる塵の技法や術式などは、当時のレベルから比較するとずば抜けたものであつた。その多くは現代においてさえ使用されており、彼女が黒野家の礎を築いたといっても過言ではないだろう。

家系図の中には『赤姫^{あかひめ}』とのみ、その名が記されている。故に彼女の末裔はその偉大なる祖を呼び現す時には『始まりの人』『赤姫』あるいはもつと単純に『彼女』とのみ呼んでいる。

起源が女性であつたためかどうかは知らないが、代々女系の家系である。ついでに、女傑の家系でもある。生まれる頻度は圧倒的に女性の方が確立が高い上に、生まれてみれば際者曲者キレ者揃いという、男の身からすれば非常に迷惑な話だ。まあ、確かに日本は元を正せば母系社会らしいけど。そして今では男女平等の時代なんだけど。女性進出が盛り上がっている時代ではあるんだけど。それでも時々、思わなくもない。

何も千年も時代先取りしなくていいだろ、と。

歴代の黒野家男子がことごとく自分と同じような境遇と抱いていたのだらうということが、はっきりと確信出来てしまっただけに少し——ほんの少しだけ思うところが、ないわけでもない。

それはともかくとして黒野家の人間が誰もが『彼女』に焦がれている。

文字通り恋焦がれている者もいれば、その才に対して嫉妬に焦がれる者もいる。ある者は羨望し、あるものは畏怖し、それでも誰もが『彼女』の存在を恐れ敬い慕っていた。それは、祖を尊ぶ風習が薄れた現代では非情に分かりにくい感覚なのかもしれないが、祖霊——一種の神霊に対する敬意に近いのかもしれない。

幼い頃から折に触れ、その『彼女』の英雄譚を聞いて育った真雪にとつて『彼女』は文字通りに英雄だった。『彼女』が残した偉業の数々も、まだ子供だった彼にとつては胸躍る冒険譚の一つでありそれはまるで異世界の御伽噺のように。

不可思議で。

不可解で。

不可能に満ちたわくわくするような物語だった。いつか自分もこんな凄い冒険をしたいと、そんな『彼女』のような存在になりたいと本気で思った。幼い子供がお話に出てくるヒーローを目指すように、彼もまた心底『彼女』に憧れた。

そしてその気持ちは。

今も少しも色褪せない。

「……あー、喰いすぎで胃が気持ち悪い……」
夜。

古き世とは異なり、現代では例え空の陽が沈み夜の帳が幕を下ろそうと人の住む場所に真の闇が訪れる事はない。路は街灯に照らされ都心ではビルに浩々とした明りが灯り、昼も夜もないその人工の

光は夜闇を照らす月光ですら霞ませてしまふ。

光は人類が文明の進化と共に得た掛け替えのないものであり、同時に引き換えとして世界から多くのものを奪っていった。夜の闇もその一つだ。

文明の失われぬ限り、もはや人のある場所に夜の闇は訪れない。悪友と別れて自宅まで辿り着いた彼は、なるべく音を立てないようにそつと門を空けた。特に門限をつけられているわけでもないが、姉にでも見つかったらまたごちゃごちゃと煩い事を言われそうな可能性がある。不要な要素は可能な限り排除するに越したことはない。とはいえ

門をあけた程度の音じゃどうせ誰も気づかぬーけどな。

人の来訪をその存在だけで拒むかのように巨大な門戸を開き、家までの道を歩きながらそんな事を思う。そんな事を思うことが出来るくらい門から家までの距離が遠い。

彼の家は武家屋敷だ。

都内二十三区にある庭付き一軒屋。一体いつから続くのか（あるいは意外に近代に購入したのか）は知らないが見るからに重厚な如何にも古めかしい造りの日本家屋だ。城門のごとき門を潜るとそこには、池や縁石やら石灯籠やらが置かれた雄大な日本庭園が広がっており（親父の趣味だ）住宅街のど真ん中にありながら、まるで人の世とは隔絶されたような静寂な空気が流れている。

ひょつとしてこれ実は重要文化財か何かに指定されてんじゃねえかと思うぐらい、年季の入った家だが、更にとんでもないのがその庭面積だ。庭というより庭園というより公園といった方が近い。昔、自宅に遊びにきた同級生が冗談ぬきに庭で遭難したことがあるほどである。

東京の土地が高いつて嘘だろ。

家族四人で住むには些か以上に広すぎる自宅を見る度に、つくづく思う。完全な所有物件なので家賃はかからないが、かわりに税金が半端ないらしい。と、というのが現所有者である祖母の言だ。

静まり返った庭内では、靴音さえよく響く。真雪は縁石をよけながら苔生した庭を進み、ふと思いついてその歩みを止め——くると方向を変えると離れ近くの土蔵を目指す。

「ま、べつに急ぎつてわけじゃねーんだけどさ」

多少愚痴るような口調になったのは自分に対する言い訳だったのかもしれない。実際、それは特に急ぐ用事でもなかった。そもそも用事というほどのものでもない。無理やり押し付けられただけの厄介事に過ぎない。

「頼みつつてもそんなに面倒なことじゃなくってさ。ちょっと鑑定的な事をして欲しいわけよ」

「はあ？ざけんなよなんで俺がつーか鑑定なんか出来るわけねーだろ。なんだ？どつか田舎の倉庫から意味不明なもんが出てきたか？なんでも鑑定団にでも出してこいよ」

「いやいや。惜しいけど別にそーいうんじゃない。つか、なんでも鑑定団出すならむしろお前の家の蔵だろ」

「今んとこ身売る予定はないんだとよ。だったらなんだ？お前の未来でも鑑定して欲しいってのか？まあ、見るまでもなく暗雲に覆われてるけどな」

「やだよ。それこそなんでそんなのお前なんか頼むんだよ。真つて人を見る目ねーじゃん」

本気で心外そうに断られた。

人を見る目がないと言われた。

「それが人に頼みごとする奴の言い草か。——ま、どっちにしろお前の頼みなんざはなから聞く気がないんで関係ないけどな」

「結局最終的にはどんなお願い事も絶対に断らない癖に！。お前つて本当ツンデレだよな」

「やめろ。勝手に人を変なカテゴリに括るな」

「まあ、お前がツンデレってのはただの真実だけど。鑑定つつても美術品とかじゃなくってさ。これこれ。精霊石」

「……………嘘だろ？」

『その嘘かどーかをお前に判断してもらいてーんじゃん。なーんか知り合いから借金のカタに貰ったんだけどさ。公式鑑定じゃやっぱ金かかるし高いじゃん。もし偽物だったら鑑定料で赤出るのも悔しいし』

『それで俺かよ？』

『いーだろ別に。お前だったらそーゆーのぱつと分かるべ？WI Sデビュー目指してんなら、これくらいの事朝飯前に解決出来なきゃいかんでしょ』

『因みに借金の額はいくらだ？』

『二千元』

『…聞いた俺が馬鹿だった』

更にいうなら引き受けた自分は今もつと馬鹿だ。

自分自身に飽きれながら歎息を漏らし、ポケットから問題の品を取り出し、なんとなく月光に翳してみた。古い意匠の銀の指輪。その年代を物語るように――あるいは単に手入れ不足の証のように金属部分が薄く黒ずんでいる。全体に精緻な紋様が施されており、そのせいで指輪自体が透かし彫りになっておる。一見すればなるほど、歴史ある品のようにも見えるしそれっぽく作られただけのパチモンにも見える。判断に困る。

そしてその中央に輝く留め金で固定された、赤く紅く暗い石。濃い赤暗色は月光の下ではほぼ黒に近い。冴えた夜の光の中では、その内に秘めるものを照らしきる事は出来ない。

精霊石は数ある奇石の中で最も価値のある一つだ。通常は空気中に分散している塵が結晶化し安定したもので、その価値はダイヤモンドなど遥かに凌ぐ。一粒で一財産と言われている。

「――勿論、本物ならの話だけだな」

真雪は独りごちると、月天に掲げた指輪を自分の指に嵌めてみた。すると、まるで計ったようにぴったりと嵌まる。やばい。抜けなくなったらどうしよう。

一瞬地味な焦りに襲われたが、考えてみればそもそもが単なる親

切心からのボランティアだ。礼を言われこそすれ、文句を言われる筋合いもない。いや、それでも文句をいうのが深夜なんだけど。

まあ、いいや。

一般的に、普通人が精霊石を見分ける術はないが、異端児になら何の苦勞もない。簡単な事である。実際に使ってみればいいだけだ。「ただし、この方法は今回は禁止だよな」

塵エネルギーの結晶体である精霊石は指向性を持っていない高密度の塵だ。異端児ならばそのエネルギーを転化して利用出来るが、その場合使用された精霊石はただの鉱石となり粉々に砕け散ってしまう。奴がこの指輪そのものを得ようとしている以上、その手段は論外だろう。精霊石がついてなければ、こんなものただの汚くて古いだけの指輪だ。

「確か、蔵の中に月日の鑑定セットが入ってた筈だよな……」

最善の方法が選べないのならば次善の手段を選べばいい。単純にそう結論を出すと、彼は蔵の扉を開け――

宝物庫の中に、見たこともない黒尽くめの不吉な男を発見した。

命日

「……………は？」

一瞬、わけが分からず思考停止する。

足の踏み場もないほどに散らかった室内。根こそぎ荒らし尽くすような、軒並み散らし尽くしたような。壁は破れ花瓶が砕け壊された木箱の破片があちこちに散乱している。それより何より最も目を引いたのが、恐らくは確実にこの状態を生み出したであろう男——男か？の姿だった。体格は少し細身。顔に覆面、手には手袋。足元には見るからに頑強なブーツを履き、全身を黒衣に包んでいる。皮膚といい髪といい全身を包むパーツの一切全てが露出されていないので、ぱつと見て年齢はおるか性別や人種さえも断定出来ない。だけど。それでも。

この不吉な存在が、どうしようもないものだという事だけは、はつきりと理解できた。

理性ではなく直感でもなく。本能よりなお原始的な何かが、脳を揺さぶるように全身という全身に危険信号を発している。吐き気がするほどの重圧感。ヤバイ。

「……………」

威圧される。圧倒される。マズイ。

逃げないと。みんなを逃がさないと。俺の——

その男は。

突然の家主の登場に、しかし慌てる事無く焦る事なくたった今まで手にしていた箱の中身を、まるで興味が無いとばかりに塵のように投げ捨てた。放り投げられた小さな何かが、乱雑な背景に紛れてその価値を失くす。

何しているんだろう。何をしていたんだろう。何を探しているんだろう。

「……………お、前」

意図があつたわけではない。

声をかけた時には、何かはつきりとした目的があつたもない。ただ自然と声をかけていた。あるいはこの存在を目の前にしたまま、なんだかよくわからないという不確かな状況下にいることに自分でも耐えられなかったのかもしれない。

だが黒衣は、そんなわけもないのにまるでそこで初めてこちらに気づいたように、特に興味もなさそうな様子でゆらりとこちらを振り向いた。覆面に覆われた顔からは瞳も表情も伺えない。まるでのっぺらぼうでも相手にしている気分だ。が、その覆面の下から覗く視線が暗い食らい視線が突き刺さるように自分に向けられていることをはつきりと自覚する。

しくじった……っ！！

遅まきながらも痛烈に思った。声なんかかけるべきではない。黒衣を目にした瞬間に後先考えず逃げるべきだったのだ。男の意識がこちらに向く前に。

逃げられる可能性があるうちに。

「……………×××××……………」

黒衣が何かを呟きながら、ずっとこちらに歩み寄る。当然だ。唯一の出入り口を自分が背にしていえる以上、そこを通らずに外に行くことは出来ない。あまりにも自然に。何の気負いもなく歩く様子に我知らず後ずさる。と、刹那

まるで最初からそこに生えていたように。一本の銀のナイフが深々と真雪の腹に突き刺さっていた。

「……はっ」

——なんだこれ？

何が起こったか分からぬまま、呆気にとられて腹部を見やる。細長い銀の刃。それ自体には何も価値もないただの道具に過ぎない。刃渡りはせいぜい十cm程度だろう。ダガーナイフやアミーナイフ

のような肉厚で無骨な類ではない。ともすれば芸術品と紛うばかりに繊細で薄い造りの刃物が、刺したというより『ただ隙間を通した』といわんばかりに、柄の部分ぎりぎりまですっぽりと体内に埋まっている。刺された箇所にはまだほとんど血の滲みもなく、ただどうしようもなく致命的に彼の内蔵を抉っている。

なんだよ、これ……

鋭く冷たく硬質な刃が柔らかな肉を貫き、堪えがたい激痛が襲ってくる。傷の上から手で押さえてみるがどうしようもない。触れる指先が、さっきよりも徐々に広がりつつある血の染みを捕らえる。

「あ、ぐ……」

我知らず力を失い、がくん——と膝から潜れ落ちる。その、無様に倒れかけた自分に気にも留めず、不吉な男が何事もなかったように横を通り過ぎていく。何事もなかったかのように。自分が殺しかけた存在になど、本当にどうでもよさそうに。

ふざけるな。

気を失いそうになるほどの激痛を無視して、去り際の男の足をあらん限りの力で掴む。行かせるか。

それが自殺行為であることは、誰に言われずとも承知していた。賢明な判断を選ぶなら、ここは黙ってやり過ごすべきだ。ポケットには携帯電話が入っている。男が過ぎ去った後で助けを呼ぶのは難しくない……

だがしかし、それでも真雪にその選択は出来なかった。少し離れた母屋には姉も父も祖母もいる。相手が何者か目的が何なのかも分からない、けどそんな事はもうでもいい。行かせるか。

絶対に計り違えてはならない天秤に、大切な家族の命がかかっている。たとえ無駄な足掻きであろうと見逃す事は出来ない。

こんな不吉な存在を、俺の家族の所になんて行かせて堪るか。

握り締めた足首からみしりっ……と骨の軋む音がする。真雪は途切れそうになる意識を死に物狂いでかき集めて軋るように呟いた。

「——行く、な」

それは如何にもか細い言葉ではあったが――

仮に相手に言葉が通じなかったとしても、こちらの意図が届かなかったという事はないだろう。そのせいか。あるいは単に掴まれた足首の痛みが気に障ったのか。男が無関心にこちらを振り向いた。見下ろす視線と見上げる視線が、覆面越しに絡み合う。

「……………」

当然の事ながら相手の表情は何えない。だからなぜそう思ったのかは自分でも分からない。でもなぜかその時。

俺を見て微笑ったような気がした。

疑問に思っても束の間、足を掴んだままの手を手首の骨ごと踏み碎かれて、真雪は声も上げずに絶叫した。体の一部が崩れる痛みに、それでも足を離さずにいると、今度はその足が再び頭部へと容赦なく叩きつけられる。

声もなく。

言葉もなく、容赦なく破壊された少年の体は、今度こそ力なく崩れ落ちた。男はその様子を一瞥するとその少年に未だ掴まれたままの足を、瀕死の間際に意識を失って尚離さなかった彼の手を一步進むだけで呆気なく振りほどき、その場を静かに後にした。

血に染まった視界の中に、その姿を納める。それが、彼の見た最後の景色。

あー、これじゃやっぱり深夜に指輪返せねーや。

身を裂くような熱さと。溶けるような寒さと。犯し難い眠気に襲われながら一人、冷たい倉庫の床に血まみれで横たわりそんな事を思う。

そして。

……………

、、、溶暗。

――死。

ある彼女の日常

緑陰の闇を泳ぐように、彼女は一人気ままに庭を歩いていた。壁で囲まれた箱庭は夜陰に閉ざされ如何にも歩きにくそうではあるが、気に留める様子もない。軽やかな足取りで闇の中の散策を楽しんでいる。歩く度に微かな衣擦れを立てるシヨールは月光に照らされ絹の光沢を放ち、春風に靡く様がまるで舞姫の羽衣のようだ。

闇の中を進むのは、どこか水中を歩くにも似ていた。見上げても水面のない水底。いつかこの空が水に覆われる日が来たら、果たしてそれは今の世界とどう違うというのだろうか――

自らの詮のない思考に、彼女はくすりと笑みを零した。魅惑的な紅い唇が僅かな弧を描く。実際、気分は悪くない。先の見通せない暗闇というのは、なるほど生きていく分には不便かもしれないが、彼女にとってはその感覚はとても新鮮なものだった。自分にすら見えない世界。それを思うとなんとなく嬉しくなる。

とはいえ、進む足並みにはまるで迷いが無い。予め決められていた予定をなぞるように、彼女はそこに辿り着いた。

扉を開ける。と、中から零れる光の強さに闇に慣れた目を僅かに細めた。明反応は暗反応より時間がかかる。長い睫に縁取られたブラウンの瞳が、眩しそうに眇められる。

光に照らされた室内は――

一言でいうと、散々たるものだった。あらゆる物が散らかり床に投げられ壊されている。整理にしる修復にしる、元に戻すには手間と時間がかかるだろう。

端麗な顔をほんの少しだけしかめ、自分ではない気の毒な誰かが行うであろう片付けの手間を思い、彼女は軽く歎息を漏らした。が、すぐに意識を切り替え中に足を踏み入れる。踊るように滑らかな足取り。室内をぐるりと見回し、不思議そうに小首を傾げた。端整な容姿には酷く不似合いな子供っぽい仕草。長いセピアの髪がそれに

あわせてさらりと流れる。

「……あら？　なんだかここで私の大事な大事な弟が、幼馴染に頼まれたお願いごとを純粹なる親切心で解決してあげようと仏心を出し、うちの蔵に道具を取りにきたら、厚かましくも我が家に忍び込んでいた不法侵入者に、いきなり問答無用で刺されたたあぐく、腹部に穴が開き大腸菌が血管を通じて脳に達してしまい、出血多量の前に細菌感染による脳損傷で今にも死にそうになって、床に倒れてる気がしたのに……私の可愛いゆうちゃんは、夕飯の支度もサボって一体どこに行っちゃったのかしら？　お姉ちゃんはおながが空きました。罰として、後で呪ってあげちゃうわ」

白雪は。

黒野白雪は。

いつも通り登場とともにいきなり全ての状況を見抜きいつも通り神のごとく万事を把握した彼女は、やはりいつも通りそれ以上の事は何もするつもりがないようだった。全知にして零能。無力な万能の魔女は荒らされた室内の様子など気にも留めず、その透徹した双眸には欠片の悲嘆も悲観もない。探しにきた筈の弟の姿がないことすらも全て、予定調和だというように。

真雪の不在を確認すると、そのままあっさりときびすを返して蔵を離れ――去り際に何かに気づきふと床の一点に目を留める。そこには。

「……あら？」

既に酸化してどす黒く変色した血溜りがあった。

「……は？」

ながらへば　またこの頃や　しのばれむ

風の音。緑の匂い。血の温もり。原初の空気。命尽きる寒さ。
土に頬をつけながら——つまりは地面に倒れた状態で——真雪は
生と死の間隙を彷徨っていた。死にたくない。

何が起こったのか分からない。どうなっているのか分からない。
自分の状態も置かれた環境も、突然に起こった出来事も。家の蔵に
いたはずの自分がなぜ地面の上に倒れているのか。それを疑問に思
う余地すらない。

ねっとりとした、真夏の湿気のように濃厚な空気中にある何かが、
肌に絡みつく。厭わしく、そしてどこか懐かしい。

流れ出る血液と共に何か——生命を維持する上で欠かせないであ
ろう何かがゆつくりと失われていくのを感じる。此方の一步が遠ざ
かる事に彼方の世界へと近づいていく……

ちくしょう。死にたくない！

「……—？」

と、その時。

僅かな違和感を感じて、彼は残っていた意識の全てを集中し耳を
研ぎ澄ませた。幻聴ではない。倒れた地面を通して音が直接響いて
くる。何かが歩く音、何かが近づいてくる音。近づいてくる者がい
るという事。何かがやってくるということ。

「——い！確りしろ！大丈夫か！？」

唐突に。

聞いたことのない男の声が頭上から降り注いできた。続く足音と

——複数の人の息遣い。顔を上げる気力もないので姿を見ることは出来ないが、声の主は自分を見て絶句したように息を飲んだらしい。疎む気配になにやら緊迫した様子が伝わってくる。「一体どうして——」「誰なんだこれは——」「生きているのか——」「なんで……」
「……早く……に——」「——治療を」「——」
音が。

次第に遠ざかっていく。

僅かに残っていた聴覚までもが麻痺していく。それと同時に体から——疾うに限界を過ぎていた体から今度こそ力が失われていくのが分かった。腕が動かない。足が動かない。寝返りどころか顔も上げられず助けを求めようにも喋る事さえ出来ない。

だけど、もうどうでもいい……

生暖かい自分の血溜まりに沈み込みながら、乾いた土の匂いに包まれ真雪はゆっくり眼を閉じた。

今眼を閉じたらもう二度と目覚めないかもしれない。最後にそう思った。けどどうすることも出来ず彼の意識はそこで途切れた。

知らない部屋の布団の上で彼は目を覚ました。

「……………あれ？」

びっくりした。

一瞬夢オチかと思った。

覚醒しきっていない頭は未だ眠りを要求していたが、それを振り払ってあたりを見回す。

「……………どこだ、ここ……………」

見覚えのない部屋。硬い板の間。フローリングではなく、剣道場のように加工されていない本物の板の間だ。清潔だが薄くて硬い布団が床に直に敷かれており自分はそこに寝かされていたらしい。妙に体の節々が痛いのはそのせいか。床と変わらねえじゃねーかこれ。

ついでに首が痛いと思ったらなぜか枕が箱枕だった。こんなもの、小学生の頃に歴史の資料集でしか見たことない。なにかの苛めだろうか？枕元には盆に置かれた水差し。気が利いているのかいないのかがいまいち分からない。

水差しを見て、真雪は喉の渴きを痛烈に意識した。身体が汗で湿っている。だが決して汗ばむほどの陽気ではない。むしろ目覚めてみれば、周囲の気温は少し肌寒さを覚えるほどだった。なんで、こんなに汗をかいたんだろう。

悪い、夢でも、見たんだろうか……？

身体を起こそうとして――途端、腹部に引きつるような激痛を感じた。起き上がるのを諦め、元の位置に収まる。いつに間にか着ていた浴衣（温泉宿などで出てくるぺらなものではなく、麻で出来た本物のそれだ）をはだけて、自分の腹部を確認する。布で覆われたわき腹に、紅い小さな染み。それを見た瞬間、全ての記憶が繋がった。

「……………ああ、思い出した」

そうだ。あの時俺はあそこで刺されて、それで――それで。

「それで、どうなったんだ……？」

痛みで意識が朦朧としていたためか、失う寸前の記憶がはつきりしない。誰かに助けを求め、誰かが助けてくれたような気もするが定かではない。

「……………てゆーか、だとしたら本気でここ、どこだ？」

間違っても自宅ではないし、とりあえず知り合いの中にこんな板の間のある家はない。月日の別邸という事もありえるが、さすがにそれはないだろう（あの女は西洋かぶれだ）

あの世？

可能性としては一番高いが、彼は無神論者だったのでその案を却下した。次いで思いついたのが地獄という選択肢だったが、やはり同様の理由で却下する。第一、

「死後の世界にしちゃあ、なーんかありがたみがねーよなあここ」

ていうか俺は死んだのか？

俄かには受け入れがたい見解ではあったが、それを否定するほどに根拠ある回答を思いつけそうにない。だが、丁寧に施された治療の痕は幻想の死からは程遠く、どこもない違和感がある。そぐわない、というか。一部だけが妙にリアルで夢と断じ切れない感じ。と、そこで。

思考を一時中断すると真雪は、ぱつと音を立てるほどの勢いで、唐突に扉へと振り向いた。

気配を感じた、などという繊細な話ではない。少なくとも、相手に隠すつもりは全くなかったのだろう、板と布が擦れる——誰かが近づいてくる足音。俄かに緊張し、視線を入り口へと向ける。それはだんだんと大きくなり、この部屋の前でぴたりとまった。そして。

がらりと音を立てて扉が開くと、そこには見知らぬ男の姿があった。

「……………おや？」

厳しく睨むこちらの双眸に——起きていたのが予想外だったのか——きよとんとした相手の顔が映る。が、男はシャツターを切るようにカシャンと表情を切り替え、

「あ、よかった。目が覚めたんだね」

そう言つてにつこりと笑みを浮かべる青年を、真雪は無言で見据えた。

そこにいたのは背の高い一人の青年だった。年の頃なら二十歳前後。未成年ではないだろう。あるいは単に見かけが大人っぽいだけかもしれない。柔和そうな顔立ちに、優しいな笑みを浮かべた優男だ。長い黒髪を背中ですくって括っている。が、それより何より特筆すべきは彼の服装だった。男は着物を着ていた。いや、それならばまだいい。ひよつとして実家が茶道の家元か何かなのかもしれないし、そうでなくとも世の中にはいろんな趣味の人間がいる。和装趣味の人間だっているだろう。少なくとも猟奇殺人よりは平和な趣味

だ。それだけならば特に変な事ではない。

だが、男の服装は単なる和装趣味を通り過ぎて斜め上に変だった。変というより単に異常というか。

青年は狩衣と呼ばれる着物を着ていた。平安時代、貴族の一般的な装束だったといわれる例のアレである。一枚布の着流しや紋付はかまをはるかにぶつちぎって異常な格好だ。今日び、そんなものは仮装や葵祭りでしかお目にかかれない。いつの時代の人間だ？

「怪我はどうか？一応、手当てはしたんだけど、今は生憎専門家が不在だね。もし痛みが酷ければ痛み止めがあるから――」

にこにここと。人のよさそうな笑みを浮かべながら、青年が無造作に入ってくる。真雪はその様子を無言で見つめ。

今度は、間違えなかった。

俺にとっての大切な

意識を紡ぐ。意志よりも早く。大気中の塵を呼吸と共に体内に取り入れる。満ちる塵は血流に乗って全身を巡り、流れの中で練成されて神になる。脈動を駆け巡る神は術者の望むがままに姿を変え、元の世界へと立ち戻る……

神威^{しんい}三大系統が一、物質操作。体内で練成した神により世界に干渉し、その一部を限定的に自分の理想へと可変する。塵によって引き起こされる、最も基本的な精霊現象。

閃光と爆発。

耳を劈くような爆音は強烈な光と熱波を生み出し、一瞬にしてあたりの気流を掻き乱した。踊る火の粉と光の隙間に、青年の驚愕の顔が浮かびあがる。

その表情を意識の端に収めながら、身体だけは素早く次の行動に移っていた。布団を跳ね除けると同時、そのまま一気に間合いを詰める。火傷を気にする必要はない。もとよりフェイントのために起こした爆発だ。見かけほどの威力はないし、炎熱も長くは続かない。そして何より俺の生み出した炎は決して俺を傷つけない。

一步の踏み込みで肉薄する距離まで迫ると、襟首を掴んで腕の関節にそつと手を触れる。炎熱に対する生物としての根源的な恐怖は、容易に相手の意識を乱し男は反射的にこちらを振り払おうとした。ただ触れているだけの無害な手。そこには何の力も込めていない。当然、相手の抵抗には逆らえずその動きをなぞるようにして、真雪は触れた腕を軸にくるりと身体を反転させた。ついでに掴んだままの腕を上に向かって捻り上げる。急に派手動いたせいで、反動もまた凄かった。腹の傷からは気絶したくなるほどの激痛が押し寄せてきたが、この際なので豪快に無視する。どうせ気絶も出来ないのだから、我慢するしかないだろう？どちらにせよ――

全ては一瞬で事足りた。

筋の伸びきった姿勢で相手を捕らえている。完全に殺し業が嵌った状態だ。人間としての構造を持つ以上、ここまで決まればもう逃げられない。止めにさらに更に更に四分の一程腕を捻ってやると、男はその苦痛から逃れようと爪先立ちとなり、限界ギリギリまで身体を伸ばした。はい。これで詰み。チエックメイト

不安定な姿勢になったところで軽く足を払うと、既に体制を保つことも出来なかった男は呆気なくバランスを崩した。その勢いに乗せ、今度は自分の足を軸に転がすようにして男の身体を床へと叩きつける。

それでも腕だけは離さずに、レバーのようにぐりりと回してもう一度肩を決め直すと、今度は膝を使ってがっちりロックした。状況終了。

男は仰向けに寝そべったまま動かなかった。倒れた時に頭を打ったのかも知れないし（一応、そうならないように腕を支えたのだが）そうでないのかもしれない。どちらにせよ関係ない。今では完全な死に体だ。この状態から逃れようとするれば、間接を外すしかない。

本来は後の後から始まる専制防御の技だったが、ここまで綺麗に決まったのは初めてだ。否、防御の技だからこそ、か。身を守るために発案されたその技術には単純な攻撃とは比べ物にならない程、執拗なまでに相手の動きを疎外しようという意志がある。繰り出される一挙一動の中には無駄な動きは何もない。そうして敵を捕らえた。つまりここまでが防御だ。そして、次からは攻撃の時間だ。

ヒアウェイゴー
それでは開始しよう。

仰向けに倒れたまま、ぽかんと呆氣にとられた表情を浮かべている男を冷めた目で見下ろすと、真雪は捕らえている側の手のひらを掴み、親指を握るとバイクのグリップをねじるようにぐりつと半回転させた。途端、走る激痛に男の身体が海老反りになる。

「ちょ——いだっただっ！待って待って待って待って！！せ、説明するから！ちよっと一瞬本気で待って！！」

かなり真剣に痛かったのか、男は涙目になって慌てて訴えてきた。

降参の証か、自由な方の腕でしばしと床をタップしている。なんとなく。

そのあまりの情けなさに面食らい、ついでもう少しだけ捻りを加えてから腕の拘束は解かないまま真雪は親指だけを離れた。最後の捻りがかなり効いたのか青年は暫く床で悶絶していた。

「……なんで待ってて言ってから止め刺すんだよ、鬼か君は。全く……安心したところで攻撃されるのって結構きついものがあるんだけど。君、優しさが足りないって言われるだろう」

「やかましい」

相手の愚痴には耳を貸さずに一刀両断する。それでも大分楽になったのか、男は（床にダウンしたままの状態で）あからさまにほっとため息をついた。

「いやだから待って。そうかつかしいで。少し落ち着こう。あのさ。君が——混乱する気持ちは分かるよ。目が覚めたばかりで一人ぼっちだったし。あんな怪我して倒れてたくらいだ。なんか事情がある事ぐらい想像がつくよ。多分、私の事を警戒してるんだろ？」

「……………」

「でも——誤解されちゃ困るが、君をそんな目にあわせたのは私じゃない。君がそんな酷い怪我を負って、林の中で倒れていたというのは、あくまで君の物語であって私の関与する話じゃない。でも、君を助けたのは私だよ。連れ帰って……治療をしたし休ませた」

「……………」

「別に恩に着せるつもりはない——けど、お礼をしてくれても罰は当たらないんじゃないかな……君はそんなに、礼儀知らずには見えないし」

つまりはそれが、男の釈明の言葉だったのだろう。

そして彼は恐らく、その説明で自分が納得すると思ったに違いはない。言葉を終え、開放を待つばかりと明らかに安堵した様子でのんびり構えている。それを見下ろし、相手の言を自分の中で反芻し——真雪はただ無言で掴んだ指を捻じ切るように更にぐりんと捻った。

筋の千切れるような痛み、男の身体が決して大げさではなく大きく仰け反る。

「ちょ——き、君、今私の話を——」

「うるせえ。勝手に喋るな」

脅すつもりがなかったと言えは嘘になる——が、威嚇よりも先に、自分の声に潜む硬質な響きに気づいたのだろう。男は先程とは違う緊張した態度で大人しく沈黙した。

話の内容に、不自然な所はない。如何にもざつくばんな説明だったが、そんなものだろう。別に凝った話をする必要もないのだ。放っておけば死ぬ筈だった。その自分を騙して彼に何の得がある？ わざわざ手当までして？

男の話を疑う理由はない。疑問を抱く事に理由が必要ならの話だが。なのに、なんで。なんで俺は——？

「……あの。なんか、私の話に問題でもあったかな？ 分からない事があればちゃんと答えるからなんでも質問して欲しい。沈黙はやめよう沈黙は。この状況で黙り込まれるとかえって不安になってくる」
「黙ってる」

一言の元に切り捨てて、ふと思いたって尋ねる。

「……あれ、そっゆきいや雪は？」

「え？」

「アンタが俺を見つけた時——傍に、誰がいなかったか？ 若い女とか……」

白雪とか。俺の姉とか。

そうだ。あれから——家族は。俺の家族はどうなった？

慎重な面持ちで問いかけると、青年はそこで初めて表情を変えた。腕を折られかけてまで無抵抗だったこの青年が。躊躇うような気遣うような、どこか痛まじげな顔。その表情を見ただけで、答えを聞かずとも理解する。未だ完治せぬ腹の傷が、思い出したように疼き出す。

「……君、連れがいたの？」

「いや……いなかった、んだな？誰も」

「ああ。あの時——君を見つけた時、君は一人で林の中に倒れていた……傍には誰もいなかったよ。君を傷つけた人間も、君を氣遣う人も」

「……そうか」

男の言を疑う理由はない。人を疑う事にいちいち理由が必要ならばの話だが。不自然な所はない。如何にもぎつくばらんな説明だったが、そんなものだろう。傍に誰もいなかった。つまりそれは——
どうということだ？

あれから何が起った？家族は一体どうなった？そして——あの、不吉な男。あいつはどこに行ったのか。

分らない。何もかもが分らない。曖昧懨然であやふやで、意味のない焦燥が胸を募らせる。フィルター越しに世界を覗いているような、どこか余所余所しい無力感。

「ねえ……君、大丈夫？なんか、マズい事を言ってしまったのかな、私は。なんだか——すごく酷い顔色だよ」

実際に、よほど酷い顔色をしていたのだろう。そういう青年こそが、幽霊にでも出会ったような顔だった。普段はたんに目つきが悪いだけの双眸が、更に凶悪に吊り上っているのを感じる。恐らくは、その表情に怯えたのかも知れない。こちらの様子を伺うように見上げてくる男の顔には、怪訝さと僅かに怯えらしき影が浮かんでいた。複数の感情が入り混じった視線が無神経に突き刺さる。鬱陶しい。いつもは何の気にもならない他人の視線が、なぜか酷く癪に障る。「やっぱりまだ万全とはいかないみたいだね。疑問はいろいろあるだろうが、とりあえず今は一旦休みなさい。お姉さんの事を考えるのは後にして——」

その言葉を耳が認識すると同時。男が喋り終えるより早く、真雪の身体は動いていた。

握り締めた指先に塵を集める。手のひらに生まれた炎熱は悪夢のように増殖し地獄のように燃え滾り刹那のうちに凝縮しながら、大

気を巻き込み火勢をあげる。

神威とは人によって引き起こされる精霊現象である。己の肉体を介して大気中の塵を神へと練成し、それを使って世界の一部を変更する。いわば神を媒介に世界に自分の意志を伝える力だ。神威を使うのに特別な道具や技術は必要ないが、誰もが使えるわけではない。その才は純粋な遺伝要素によってのみ受け継がれる。そしてその能力を持つ者を神威操者——あるいは神使いとも呼ぶ。

神威一式——羅炎。^{ろえん}

神威を使うには大気中の塵を体内に取り込み神へと硝化するというアクションが入るため、準備から発動までにはどうしても若干のタイムラグがある。が、真雪の神威はその常識を打ち破るような精度と速さで展開された。今度はフェイントではない。純粋に攻撃のための力。その速度と威力に男がぎょっとしたように目を見張り、慌てて拘束から逃れようとする。だが遅い。

腹の疵が疼く。その疵が逆にたった一つの心理を脳裏に告げてる。

信じるな。考えるな。疑問を持つな。死にたくなければ——二度と殺されたくなければ、やられる前にやれ。

多分きつと、

この時の俺は

正気を失ったんだと思う。

俺にとっての大切な（後書き）

一応、毎日の更新を心がけております。

読みにくい点や間違いなどございましたら、ご指摘頂ければ随時対処していく予定です。

彼の数奇な人生

躊躇いもなく。容赦なく。勿論優しさなど欠片もなく猛る火炎をまとった拳を男に向かって振り下ろす——と、その寸前で。

何の前触れもなく唐突に。

脳を揺るがすような衝撃を食らい、真雪は真横に吹っ飛んだ。比喩ではなく、冗談抜きに二・三メートル程の距離を文字通りノン・バウンドで飛んで行き壁に激突したところでようやく止まる。が、そこで落ち着く暇はない。

「……………っ！！？」

咄嗟に何が起こったのか。考える暇もないが、身体の反応は理性の復活より迅速だった。吹き飛んだ拍子に拘束の緩んだ（つまりは一緒に攻撃された）男を投げ捨て、全力で防御に回る。正気を失くしかけた頭でさえ、瞬時に理解出来る程の圧倒的な危機。

大気の塵が一瞬で収束する。続く連撃もまた初撃と同じく簡潔で強力だった。知覚できるギリギリの速度で放たれた神威が迫ってくる。何の練成もされていない、殺気も悪意も敵意すらもない、ただの強靱な神の塊。たとえばそれは、子供が雪球を作るような。目の前にあるものを、単に無造作にまとめて固めただけだといわんばかりの大雑把な構成。にも関わらず、その一撃が冗談のように重い。完全にはかわし切れず、拳に纏った神威の炎で相殺する。押しつぶされそうになるところを、なんとか必死で堪えきる。覚えがある、この感覚。ヤバイ、これは——

（月日と同等か——あるいは、それ以上の神威能力者！？）

つまりこの相手は、現WIS会長にして当代最強の神威能力者である祖母と匹敵する実力を持っている事になる。

（冗談じゃねえ）

そんな者がその辺に気軽に転がっているとは思えない。が、そうとは思えない。

何かが閃いたわけではない。ただなんとなく直感に従って、真雪はその場で振り向いた。——時には既に間一髪だったらしい。いつの間にそこにいたのか。触れ合う程に近づいていた小さな影が、眼前に迫っている。寸前から繰り出される蹴りを反射神経に助けられてかわし、バックステップで飛びのくように距離を取ると、相手はそれ以上の追撃をしてこなかった。それでも完全にはかわし切れなかったのか。一拍遅れて、髪の一房がはらりと落ちる。目の前を落ちていく自分の黒髪と、その向こうに立つ人影を見て、

「……………」

絶句する。

そこにいたのは小さな子供だった。

鮮烈な真紅の着物に、想像以上に小さな矮躯が包まれている。普通の着物ではなく、こちらでもまた先ほどの男と同じく奇妙な型の衣装だった。上の丈が短く下には袴を履いている。ぱつと見の印象で一番近いのは巫女さん衣装だったが、あれは白と紅の上下だし少し形も違う。真雪は知らなかったが、それよりもっと似ているものが平安時代に流れ巫女と呼ばれた白拍子の衣装だ。但し、彼女達が聞いているのが白の水干だったのに対し、目の前の小柄な人物が着ているのは上下共に目の覚めるような真紅の衣だった。なんだろう。局地的な和服ブームなのか？流行に乗り遅れたのか俺？

雪白の肌。濡れたような黒瞳には強い意志の光が浮かび、年相応にきらきらと輝いている。驚くほどに整った、どこか中性的な顔立ち。否、整いすぎたが故にそう映るのだろう。なまじ美しすぎるものは、えてして性別すらも超越してしまうものだ。

着物を着ているため身体のラインがはっきりしないが、どちらにせよこの歳と身長では外見だけではつきり識別できるほど成長していないだろう。服を着ているというより、紅い布に包まれているようだ。そのせいか、どこか七五三じみた印象を受ける。

腰まで届く黒髪はゆったりと自然に流れている。艶やかな長い髪人間ではない。何か別の生き物だと言われても信じたかもしれない。

一目見ただけでは、年齢はおろか性別さえも区別できない。が、こんな状況にも関わらず真雪は思わず一瞬見蕩れてしまった。そのくらい、とても綺麗な生き物だった。

一目見て誰かに似ている、と思った。だけどそれが誰か分からなかった。

「あ、明様……」
あかる

部屋の隅に避難していた——にも関わらずすっかり巻き添えを食らったらしく、何やらずたばろの青年が、困惑気味に呻く。が、名前を呼ばれたその子供は気にも留めず無造作に、てくてくとこちらに向かつて歩み寄ってきた。嵐でも通り過ぎたかのような室内（自分でやった）の様子を見回し、

「やれやれ……」

と、仕方なさそうに華奢な肩を竦めた。

外見通りの高い声。

改めて近くで見ると、思った以上に小柄だった。身長は真雪の胸ぐらいまでしかない。とはいえ、彼の身長は平均日本人よりも遥かに高いので、そういう意味ではこの綺麗な生き物のほうが普通だろう。ミニモニに入れるかギリギリのところだ。まあ、多分成長期なので、順調に育てば入れない可能性の方が高い。などと場違いに呑気な事を考えていたせいかもしれない。次に起こる出来事に咄嗟に反応出来なかったのは。

「うりゃっ」

唐突に。

正面から腹に前蹴りを食らい真雪はうめき声を上げた。小さな裸足の爪先が、突き刺さるように綺麗に深々と食い込んでいる。

狙い済ましたかのように、ピンポイントで例の傷口の真上にヒットした。

想像を絶するほどのダメージを受けた。

身体を貫通したんじゃないかねえかと思う程の痛みに、真雪は思わず身体を折ってかがみこんだ。おかげで子供より身長が小さくなってし

まっただが、相手はそんな事は気にしないらしい。どころか、もがくこちらの様子にすら構いもせず、文字通りに上から目線でなにやら尊大に腕を組む。

「まったく——なんだかやけに物騒な気配がするから何かと思って覗いてみれば……何を考えてやがるんだ、いましは。起き掛けにいきなり人の家で暴れるな」

男か女かも分からない、それでも息を飲むほどに美しいその生き物は、蹲るこちらを見下ろしながら不機嫌そうな口調でそう言った。

それが彼らの。

黒田真雪と明と呼ばれる少女との最初の出会い。

そして。

後に始まる真雪の数奇な人生の第一歩だった。

彼の数奇な人生（後書き）

PV が徐々に増えており嬉しい限りです。お気に登録して下さった方、ありがとうございます。

感謝の気持ちに本日第二段を投稿しちゃえ！

とりま、現在の目標はPV一日あたり百件越しか、お気に登録十件以上か感想・評価を頂ける事です。

叶ったらお祝いとお礼を込めて、真雪かヒロイン（明）のイラストを挿絵でのせようかと。あるいは、誰かのスピンオフとか。更新回数を増やすとか。ご希望あればリクも受け付けます。皆さまのご希望には柔軟に応えてまいります。一宮です。

これから

落ち着いて話を聞いてみれば。

自分が青年に助けられたのというのは、どうやら本当だったらしい。他出からの帰り道、瀕死の状態で倒れていた真雪を、そのまま連れ帰って治療してくれたそうだ。先ほど聞かされたのと同じ内容だが、冷静に聞けばなるほど、別段不自然なところはない。それに記憶が曖昧なのではつきりと確信はないが、自分が意識を失いかけた時に助けを求めた『誰か』の声と青年の声はとてもよく似ていた気がした。

「ふうん……それを聞くとまるで俺がとてつもなく恩知らずで失礼な奴みたいだな」

「いや、実際かなり失礼で恩知らずな奴だと思うけどね君。私もまさか純然たる善意で助けた筈の人間に、問答無用で襲われるとは思ひもしなかったよ。拾い犬に手をかまれるとはまさにこの事だ」

「はっはっは！まあ、もう謝ったんだからいつまでも小せえ事を気にするな。笑って許しとけよ。大人だろ」

「年齢で言えば君だってもう充分に大人だろう……」

そこはかとなく理不尽そうな面持ちで真雪に胡乱な眼差しを向けてくる。

青年は伊々美^{いじみ}と名乗った。

年齢、二十二歳。初対面の時に年上だと思った印象は間違いでなかったらしい。年の割りに落ち着いた雰囲気のあるせいか、一見すると大人っぽく見えるが一度話してみると相応な闊達さが伺えた。

「伊々美？変な名前だなー。なんか呼びにくいし」

「……仮にも、年上でほぞ初対面の命の恩人に対して、びつくりするぐらい正直すぎる感想だな。君には年長者と恩人に対する敬意というものがないのか？つくづくもって失礼な子だな」

「あるぞ。一応。まあ、それはそれとして名前が変なのは事実だろ」

ばつさりと告げると、伊々美はそこで黙り込んだ。言っても無駄だと思ったのかもしれないし、あるいは結構本気で気にしていたのかもしれない。

既にお互い簡単な自己紹介は終えている。こちらが年齢を名乗ったときだけ、伊々美は驚いたように目を見張った。

「十八歳？本当に？とてもそうは見えないけどな」

「そうか？だったらいくつくらいに見えるんだ？」

「改めてそう言われると、それはそれで返答に困るんだけど……そうだな、明様と同じぐらいだと思ってたよ」

「いや、それにしちゃ俺身長がデカすぎるだろ」

この歳になつて中学生に間違えられるとは心外だ。自分は決して年少に見られるタイプではないのだが――

「いや、身長云々というよりむしろ……まあいいや。ところでその後、体調はどうだい真雪」

「ああ、おかげさまでそこそこだ」

実際、腹の疵はまだ完治こそせぬものの痛みもほとんど癒えている。回復は時間の問題だろう。

「うん。君は元々、瀕死の状態だった時も無意識に自分で神治療をしていたからね。普通に比べて回復は早いよ。この分だと後遺症も残らないんじゃないかな」

傷の具合を確かめながら、てきぱきと包帯を取り替える。傷口からはもう新たに血が滲む事もなく、傷口自体も塞がりかけていた。

「とはいえ、まだ完全に治ってはいないんだから無理は厳禁だよ。

今しばらくここで大人しくしていないさい。話を聞くのは、それからだ」

「至れり尽せりで申し訳ないが……話つっても俺にはもうこれ以上喋れる事なんて何もないぞ」

「真偽を問うのは残念ながら私ではないのでね。とはいえ、まだ先の話だ。あ、それと君の服。返しておくよ」

言いながら、伊々美が差し出してきたのは、綺麗に折りたたまれ

た学ラン一式だった。ここに来るときに自分が身に着けていた衣服。広げて確認して見ると、制服には一滴の血の染み（と牛乳の染み）さえ見当たらなかった。ちょうど、今の自分の傷口の上に当たる、刺された筈の箇所にも破れた痕は無い。丁寧に繕ってあった。しかも繕うといつてもただ縫い合わせただけではない。破れた付近の糸を解いて生地の間目に沿ってきちんと糸を通してある。所謂かけはぎという技術だ。現代では家庭科の授業ですら習わない。服の修理に出せばやって貰えるが手間がかかるので結構な金もかかる。それをこんなにあっさりとやってくれるとは、

「……ロスト・テクノロジーだなあ」

「え？何か言った？」

新品同様になった制服の状態を試す眇めつしながら感嘆の声を漏らすと、聞きつけた伊々美が怪訝そうな声を上げた。真雪は誤魔化すように「なんでもねえよ」と首を振り、まるでクリーニング後のように綺麗になった制服をもう一度見た。

「ありがとう。洗うだけじゃなくて破れた所も直してくれたんだな。俺、裁縫とか一切出来ないから助かった」

「どういたしまして……それにしても変わった服だね。見たこともない意匠だ。真雪はよほど遠くから来たんだね」

「まあ、遠くつつつちゃ確かに遠くではあるんだが……」

そのあたりの事は適当に言葉を濁しつつ、視線をそらす。が、伊々美は特に気にした様子もなかった。

「まあ、変わってはいるけど、実際動きやすそうな服だね。真雪は背が高いから普通の着物じゃ丈が足らないだろうしな」

百八十センチを超える真雪の身長は、現代高校生としてもかなり大きいほうに入るが、ここではずば抜けて長身の部類に入る。成人男子という点では伊々美の身長も決して低くは無い。むしろ、周囲と比べればはつきりと長身に属するはずだが、それでも彼の身長は真雪よりも十センチ程低かった。

「それから、これも君の物だろう。忘れないうちに一緒に渡してお

くよ」

言って、伊々美がにつこりと笑顔で差し出してきたのは、思い出したくもない一品だった。彼に致命傷を負わせた刃。薄めの刀身には武器というよりも芸術的な美しさがある。

自分でもはつきりと分かる程度には顔を引きつらせ、一旦迷ってから真雪は結局その刃を受け取った。当たり前だが、あの時についた血は綺麗に拭われている。

「……いや、確かに俺が持ってきたものには違いないんだろうけど。普通、これを俺の持ち物だって思うかあ？」

「うん？でも君の腹に刺さっていたんだから君の物で間違いないだろう？」

凶器を私物扱いしないでくれ。

何一つ疑問などないように。きょとんとする伊々美に真雪は仕方なく、やけくそじみた苦笑いを浮かべてそして――

「――さあて。これからどうすつか」

これから（後書き）

あれ？なんか昨日の時点ですでにP.V百件越えてました。ありがとうございます！

てなわけで、宣言通り真雪のイラストを挿絵でのせますね。て、も挿絵入れたことないんで、やり方いまいち分かりませんが。第二章の一ぐらいに入れたいと思ってます。

ていうかみてみん様には載せたのですが、それを挿絵として小説に貼る方法がいまいちよく分かりません。誰か助けて。なぜ？

現は夢

回想シーンを振り返り、屋敷の庭で風に当たっていた真雪はぽつりと独りごちた。なんとなく手持ち無沙汰になり、伊々美から渡された刃を手の中で持弄ぶ。

自分の腹部を貫き根元まで血塗れた刃にも、今では曇り一つすらない。磨きぬかれた刀身は新品同様に冴え冴えと輝いており、美しくすらあるがそれでも人を傷つける凶器には違いない。その刃を指先でなぞるように撫でて、ぱちん……と鞘に戻した。元々は鞘など無かった筈だが（鞘の代わりを果たしていたのが自分の身体だったわけで、それは間違いない）作ってくれたらしい。つくづく至れり尽くせりだ。柄にあわせて作られた白木造りの鞘からは新しい木の匂いがした。

そういえば……、と思う。

そういえば、白木作りの刃子なんてあの男も随分な古典趣味だな。現代では、こういった和刃よりも西洋ナイフのほうがずっと安価で簡単に手に入る。別に切れ味でもさほど劣るわけではない。

なにか拘りでもあんのか、これ？

当てもない疑問には当然答えなど帰ってこない。そもそも、一体どこからその答えが返ってくるというのだろう。本人に聞けるならばまだしも——こんな違う場所で。

真雪はうんざりと溜息をつく、頭と一緒に思考を振り払った。持っていた刀を帯に差し込む。

彼が着ていたのは馴染みの制服ではなく、着付けて貰った着物だった。慣れない和服は動き難くはあるものの、それでも今はまだなんとなく学ランを着る気になれなかった。上掛けを羽織ってはいるが桜の花咲く今の季節、夜風が若干肌寒い。

永延三年 四月。

時遡ること遙か千年の昔、一条天皇の納める御世。古の京の都――

―平安京。

目が覚めた後で。現在の場所と時間を尋ねる真雪に、伊々美は事も無げにそう答えた。

「マジかよこの状況……」

うんざりとぼやく声にもさすがに力がない。

なぜここにいるんだろう？

なぜ京都なんだろう？

そしてなぜ千年も前なんだろう？

「千年前じゃなあ……さすがに知り合いなんて誰も生きちゃいないだろうしなあ……」

せめて百年くらい前だったら、月日あたりが生まれてたかもしれないのに。

ちよつとした現実逃避にそんな妄想に逃げる。実の孫にすら実年齢を明かそうとしない祖母ではあるが（以前、さりげなく調べようとしたら本気で半殺しにされた。以来、生命の危険があるのでその話題には触れないようにしている）噂では幕末あたりからは既に生きていたらしい。そんな祖母なら頑張れば平安時代からもうっかり生きていそうな気がするが――いや、やっぱり無理だ。というか、そこは一応まだ存在しないでおいて欲しい。なんというか、最低限人として。

「……っーか、なんでいきなり平安時代なんだよ。本気で意味分かんねーし」

一体、どこで何をいくつくらい間違つてこんな目にあっているのか？

学校帰りに幼馴染に飯奢つて、家に帰ってきたら謎の泥棒にいきなり腹刺されて、それで死にかけてたらそのまま意識失つて、目が覚めたら狩衣でコスプレした変なにーやんがいて、そいつをぶっ飛ばそうと思つたら逆に近くにいた人形少女に返り討ちに合わされて、しかもなぜか平安時代の京都にいた。

改めて状況を振り返り、その脈絡のなさにげんなりする。何の罰

ゲームだこれは。

いやまあ確かに自分は、高校を卒業したら独り立ちして家を出る覚悟は決めてたけど。決めてたけど決めてたけど、だからといってさすがに現代社会からも独り立ちする覚悟までは決めていない。

一体なんの因果でこんな目にあっているのか。獅子は我が子を千尋の谷から突き落とすというが、自分のようなゆとり世代にそんなスパルタ教育は過激すぎやしませんか？若者への試練にしちゃ、ちよっとやりすぎなんじゃないですか神様？

汝が小説だったらならば私は読むのをやめている、と言ったのが確かゲーテだったか。それに倣って言うと、仮に自分の運命に作者がいるなら、そいつに小説家の才能はなさそうだった。

この状況が運命の用意した試練だというのはなら、それこそ運命を呪うぐらいの方法しか思いつかない。

とはいえ、自分でも奇妙なほど冷静に真雪はこの状況を受け入れていた。否——違う、決して受け入れているわけではない。が、こんな意味不明な状況にも関わらず、彼はなぜかこの場所が過去の世界であるという事実には、些かの疑念も抱いていなかった。どんなに突拍子のない事態であれ、ここが自分のいた場所とは違つてころだということだけは、はっきりと確信出来ていた。——なぜか。

らしくもなく重い溜息をつき、吐いた分だけの息を吸う。甘く濃い空気がゆっくりと肺を満たしていく。息を吸うたび、一呼吸ごとに隅々まで活力が行き渡る。彼のいた現代では考えられない程に大気が塵に満ちている。ふるい古い——太古の空気。

それだけで疑いようもない。少なくともここが、今までの世界とはまったく異なる場所だということを。

「一条天皇つーと……どのあたりだっけ？後白河？はもっと後か。あのあたりって天皇がころっころ変わってたからなあ」

ぶちぶちとばやきながら、脳内CPUの使用率を100%まで上げて、どうにか歴史の授業内容を再生させようとする。頑張れ俺の記憶力。

永延三年——西暦九八八年。現代から時遡る事約千年。一条天皇

の即位する平安中期。

幼くして即位した一条天皇の外戚として藤原道長が政治を支配した、世に言う摂関政治の政策が取られていたのがこの時代である。

平安中期では平安時代の中でも特にその文化が花開いた時代とされ、後世に伝わる芸術家や文人などの数多くがこの時代に生まれている。土佐日記——紀貫之、清少納言——枕草子。紫式部——源氏物語、など。

また藤原氏の摂関政治に代表されるように、貴族勢が栄華を誇った時代でもあり、以降これを過ぎると武家が対等し始め、鎌倉幕府の幕開けとなる——

「と、確かこんな感じだったか」
よく覚えていないけど。

脳内から引き出された情報量の意外な多さに満足する。

歴史の授業選択を日本史にしてよかった。

生まれて初めてそう思った瞬間だった。

とりあえず現状把握が出来たのはよいとして——

「結局のところ、なぜ俺はここにいるんだろう？」

基本原点に立ち返る。

現状に納得が出来たところで、他の疑問までもが消えるわけでない。もしも仮にここが真実、千年前の世界だというのなら——

どうして俺はここにいる？

どんなに脳内をググってみても、その謎を解く鍵だけは思いつきそうになかった。

鍵。キーワード。ロゼッタ・ストーン。

例えばこれが白雪だったなら。

もしも今この場にいるのが自分ではなく、全知の異能を持つあの不愉快な姉であつたならば。恐らく彼女にとっては、この程度の状況などそもそも疑問にすらならないだろう。真実の意味でどうとでもするだろう。彼女はこんな事で悩むようなレベルの低いステージにはいない。過去も未来も現在も普く全てを識る彼女の前では、あ

らゆる疑問がその意味を失くす。悩む事さえも出来ない絶対的な才能。

でも自分には無理だ。

現実の自分は、あの日家で刺されたまま植物状態となっており、今のこの状況が全て眠っている自分の夢なのだと聞かされても、存外あつさり信じてしまつかもしれない。

果たして俺は。

蝶の見る夢を見ているのか、蝶の夢を見ているのか。夢の世界にいる者に、現実と夢の区別などつくはずが無い。

世界そのものが入れ替わってしまったならば、現実との差異など見出せる筈がない。

現は夢。夜の夢こそ真なり――

「……子供騙しじゃねえんだっつ」

夢も現も変わらない。世界の中心を自分に据えれば、どこであるうと揺らぐ事はない。

「つーか、これがマジに夢じゃないとしたら、俺は今頃あっちで行方不明扱いか？家族が失踪届けとか出してればだけど」

そう呟き、家族の顔を順番に思い浮かべてみる。姉。祖母。父。俺の家族達。

とりあえず一年くらいは失踪届けを出される可能性もなさそうだという結論に達し、真雪はちらりと右手に視線を向けた。ごつごつと筋張った指には、古風な指輪が嵌められている。

「でもま、この指輪もさつさと深夜に返してやらにやいかんし。引越しの準備もあるしな。雪がいねーんだったら俺一人でなんとかするしかねえか」

諦観でもなく気負うでもなく。

ごく当たり前のようにそう言うと、彼は大きく伸びをして藍に染まった夜空を見上げた。

汚染物質の欠片もない澄み切った空には、眩いばかりの星屑がきらきらと輝いていた。

現は夢（後書き）

活動報告にも書きましたが、真雪イラストを第二章の『ある少年の日常』アップしました（出来た）

某友人のイラストレーター、Sino に描いて貰った美麗な一品です。ちゃんと本人から直で貰ったもので、決して無断でパクって来たわけじゃありませんのであしからず。

他にもあるんで、また記念の時にちよいちよい公開していきたいと思います（お気に入り登録50件！とか。いや、目標ですよ目標）。

と、明日あたりまた題名変えるかもです。安定しなくてすいません。ご不便をおかけして恐縮ですが、続きを読んで頂ける場合、作者名で検索していただいた方が確実だと思います。

宜しくお願いします。

塵

寝ても見ゆ 寝ても見えけり おほかたは

塵。

塵とは何か。

その命題について、正確に解き明かすことの出来る人物は未だ存在しない。生まれた時から塵と共にあり、その知識に関して人類とはかけ離れた歴史の蓄積を持つ異端児にとってさえ、まだ謎とされる部分が多いらしい。とはいえ、一説によると異端児達は既にその解明を終えていて、単にその結果を出し渋っているだけだ、という説もあるが。そのあたりは定かではない。

ただ一つ言える事は、塵は遥か古くからこの世界に存在していた、ということだ。それこそ、誰もその存在について疑問を思わないくらい昔から。

例えばそれは、空気のように水のように大地のように光のように。この世界にあつて当然のものなのだ。塵という物質は。

それは原子より尚極小の単位で空气中に存在し、その総体に対し全体含有量は約3%。常温常気圧下ではその性質が変貌することはなく、比較的安定した物質である。稀にごく高密度の塵が発生する場において、塵そのものが硝化し結晶となる事がある。これを精霊石と呼ぶ。

塵をエネルギーとして転化する際には必ず精霊石を使う。塵は現代社会にとつてもはや欠かす事の出来ない存在だが、反面デメリットも併せ持つ。それが『精霊現象』だ。

高密度の塵、あるいは凝った塵がなんからかの形で周囲や環境に影響を及ぼす事を俗に『精霊現象』と呼ぶ。これに対し無機物・有

機物を問わず、塵に接触した結果本体が蝕まれる事を『精霊化』と呼ぶ。

現在（無論これは現代社会においての現在だが）エネルギー源として人類が使用出来る塵は大よそ全体の１％にも満たない。塵を使用するには濾過作業による純化が必要となるが、この設備の製作が追いつかないためだ。ところが、世の中には純化をせずに塵を直接体内に取り込んで操れる人種がいる。彼らを総じて異端児と呼ぶ。

生まれつき塵に対する強い耐性を持ち、のみならずその塵を自分の自由に使える存在。古くは霊能者・神・陰陽師・魔法使いなど、時代や国と共に名を変え、立場を変え敬い蔑まれてきた彼らだが、近年になり塵が解明されその名称も異端児と統一される事になった。異端児の能力は大きく分けて三種類に分別される。現象操作・精神支配・運命干渉、の三つだ。

異端児が何故その身をもって塵を操れるのか、その謎は未だ解明されていない。彼らは人類ではない新たな種族だという生物学者もいる。ただ一つ言える事は、異端児は純粹に遺伝要素によつてのみ受け継がれ、その血が古ければ古い程に強力な力を得る、という事だ。

じんわりと汗が滲んでいる。

適度に使用された筋肉は熱を放ち、廻る血の鼓動が若干早まっているのを感じる。風は少し冷たいが火照った肌に気持ちいい。地面が土だからか、それとも近年の温暖化現象は自分の想像以上に地表温度を上昇させていたのか。同じ季節にも関わらず、この時代の春は現代と比べてやや肌寒い。この環境下に口クな防寒具もない状態で冬を過ごすのかと思うと、素直にぞつとする。

なんとか冬までには帰ろう。真雪は胸中で密かに決意を新たにしていた。どちらにしろ、これだけ汗をかけば気化熱ですぐに冷めるだろ

う。

一通りの型を終えて残心の姿勢を解くと、真雪はゆっくりと息を吐いた。滴る程ではないが、それでも全身に汗をかいている。やはり大分身体が鈍っていたらしい。汗に体温を奪われる前に、乾いた布で身体を拭くと近くにおいてあったシャツを羽織った。

あれから三日後。

塵治療のおかげか若さの力かは不明だが、真雪の疵は既に完治していた（人間じゃねえ）傷口こそは残ったが、内蔵などにも影響はなく後遺症も残らないらしい。

現状把握と鈍った身体のリハビリのために外出を申し出ると、伊々美はあっさり承諾した。そもそも、別に監禁しているわけでもないので許可は必要ないだろう、というのが彼の意見だった。言われてみれば尤もだ。

「ただ、出来ればこの陰陽寮からはなるべく出ないで欲しいな。まあ、君がどうしても外に行きたいっていうなら、こちらにも止める権利はないんだけど。最近は何と物騒だからね」

「物騒？なんかあったのか？」

「精霊現象が頻発しているんだよ。その被害が広まっているせいで、今は神威能力者に対する批判が強いんだ。どこで暴動に出くわすかわからないから、今は他出は控えた方がいい」

「りょーかい」

元より、地図も観光ガイドも無い状態で地の利も文化も分からない場所を一人でうろつくほど、冒険心に富んでいるわけではない。散歩程度なら敷地内を歩くだけでも充分だ。真雪は伊々美に礼を言っただけでその場を後にした。

陰陽寮。

この国でもっとも古く巨大な異端児組織である。天武天皇時代に創設され、祭りや呪い等を専門に扱う公的機関であり、天候による災害や飢饉・塵災害や精霊被害など人の手ではどうしようも出来ない事態が発生した時は、彼らが対処にあたっていた。塵被害はとも

かく、天候やら伝染病やらは異端児であれきつぱりとどうにもならないとは思うのだが、塵の原理も解明されていない時代ではそんなものだろう。異端児にとってはいいい迷惑だったに違いない。

やがて明治時代になってその名称と組織そのものは解体され、その後はWISの一部として吸収・合併されたが、現在でもその名残は残っている（現代でWISの日本本部が京都にあるのはそのためだ）

「……だったかな、確か」

この辺の知識は歴史の授業というより五月に受ける試験対策だ。WISの歴史と成り立ちについて。とはいえ――

「まさか当時の本物見れるとは思わなかったよなあ……さすがに」
現在、真雪が暮らしているこの建物も現代では歴史資料館として残っているが、あちこち修復されたりなんなりで当時の面影を残しているのは外観だけだ。大分印象が違う。

建物全体はかなり広い。自分の家も大概だと思うが、ここは更にそれ以上だった。当時の陰陽寮は純粋な異端児のみの組織で、同時に彼らの詰め所も兼ねていた為に常時百人以上の人間が生活している。基本的に平面構造なので敷地面積は半端なかった。この中だけでまるで一つの町のように完結している。まるで一つの世界のように完成された、閉ざされた世界。

庭園にはとりどりの野草や草花が植えられており、その間を擦り抜けるように清流が流れ池に繋がっている。濁りのない水は水底すら覗けそうなほどに澄んでいた。

「精霊現象ってことは、どっかに精霊石でもあんのかな。それが影響を与えて塵災害が広まってる、とか。ま、どっちにしろ俺にや関係ねーけど」

気の無い調子でばやく。そう。別に関係ない。

衣食住の面倒を見て貰っている以上、完全に無関係とはいえないが（彼はそこまで不義理な人間ではなかった）この世界この時代にとって所詮、自分はただの迷い人に過ぎないのだ。

感謝はしている。恩も感じる。ただそれでも、あまり深く関るべきではないのだろう。

異邦人の少年は見慣れぬ世界を彷徨いながら、そんな事を考えた。勿論、行くあてなんかなかった。

痛い娘

「……お？」

散歩を始めてから大よそ三十分ほど過ぎた頃（ここに来た時の数少ない所有物だったシチズン製腕時計による計測。因みに太陽電池式。ビバ文明）真雪は進行方向に見覚えのある赤い人影を見つけ、思わず足を止めた。

「んんー？」

目測、約三百メートル程。その距離ですらはつきり分かる、狂ったように鮮烈な真紅の衣。

そもそも現在からの迷い人である真雪にとって、この時代での知り合いなんてそれこそ数えるくらいしかないのだが。その数名の中でも、あんなまっかつかな服を恥ずかしげもなく着ている人物なんて、一人しか心当たりがない。

「確かあいつ、明——とかいったっけ？」

伊々美が呼んでいた名を思い出す。

因みに視力は二・〇。

見間違いではないだろう。

一瞬、このまま踵を返して戻ろうかと思ったりもしたが（もともとが気晴らし程度の散歩なので特に目的も決まっていな）コンマ三秒程考えて、そのまま歩みを進める。ここで方向転換するのもなんだか逃げ出すようで癪だ。

まあ、相手もまだ子供だし。

無視するというのも大人げないだろう。

挨拶は人間関係の基本だ。

そんな事を考えながら、進む方向は変えずに真っ直ぐ歩いていく。さほど親しい仲でもないのであり距離が近くても警戒されるだけだろう（とはいえ前回被害を受けたのは間違いないこちらなのだが）あの年頃の少女は繊細だと聞く。地面に座り込んでなにやらぼーっ

としている赤い姿に近づいたところで、一步分の距離を置き努めて明るく声をかけた。

「よお。何やってんだお前」

少女——明はゆっくりと振り向いた。歳のわりに妙な貫禄のある瞳がこちらを捉え、温度のない声で平坦に答える。

「蟻を殺してた」

「……………」

気軽な挨拶に対して、予想外に痛い返事が返ってきた。

「……えーっと。楽しいのか？それ」

なんと答えていいものか分からず、思いついた一言を告げる。対して相手はどうという事もなく細い肩を竦め、

「別に。蟻の行列見つけて潰してただけど全然減らなくて。いつまで経っても途切れないからなんとなく続けてただけ。でも段々飽きてきたな。巣穴に湯でも流しこむか」

「なぜそこまでして止めを刺そうとする！？蟻にどんな恨みがあるんだお前」

「馬鹿だなあいまし。蟻に恨みなぞあるわけないだろう。こんなのただの暇つぶしだよ。退屈だったんだ」

「お前は暇になると昆虫虐殺に走るのか？」

もう少しマシは趣味を見つける。

一応年長者として心の底から適切なアドバイスをしてやるが、明は特に気にした様子もなく立ち上がると、うんつと窮屈そうに伸びをした。近くで見ても、やはり随分と小柄だ。同世代の子供と比べても小さい方に入るだろう。とても出会い頭に人に蹴りをかますような人物には見えない。

だがこうして改めて見てみると、やはり明は驚くほどに麗しかった。

漆黒の大きな瞳は印象的に煌めき、長い睫は綺麗にそりかえって目元を華やかに縁どっている。こぶりだが高い鼻と、一本の無駄もない秀麗な眉。白い肌は練絹のようにすべらかで、形よい唇は赤く

熟れた果実を思わせる。

背中に垂らした長い髪は黒々とした艶を放ち、一房を組紐で結んでいる。

性別すらも超越した完璧なる美。触れたいと願うには、彼女の造作はあまりに整いすぎている。

タイプはだいぶ異なるが、彼女を見て真雪はなぜか姉を連想した。白雪や月日に匹敵する美貌の持ち主を見るのは真雪にとっても初めてだった。あまりに整いすぎていて、同じ生き物だとは到底思えない。美人には耐性のあると思っていた自分でさえ、うっかりすると見惚れてしまいそうになる。

——彼女が、生来そのままの美しさを誇る、普通の状態であれば。

痛い娘（後書き）

サブタイトル、最初は明媛だったはずなんだが、読み返したら変わってた。はて。。。？

違い（誓い）

改めて、少女の顔を観察する。少なくとも、顔面のあちこちにその美貌を覆い隠してしまうような白いあて布がされており、そこにわずかに滲む血の跡が見えるとなれば、見惚れるどころの話ではない。

こちらの視線に気づいたのか、明は少し顔をしかめた。あまり不躰に見すぎたらしい。あるいは、少女の顔でなく怪我を見ていた事が気に障ったのかもしれない。一瞬、謝ろうかとも思ったが、
「なに人の顔じろじろ見てるんだ。私が思わず見惚れるほど絶世の麗しさなのは知ってるが、いましごときが馴れ馴れしく見ていいものじゃないぞ。ちよつとは弁えろ」

かなり派手に勘違いをしていたので、謝るのはやめにした。

これだけ綺麗な容姿をしていれば、多少の自信過剰は仕方ないかもしれないが、それにしても自分の外見を謙遜する美人と自慢しちゃう美人ってまたえらく印象が違うんだな。

嘘でもいいから「普通の子」ぐらい言っておけよ。

「つか、いましってなんだ？」

会話の流れ的にいけば二人称の代名詞っぽい感じがする。でも伊々美は『君』という言葉を使っていたし。ひよっして古語とかか？
とはいえあえて聞く気にはならず、さして深く考えもせず真雪はあっさりと疑問を放棄した。彼は古典の授業にはあまり勤勉ではなかった。とはいえ、呼び名は訂正しておこうと思い、改めて名乗る。

「いましじゃねーよ。俺の名前は真雪だ。黒野真雪」

「真雪？ああ、確か陰陽博士の一人がそんな名前の奴を拾ってきたって聞いたな……あれ、いましか」

「つか、普通に呼び捨てかよ……言つとくけど俺、お前より年上だぜ？敬語を使えとは言わないけど、せめてさん付けくらいしろよ」

「はあ？」

きょとんと驚愕の——恐らくは心底と思しき驚きの色を浮かべ、明が見下すような軽蔑の眼差しを向けてくる。いや、美少女がそんな顔をするな。

「どうしてこの、有史以来最高にして最高にして最高の天才と崇められ称えられる私が、たかだが先に生まれた程度の理由で、いましごときの凡俗にわざわざ敬意を示さねばならないんだ？ いましが私を尊敬するならともかく」

「……いやなんか結構失礼な事言われてるけど、とりあえずごめん俺が悪かった。いいよ別に呼び捨てで。何もそこまでしてさん付けして欲しいわけじゃねーし」

考えてみれば自分だってそもそも、伊々美のことを呼び捨てにしている。今更、他人にだけ敬称を押し付けるといいうのも妙な話だ。

「まあ、それはそれとして。お前その——」

「お前って誰だ？」

「……なんて呼べば満足だ？」

「他の者からは明媛と呼ばれているな」

「んじゃ明で」

媛は大胆に省略した。意外なことに少女はそれについては咎めなかった。

「——で、話を戻すと明どうしたんだよ、その怪我」

「ん？ ああ、これか」

言われて初めて気づいたように、明は自分の頬に触れた。だが触っても肌の感触はないだろう。彼女の小作りの顔をなかば半分以上覆うように頬にも布があてられている。

「別に大したことない。ちょっと怪我したんだ」

「だからどういう理由で怪我をしたのかって聞いてんだよ」

顔面の傷が一番目立っていたのでうつかり無逃しそうになったが、よく見ればその細い手足や身体のおちこちに傷らしき跡がある。決して過去の怪我ではなく、つい最近のものだ。

虐待……？

まさかとは思うが、うつすらとそんな考えが脳裏をよぎる。例えどの角度からどう控えめに見たところで明は『か弱い被害者』のポジションに収まる人間には見えない。そも、この時代に果たしてネグレクトなんて文化があるのかは不明だが、可能性だけで放棄するには彼女の怪我はあまりにも酷かった。

が、本人にとっては大した事でもないらしい。例によってあっさりとした口調で「狩りに行ったんだよ」と答えた。

「狩り？」

「うん。精霊現象の。最近、なんだが塵が活発になってるらしくてな。そこで鎮禍^{ちんか}に行つて少し失敗した」

「失敗つて……」

隠す程の事でもない。事も無げに言う明の様子に絶句する。聞かされた内容にはない。だが彼女はきつと、それを本心で言っている。それが理解出来たからこそ、真雪は言葉を失った。

その幼さで、命を懸けて傷つく事を当然として受け止める、当たり前の事として受け入れる精神。

それは一体、どれほどの強さなのだ？

「どうした？突然黙りこくつて」

「……いや。ここでは明みたいなお子供でも鎮禍に加わるのか？お前以外にもちゃんと大人だっているだろ。そいつらに任せればいいじゃないか」

暴走する意志——精霊現象を沈めるには神威能力者が対処にあたるしかない。だが、神威を使える者は限られているし、ましてや彼女ほどの強大な能力者は、陰陽寮とてそうそうはいないだろう。だけれどそれでも。

こんな子供が。綺麗な顔に傷作つて体中怪我だらけになって、命までかけなくてもいいんじゃないか？

「なんでだ？」

恐らく彼女からすれば甘い思考であろう自分の言葉に対して。

明が答えたのは軽蔑でも嘲りでもなく単純な疑問だった。

「年齢なんて関係ないだろう。私は陰陽師だぞ。塵を鎮めるのが役目だ。それ以外になすべき事なんてない」

異端児が生きる存在理由。塵に抗える唯一無二の存在。

「失敗は別に恥じゃないし、生きていれば怪我なんて治る。民草が弱いのは罪じゃないだろう。戦えないほど弱い者達を守ってやるために私のような強者がいるんだ。私のほどの実力者が出来ない事を他の誰が出来るというんだ？」

「……それを本気で言ってるとしたら、確かにお前は強いんだろうよ」

根拠なき自信に満ち溢れた明の様子に、困惑を隠しきれずにぼやく。これが若さなのかそれとも単に幼さなのかは知らないが。

慈善であれ偽善であれ、自分を信じ切っている彼女は確かに強いのだろう。

理由なき正義ほど確固たるものはない。

「別に理由がないってわけじゃないよ。——そうだな。なんで戦うのかと言われれば確かに私が強いからだけど、なんの為に戦うのかと聞かれたら、それは自分の為だしな」

「自分の為？」

「ああ。父上の力になれる自分であるため、だ。身寄りのない私を引き取って、名を与え理由を与え生きる場所を与えてくれた。その父上の役に立つためならば、命の一つや二つ、そもそも惜しくもない」

彼女はごく自然にそう言った。

「父上のためにこの身体が傷つく事を恐れる理由も躊躇う必要も全くない」

それは当たり前のような気軽さで吐き出されたのに、信じられないくらい重い覚悟の言葉だった。

誇張でもなく誇大でもなく。まるで当然の事のように決死の覚悟を口にする彼女は、気高く美しく実に堂々として格好いい。そんな

少女の姿に惚れ惚れと感嘆する。

こんなにも輝かしい生き物だっただろうか？この年代の子供とい
うのは。

俺は。深夜は。白雪は。

果たしてこの歳の頃はとうだったのだろうか……？

一号さん

少女の気高い宣言に対し、真雪の口から出た感想はごく素直な一言だけだった。

「お前、えらいな」

「は？なに急に」

「いや、気にすんな。ただの正直な感想」

これがジエネレーションギャップというものだろうか。価値観の違いに圧倒的な格の差を見せ付けられた気分になって、真雪は心からそう呟いた。そのままなんとなく、感心の意を込めてばんぼん頭を撫でてやる。明は突然伸びてきた手に、きょとんと驚きの色を浮かべた。だが振り払いもせず、戸惑ったように対処に困っているようだった。

なんか妹が出来た気分になった。

「でもこいつ、妹系にしちゃ攻撃力が若干高すぎる気がするよな……」

「いきなり何寝言ほざいてるんだ？いまし」

うるんな眼差しを向けてくる美少女に、一つ思いついた事を忠告してやる。

「お前さ、人任せにしないのは立派だけど、だからといってそれが怪我を放置する言い訳になるかと思ったら大間違いだぞ。ここには治癒系能力者もいるみたいだし、とっとと治して貰ってこいよ」

暫く留守にしていたとの事だったが、先日になってその担当者が帰ってきたらしい。かくいう真雪の怪我也、帰還早々にその人物に治して貰ったので、今ではこうして無事に散歩にも出歩ける。腕は確かなようだ。

が、対して明は迷わずきっぱりと首を振った。

「嫌だ。私はあいつ嫌いだし」

「……なんでだよ。俺も前に治療してもらったけど、結構頼りにな

る感じだったぜ。同じ同僚だる仲良くしろよ」

「……あいつが頼りになるとか、絶対あり得ないだろ」

「ん？何か言ったか？」

ぼそりと呟く明の声に聞き返すが、彼女は面倒くさそうなしぐさで、話題をそらすように手を振った。

「いいや。——とにかく、私とあいつは相性が悪いんだ！前世で何か因縁でもあったとしたか思えないぐらいにな」

前世が登場しましたか。

「そんなわけだから、用事でもない限り奴には絶対に会いたいとは思わないな」

「いや、あるだる用事。治して貰え」

「用事があったとしても会いたいとは思わない。別にいいだろ。怪我してる本人が構わないって言ってるんだから。見かけほど痛みは酷くないし、今は神威の使いすぎで力が出ないけど、回復したらこの程度の怪我なんて自分で治せる」

「ガキみたいな駄々こねんな。つーか、本人良くても見てて痛々しいんだよ、お前のその怪我。せつかくご自慢の麗しさとやらが台無しだろうが。そんな状態でほつといたら、周りの人間にも心配かけるぞ。いるだろう。お前にだって心配してくれる友達とか」

「いないよ」

「いないのかよ」

きつぱりと。コンマ一秒の間さえもあけず明が断言する。

まあ、なあ……

あまり人の事を言えた義理でもないが、この性格と顔では確かに人付き合いは苦手そうではある。

友人どころか知人と呼べる程度の知り合いすら少ないに違いない。無意味に心が痛む話だった。

やれやれ。

仕方なさに溜息一つ漏らし、真雪は明の手首を掴んだ。彼女が一瞬、驚いた表情を浮かべるが——無視して意識を集中する。薄く

肉のついたその手首は驚くほど細く、少し力を込めただけでも折れてしまいそうなほど儚かった。

僅かに触れる手の先に熱が生まれる。人肌よりも熱く小さなその熱は、仄かな燐光を発しながら彼女へと移り、鼓動とともに強まって血潮と一緒に徐々に広がる。

少女の華奢な肢体が燐光に包まれ——刹那の間に弾けて消える。
「……お？」

そして光の消えた後には、明の身体から大小無数にあつた傷跡が、嘘のように消えていた。

塵の物質操作による人体活性術。治癒術の基本だ。

「治してくれたのか？」

「表面の傷塞いだけ。それでも一応破傷風とかの二次被害くらいは抑えられるだろ」

こちらの言葉を確かめるように、彼女は頬の布を剥がすと自分の手で触れてみた。新たに再生された柔肌は陶器のように滑らかで、見るからにすべすべとしている。その感触に満足したのか、彼女はにつこりと微笑んだ。

「ありがとう」

存外、素直にお礼を言われた。

裏も表もない、純粹な感謝の笑顔。恐らくは、大人になったら失われてしまうような。この年頃の子供にしか許されないであろうその無垢な微笑みは、控えめに見てもとても魅力的だった。

「細かいところは自分で治せよ。俺だって治癒はそんな得意ってわけじゃねーんだ。自分のならともかく、他人の怪我はあんまうまく治せねえし」

彼の使う治癒術は怪我の根源に対する対処ではなく、あくまで人体の持つ回復機能を強化して怪我を塞ぐ、という程度のものである。自身で使うにはさほど問題ないが、これが他人の治療となると格段に難易度があがる。自分の身体なら痛みや何やらで、治療の必要な箇所というのが本能的に分かるが、他人の怪我では外見から重症度

を推測するしかない。

あるいは。祖母・月日のようなクエストラス支配者級の能力者なら、死人だろうと蘇生させてしまうのだろうが。生憎、自分にはあそこまでぶつとんだ力はない。

いずれにせよ、神威能力者の基礎回復力は普通人より遥かに高い。この程度の怪我であれば、本人の言うとおり自分で治癒出来るだろう。

彼女は一通り自分の体を改めると、真雪に向き直り、感心の色を浮かべた。

「うん。綺麗に治ってる。さてはいまし、いい奴だな」

「どうしてそこに『さては』なんて接続詞が入るのか理由がさっぱり分からねえが、基本的に誰がどう見ても、俺は間違いない奴だ。ついでに身内と家族には無条件に優しいんだよ」

それを聞いて、彼女は少し怪訝そうに首を傾げた。

「身内？」

「ああ。仲間でもいいけどな。お前、友達いないんだろ。だったら俺が第一号になってやるよ」

実際、それは素晴らしい名案に思えたが。

彼女はそうは受け取らなかったらしい。こちらを見つめる黒々とした瞳に、僅かな陰が浮かぶ。

そこから？

真雪としては、その申し出自体は何の裏もない本心からの言葉だったため、少女のその反応は意外だった。宵闇のような瞳の中に、若干の怒りが滲んでいる。

「仲間だと？ いまし、わたしに同情でもしているつもりか？」

「いや、そうじゃねえよ。別にお前に同情する理由なんてねえだろ。ただ——」

なんと伝えようか一瞬悩む。が、結局彼は思ったままを口にした。

「お前、格好いいからな」

「はあ？」

少女は思い切り怪訝そうな顔を浮かべた。言葉が足りないかと思いい、補足する。

「ああ。俺はなんつーか……昔から、お前みたいに自分の意思を堂々と伝えられる奴が気に入ってたんだよ。誰に怯む事なく誰に気遣う事もなく、自分の目指す目的のために確固たる意思を持つ奴を尊敬してる。格好いいと思う。そしてなるべくなら、俺は気に入った奴とは仲良くしたい。だから、そういう奴を見つけたら、まずは自分から声をかける事にしてるんだ」

父親のため。恩人のため。

身体中傷だらけになりながら尚、命を失う事すら恐れないと、堂々と言い切った彼女の姿は。

無謀でもなく無策でもなく無覚悟でもなく無抵抗でもなく。

現実の痛みと苦しみを知った上で尚、断固たる意思を貫こうとする彼女の姿は。

とても、美しいものに見えた。

年齢など関係なく。充分、尊敬に値する程に。

「折角会えたのに、これきりになっちゃ勿体ないしな。用は、自分の好きな奴と単純に仲良くしたいんだ俺は」

「……なんだ。つまりはいまし、私に惚れたのか？」

「生憎だが俺は胸と背中との区別もつかない生物は恋愛対象に含めてねえ」

ナチュラルに不名誉な誤解をしている少女に対し、きっぱりと告げる。

つかさりげなく図々しいこの小娘。

なんの臆面もなく、ほぼ初対面の人間が自分に惚れてると断言しやがった。

どれだけナルシストなんだよ。

飛ばされた場所がここでよかった——と痛切に思った。この上、他言語圏なんぞに行っていたら、苦勞は今の比ではない。

「まあ、妙な誤解をせずするむ相手が増えた程度に思ってくれりゃいいんだよ。俺はお前を気にいった。だから今度から、困った時は声をかける。俺でよけりゃいくらでも助けてやる」

それを聞き、彼女は——本人には別に大仰なつもりもないだろうが——若手大衆芸人のように、やれやれとオーバーアクション気味に首を振った。この時代にはまだ西欧と国交を結んでないのに（それ以前にアメリカ合衆国が生まれてないのに）なぜか妙にアメリカンな仕草だった。

「大げさな科白を吐いてくれるものだな。いまし、異邦人なのだろう？ 自分の事もおぼつかない奴が他人の面倒まで見れるというのか？」

「余裕はなくても心はあるよ。人間だからな。心を亡くすのは人間失格した時だけだ」

「……神威能力者の癖に人間を名乗るのか。真雪は面白いな」
呟いて。

彼女は実際に、とても面白そうに嗤った。

それ先ほどの純粋な笑みとは違い、どこか奇妙に自嘲的な笑顔だった。

「……………？」

その笑顔に、一瞬どこか軽い違和感を覚える。が、疑問を抱いたのも束の間――

「ああ、いたいた真雪。ここだったのか。早く戻ってこいよ。伊々美様がお待ちだぞ」

御殿から掛けられる声に振り向くと、そこには那由多^{なゆた}がこちらに呼びかけながら手招きをしていた。

「ああ、悪い今行く」

さほど時間が立っているとは思わなかったが、思いの外、明と話し込んでしまったらしい。呼びかけに手を上げて応えようと、戻る前に念を押す。

「じゃ、呼ばれてるらしいんで俺戻るから。好き嫌いなんて言っていないで、ちゃんと治して貰ってこいよ」

またな、と。

まるで気の置けない友人のように、再会を前提とした挨拶をする真雪を、寸前で明が呼び止めた。

「――ところで、真雪。最後に一つだけ、教えて欲しい事があるんだけど」

「ん？なんだ」

「友達って何？」

.....。

そこからかよ。

ふあっしょんしょー

硬い板敷きの床に座り込み、真雪はぼんやりと外を眺めていた。遣り水を使わした庭園からは、ささやかなせせらぎが聞こえており、耳に心地よい。とりどりに植えられた四季の花（名前は分からないが）は、計算高く配置され見目も鮮やかに咲き誇っている。

陰陽寮は俗に寝殿造りと呼ばれる平安時代の貴族の屋敷に倣って作られた建物だ。ただし当然、並みの屋敷とは違い建物には常に数多の神威能力者——この時代の呼び名を借りるなら陰陽師——が詰めており、ここで生活も出来るようになっていく。

上・中級職クラスや、元より京に自宅のあるものは、勤めが終わった後はここに泊り込む事なく家に帰るらしいのだが、地方出身者や独身者などは、こちらの寮に住むことが多い。とはいえ、屋敷全てでその住居を賄うには限度があるため、近くに宿舍専用の建物もある。

言ってみれば、ここは社宅付き全寮制の会社のようなものなのだろう。

実際はどうあれ、そう考えるのが一番理解しやすいため、真雪はそう認識している。

真雪にあてがわれたのは、その宿舍専用の建物で、その中のさして広くもない一室を専用に与えられていた。運び込まれた当初、彼が意識不明の重態だったということもあるだろうが、それ以前にこんな得体の知れない人物と陰陽師たちを、一緒に部屋に置いて置けないという常識的な判断によるものだろう。

結局のところ、彼がこの世界に持ち込めたのは自前の制服以外には、学校の鞆だけだった。筆記用具、ガム、携帯、財布……当然だが大したものは入っていない。仕方ないとはいえ少し残念だ。

故に、真雪に与えられた部屋にも、本来なら散らかるほどの荷物はない。せいぜいが夜具に、水差し程度である。が、今現在。その

シンプルな筈の部屋は色の洪水に襲われていた。

「うーん、どれにするかなー。蘇芳じゃ如何にも派手だしなあ」

「那由多、蘇芳の衣は私自身も着ているものなんだが、そんなに派手かな」

「伊々美様はいいんですよ。この色を着こなせる落ち着きというか、風格をお持ちですから。けど、真雪みたいに、顔の造りの派手な者が蘇芳を着ると、変な意味で悪目立ちしすぎるというか……」

「……柄物は着ねーぞ」

「贅沢言っなよ。お前、ただでさえ無駄に図体でかいせいで、選択肢なんてほとんどないんだぞ。伊々美様の服をお借りするにも、お前が着てもおかしくないものなんて限られてるし……」

那由多は噛み付くようにそう言っ、顔をしかめた。

男三人が雁首つき合わせて狭い部屋で何をしているかというところ、真雪の衣装選びだった。なんでも、これから陰陽寮のお偉いさんとの対談をせねばならぬらしく、非礼にならないような衣を着るというのだ。

だが真雪は当然学ラン以外の服など持っていないし（鞆の中にジヤージはあるが）そもそも、着物など選び方はおろか、着方さえも分からない。なので彼の数少ない知人の中で、恐らくもっとも体型が近いであろう伊々美の着物を借りる事にしたのだ。本当は真雪に合わせて仕立てるのが一番いいのだが、服一着を作るにも結構な金がかかるらしく辞退した。

とはいえ、伊々美もその手の事ではあまり頼りにならないらしく、彼の弟子である那由多が助っ人として参戦したのだ。療養中、何くれと世話をしてくれたので、真雪とも面識がある。最初のうちは非常に礼儀正しい、昨今ではありえない程、きちんとした少年だったが、何度か顔を合わせるにつれ態度が雑になってきた。真雪が伊々美の客ではなく、『親切心で助けてあげた人』と認識したあたりから、彼の中では立場が逆転したらしい。今ではこちらに対し、兄貴風を吹かせるに到っている。

外見上は小学生だが実年齢も小学生だ。十二歳。つまりは、歳相応ということだろう。伊々美の弟子ということで、当然、陰陽師候補生。綺麗に切りそろえられた黒髪にくりくりした目が特徴的な、きゃんきゃん吠えるトイプードル。

こんな子供に怒られてもまるで応えない。真雪は半ばうんざりした面持ちで肩を竦めた。

「ていうか、俺この服じゃ駄目なのか？一応これって、俺のいたところじゃ冠婚葬祭に使える礼服でもあるんだが」

嘘ではない。学生にとっての制服とは、その一着で自身を現す標識であり、日常生活から式典にも使用出来る最強のワイルドカードだ。

「お前の郷里の風習なんてどうだっていいんだよ。遠野様にお会いするのに、そんな変な衣で行かせられるか。何かあったら伊々美様の恥になるんだぞ」

那由多はぷりぷりと怒って、蘇芳の衣とやらを丁寧に畳んだ。綺麗な色だとは思ったが、確かに派手な色だったので真雪はほっとした。

尚もぶつくさと言いながら、とつかえひつかえ着物を選んでいると、ようやくお気に入りの一品を見つけ出したのか、ぱっと表情が明るくなった。手にしていたのは萌黄色に藍袴の上下。落ち着きがある色合いで、さほど派手ではない。

実際の色合いやらを見たいのか、那由多が「立って」というので、真雪は素直に従った。萌黄の狩衣を羽織り、那由多が腰に藍袴をあてる。上下共にほぼ七分丈。

肘と膝の少し下あたり。嵐でいうと相葉丈というやつだ。いうまでもなく、丈が足りていない。

「……………」

「……………」
那由多は三点リーダで八文字分沈黙すると、忌々しげに舌打ちをした。

ファッションショーの終わりはまだまだ遠そうだった。

知らない世界

「だいたいさ、お前はなんでそんな無駄にデカイわけ？何食ってそんなに育ったんだよ、この唐変朴。その無駄に育った分の身長を、ちよつとは俺に分けるよこの野郎」

「無駄とか言うな。そして無茶言っな」

シメるぞこのガキ。

「伊々美様は陰陽師の中でも長身でいらっしやるんだぞ。折角お借りした着物も着れないでどーするんだよお前。このデカ！」
「るせえチビ」

あと平安時代の人間と同列で比較されても困る。

真雪の見たところ別段、自分の足が特別に長いというわけではない。単純に身長の違いである。なるほど、確かに伊々美はこの時代の人間としては恐らくず抜けて長身なのだろうが、真雪は現代においても更に長身の部類に入る。双方の差は目測でも約十cm強。丈が足りないのも道理だろう。

「もういいから諦めようぜ。つーか、そんなに偉い相手なのかよ、これから会う遠野様ってのは」

既にこの状況に飽きたと言う事もあり、半分以上は本気で告げると、那由多は如何にもとんでもない事を聞いたという風に、ひどく憤慨してみせた。怒りで顔を赤くした、ごく分かりやすい怒った顔。「失礼な事をいうな！当たり前だろ！遠野様はこの陰陽寮の司にあたる方だ。立場で言えばお前がさっき話してた明媛よりも上に当たられるんだぞ！」

「え、何？あいつってそんな偉いの？」

「うん？真雪はまた明媛と会っていたのか？一体いつの間に」

伊々美と真雪から全く別の二つの質問が重なった。思わず顔を見合わせる。

当然というかなんというか、那由多が優先したのは師からの質問

の方だった。師に向かいこちらを指差しながら、

「さつきこいつを呼びにいったら、庭で明媛と話し込んでいたんです」

「明媛と真雪が？」

それを聞いて、伊々美は不思議そうに首を傾げた。あの初対面の現場を目撃していればさもありなん、といったところである。真雪は「散歩してたら偶然会ったんで雑談してたんだよ」と端的な事実を伝えてやった。

「明媛と雑談、ねえ……君、あんな事された後でよく立ち話なんぞする気になったね」

「あんな事？真雪と明媛の間って何があったんですか？」

「初対面の時、出会い頭に塵で攻撃されたあげく、腹蹴りくらって吹っ飛ばされた」

好奇心に瞳をきらきらさせている那由多にぶつちよう面で告げると。彼は爆笑するでも驚愕するでもなく、ごく普通に納得したように頷いた。

「なんだ。普通じゃないですか。どうせ真雪が失礼な事を言ったんだろ？」

「一方的に人を悪者にすんな。俺はあいつには一切何もしてねえよ」「うん。あの時の真雪は明媛に文字通り、手も足も出なかったからねえ。初めて目を覚ました真雪が誤解で私に攻撃してきたところを、通りがかった明様が抑えて下さったんだよ」

「目が覚めた時？ああ、伊々美様が家族の事を喋った途端に逆上して掴みかかってきたという、恩知らずな真似をした時ですね。なんだ、やっぱり真雪が悪いじゃん」

「……だから、それに関しては悪かったってきっちり何べんも謝っただろうが！」

後ろめたさも手伝い、真雪は拗ねた口調でぶつきらばうに言った。伊々美の保護された後、初めて意識が回復した折に多少の記憶の混乱もあり、彼の口から話した筈のない『姉』というキーワードが

出た瞬間、逆上して殴りかかってしまったのだが、落ち着いて話を聞いてみれば単に、気絶中の自分が、寝ぼけて口走ったというだけの事だった。その点については、のちに正気に返った後できっちり詫びを入れたのだが、まあ確かに殴られても文句は言えないかもしれない。

「明様は陰陽七星のお一人だからな。真雪程度が足元にも及ばないのも当然だろ」

「陰陽七星って何だ？」

聞きなれない単語に首を傾げる真雪に、那由多は愕然とした表情を浮かべた。伊々美は今更驚く事も無く、さも有りなんと肩を竦めた。共に、呆れ返っているらしい。

「うつそだろ？お前それ、本気で言ってるのか？陰陽七星を知らないなんて……. どんだけ世間知らずなんだよ」

「しょうがねえだろ。俺、この人間じゃねーんだから」

「それにしたって、仮にもこの日の本の国で陰陽師をやってる者なら、知らない筈ない名前だろうが。お前、本当にどこから来たんだよ」

「……お前の知らないところだよ」

予知能力を持たない彼には、決して知り得る事のない遙か時の彼方。遠い先の世界。

そしてそれは、今の自分にとっても等しく遠い。あらゆる意味で。時の流れの先にある、千年後の未来。

果たしてこの先、自分は再びあの時代あの場所に戻る事が出来るのか。

胸中に浮かんだ疑問を噛み殺し、真雪はひっそりと溜息をついた。

陰陽寮

如何に本人にとっては真剣な悩みだとはいえ、それを知らない周囲にとつてはなんでもない。周りに聞こえないほど小さな真雪のぼやきに、那由多はやれやれと溜息をついた。気を取り直してか、着物を畳む手を休めこちらに向き直る。

「いいか。この国には帝に定められ、国の守護をお役目とする部署がある。それがつまりここ——陰陽寮だ。そこまではいいな」

「ああ」

突如豆知識コーナーを始めた那由多の口調は、なんとなく得意げで年下を指導する先輩のようだった。弟子の解説を、師である伊々美はどこか面白そうに見守っている。

「陰陽寮には塵災害に対抗する能力者——俺たちみたいな陰陽師で構成されている。中にはここに属さない、市井の陰陽師なんかもいるみたいだな。所詮、三流だよ。本物の能力者はみんなこの陰陽師に来るんだ」

この国で最高峰の才能が集まる場所なんだよ、と。そう語る那由多の表情は、どこか誇らしげですらあった。続ける。

「そして中でももっとも優れた才能を持つ七人が『陰陽七星』の名を冠している。中でも明媛は、陰陽師では最年少で七星になったお方で、歴代最強と名高い方だ。更にお父上がその陰陽七星の長でもあり、陰陽寮の頭も務めている。今はまだ年若いけど、明媛はいずれその地位を継ぐであろうと、もっぱらの噂だ。当代では間違いなく最高の陰陽師の一人だよ」

「へえ……てことは、こっつて世襲制じゃねえのか。珍しいな」

現代ならばともかく、この時代においては家と血筋を存続させることは必須であつた筈だ。特に名だたる家柄や地位を誇る人にとつては、それこそが使命だつたといつても過言ではない。その義務があつさりと放棄した明の義父とやらに感心して呟くと、二人は呆気

に取られた顔でこちらを見つめていた。

「なんだ？俺、また何か変な事言ったか？」

「いや、そうじゃないけど……真雪。お前、何で明媛が陰陽頭の実の娘御じゃない事知ってるんだ？」

「ああ、そのことか。本人から聞いたんだよ。さっき話してる時に「明媛が……？そんな事まで話したのか？」

伊々美が改めて驚いたように呟くが、真雪はそれこそ意外な思いだった。一度でも彼女と話をした事があるならば、さほど驚く事でもないだろう。

彼女は嘘をつくような人間ではないし。

隠し事をするようなタイプでもない。

たとえ相手が誰であっても、聞かれたことには堂々と胸を張り、真っ直ぐ正直に答えるだろう。

あれは多分、どこまでも正しい生き物だ。

「まあ……確かに明媛と陰陽頭には血の繋がりがあわけじゃないけど……真雪。出来ればあまりその話は、余所ではしないで欲しいな。公然の事実とはいえ、余所様の家の事情をべらべら吹聴するなど、あまり品のいいことじゃないだろう？」

「ああ、そうだな。気をつけるよ」

諭すようにやんわりと告げられ、反省する。いくら本人が隠し事をしないとて、それを赤の他人が気軽に喋っていい理由にはならないだろう。

「——で。あの小娘がタダ者じゃないのはなんとなく分かったが、これから俺が会う遠野さんとやは一体どんな奴なんだ？」

「遠野様は陰陽司——この陰陽寮の最高責任者だよ。明媛の父君が寮内で最高の実力者だとしたら、遠野様は陰陽師で最高の権力者だ」「げっ」

地位に怯んだわけではないが（実の祖母がそれこそ、世界中の異端児の頂点に立つ人間なので、権力者には慣れている）飛び出してきたのが意外に地位の高い人物だったので、思わず呻く。実のここ

る、偉い奴らにはロクな知り合いがない。

「いつがいに偉いやつが出てくるもんなんだ……なんでそんなのが俺みたいな怪しい奴と面会するんだ？」

「俺が知るかよ。とにかく！そういう立場の方をお会いするんだから、お前も相応の格好をしなきゃ失礼にあたるんだって」

最終的にその地点に着陸し、再び勇んで着せ替えに乗り出そうとする弟子を、伊々美がやんわりと止めた。

「残念だが、そろそろ時間切れだよ那由多。仕方ないから真雪にはこのままの服装で参上して貰おう。何、本人が言うには礼服に使われるくらいだ。見たところ、造りも割合に確りしているし、先方も真雪が異邦よりの客人である事は承知の上だ。さほど失礼にもあたらないだろうよ」

「伊々美様！？でも……」

「それにこれ以上時間をかけて探したところで、どっちにしろ真雪に丈の合うものは見つからないだろうしね」

やっぱり今度、新しい着物でも仕立てるしかないかなあ、などと言いながら伊々美が立ち上がるのに倣い、真雪も腰を上げた。一人慚然とした顔の那由多に苦笑を浮かべ、

「そう拗ねないでくれ。じゃあ、ちよつと行つて来るよ。私達が出ている間に、このへんの着物の片付けお願いね」

につこりと笑み、さりげなく弟子に雑用を押し付けたところで、伊々美は真雪を連れて部屋を後にした。

喰われるな

長い廊下を連れ立って歩く。距離はさほど苦にならない。ただ、これだけ広いとさすがに一人では迷子になりそうだった。伊々美が付き添うのはその意味もあるのだろう。例え部屋を指示されたところで、これでは無事に辿り着けまい。

「でも、私がついていけるのは部屋の前までだよ。実際に遠野様に会うのは君一人だ」

「え？ そうなの？」

てつきり彼も同席すると思っていたので、その事実は意外だった。伊々美は苦笑を浮かべ、

「当然だろう。先方が御用があるのはあくまで君であって私ではないんだからね。そも、一介の陰陽博士ごときが気軽に拝謁出来る方ではないのだよ。何分、高貴な方だからね」

所謂、身分違いというやつだね。と、特にどうという事もなさそうに語った。その間も歩みは止まらない。伊々美自身が長身のせい、彼の足取りは意外に早い。

「だから那由多じゃないけど、くれぐれも振る舞いには気をつけてくれ。何かあっても私ごときじゃ力になりきれないかもしれない」

「まあ、その辺は大丈夫……だとは思うけど。一応、あんたには迷惑をかけないように頑張るよ。助けて貰った恩もあるしな」

そう、彼には借りがある。瀕死の自分の命を助け、拾ってくれた。仇をなして返すわけにはいかない。

「そんな気負わなくてもいいけどね。同じ陰陽師なんだし。同胞が困っていたら助けるのは当然の事だろう」

対する伊々美はそれにかこつけるでもなく、本当に当たり前の事のようにそう言つと、鷹揚に笑って受け流した。人間が出来ている。真雪は素直に感心した。

「俺もそんな下手打つ気はないけどな。因みに、その遠野さんって

どんな人？いくつぐらいなんだ？」

「……遠野様、だよ。間違っても本人の前でさんとか言うなよ、本当。んー、歳は……実際のところ、詳しく知ってる者はいないんだよなあ。大分、以前から今の地位にいらっしやる方だから相応にお歳を召されている筈な んだけど」

「意外と謎の人物？」

「そうでもない。唯一つ、これだけははっきり言えるのは、彼女がたいへんなお方だと言う事だよ」

脅しというにはあまりに抽象的なその表現に――

真雪は更に詳しく尋ねようとして、足を止めた。質問のためではない。伊々美が立ち止まったからだ。指をさす。

「ああ、ついたよ。あの部屋だ。いいかい。ちゃんと挨拶をして入るんだよ。そして万が一にも失礼な振る舞いをしないように」

子供に言い含めるように、口煩く注意する伊々美に苦笑を返す。

なんとなく聞きそびれてしまった質問の代わりに、真雪は以前から伝えようと思っていた事を言った。

「……あのさ、ありがとな。伊々美」

「？ なんだい突然。藪から棒に」

「いや、別に冗談とかじゃなくてマジで。なんかどたばたしててせいで、ずっと言う機会を逃してただけだよ。あの時助けてくれた事、俺、結構本気で感謝してるんだ」

目が覚めてから殴りかかった事についての謝罪はしたが、一度も感謝を伝えていない。普段は世話人として那由多が傍にいる事が多いため、気恥ずかしくって口に出せなかった。

「お前がいなかったら、多分俺はあのままあそこで死んでたしな。本当にありがとう」

助けてくれて。と、笑顔で謝辞を告げると、伊々美は面食らったような反応をした。

「……なんか真雪、いきなりそんな事言い出すなんて、まるで遺言みたいだね」

「縁起でもねえ事言うんじゃねえ!!」

これから権力者と面会する前だって時にそんな科白を言って、死亡フラグになったらどうしてくれる。

「いや、もう。適当にこなしてくるよ。無事に帰れなかったら俺の事は探してくれ」

「探して欲しいんだ……」

「当たり前だろ！探さない気かよ!？」

「なんでそこで突然怒り出すんだ!？」

「頼まれなくても自発的に探せよ」

咄嗟のアドリブに対応出来ず、焦ったように慌てる伊々美に、じやあな、と軽く手を上げて進もうとすると。そこで。

去り際の彼を引き止めるように、伊々美がその手を掴んだ。

「……どした？忘れ物か？」

「いや……真雪。冗談抜きに、遠野様には充分に気をつけるよ」

「わーってんよ。何度も言うなって。そんな繰り返すと俺が馬鹿みたいだろうが」

「そうじゃない、そうじゃないけど……多分、そんな事以上に、あの女人は君にとって――否、どの男にとっても間違いない天敵だ。喰われないように注意しろ」

心配よりも尚深度の深い憂慮の眼差しで、伊々美がこちらを覗きこんでくる。

彼の手をほどき、手だけでひらひら挨拶すると真雪は今度こそ振り向かずに歩き出した。

謁見

少し進んだところで、女房が待つており、彼女に導かれて通されたのはまたしても板敷きの座間だった。

真雪にあてがわれたものより、遥かに広い部屋。室内には畳が一枚だけ敷かれており、その上に女性が座っている。

謁見。

なんとなく、そんな言葉が脳裏を過ぎる。

近くには几帳があつたが、深窓の姫君よろしくその影に隠れて声だけを聞かせるつもりはないらしい。それは、真雪の頼りない記憶によれば、この時代の女性にしては非常に珍しい振る舞いのように思えたし（明は別だ。多分この時代において、彼女はあらゆる意味で規格外なのだろう）あるいは、会話をする相手に自分の姿をみせた方が効果的と思つたか。別にどれでも構わない。ただ、後者の方が納得がいくとは思つた。

真雪は所謂、上座・下座の位置関係で彼女と対面させられており、会話するには両者の距離は少々離れてる。が、現代においては珍しくも眼鏡やコンタクトの力を借りずに、裸眼で二・〇という脅威の視力を誇る彼には、相手の顔がはっきりと見えた。

ぱつと見て年齢はよく分からない。が、伊々美の話からするとかなりの高齢だという。外見だけではさっぱり分からないが、落ち着きや風格からしても、確かに二十代には見えなかった。アサラーかアサフォーあたりだろう（真雪にはその辺の区別がいまいちよく分からない）入念に化粧の施された肌は少女のように滑らかで、年齢からすると驚くべき色艶を保っている。

長く豊かな黒髪はゆるやかに浪打ち、幾重にも重ねられた色鮮やかな内掛けの裾が優雅床へと広がっている。室内に焚き染められた香は、今までに嗅いだ事のない独特な香りで女性らしい甘やかさがあつた。

「そなた、名はなんと言う？」

相手の口から零れる声は意外と低く、少しかすれていたがそれでも耳に心地良い。その声を聞いた瞬間、真雪の背筋にぞくりとした何かが走った。

「黒野……真雪、です」

「ふうん。黒野、に真の雪……か。なるほど、上下で繋がっておるのじゃな」

変わった名じゃの、と呟き、何が楽しかったのかは知らないが、しどけなく寄りかかったままぐすくすと笑う。そんな何でもない笑い声すら、耳にするだけで酩酊に似た何かが襲い掛かってくる。

（うつわ……）

ことここに至って、真雪は伊々美のアドバイスをこれ以上なく理解した。

目の前の遠野は絶世の美女、というわけではない。年の割りに信じられないほど若作りではあるが、女の外見は金と時間の掛け方次第でいくらかでも何とかなるものだ。現に彼の祖母などは今でも孫の白雪と双子に間違えられる。まあ、あれは一種の例外だけだ。

見目だけでいうなら遠野に比べ、明や姉らのほうが断然に麗しいが、それらの誰もが持たないものを遠野は大量に持っていた。なめかましさと——妖艶さ。

今まで自分は育った家庭環境的に、美人にはかなりの耐性があると思っていたが、それは大間違いだった。なまじ傾国の美女ともいえる白雪と、これ以上なく深く血が繋がっている真雪は、確かに外見上の美醜には耐性があるが反面、色香に対する耐性は皆無といっている。というか、実の姉に色気を感じてる奴がいたら、それは間違いなく筋金入りの変態だ。

麗しさだけでいうなら明も負けていないのだが、あの超越者には姉以上に色事の関心が抱けない。

明が性別を超越した神性な麗質を備えるならば。

遠野は性別を意識させない魔性じみた妖艶さをまとっている。

つまり、あの姉以上にどうしようもなく。あの少女より厄介だ。
天敵どころの話じゃねえ。これもう既にラスボスだろ。

彼にとつては、恐らくこの世でもっとも苦手とする人種であった。
「そなた、東の森に倒れていたのを伊々美に拾われたそうじゃの」
「……はい」

出来る事ならお魚啜えたドラ猫追つて裸足で逃げ出したかったが、
そんなわけにもいかず観念して真雪は頷いた。

そんなこちらの胸中には一切構わず、遠野はゆっくりと話を進め
ていく。

「何故そのような場所におつたのじゃ？あそこには、地元の民でさ
えめつたに近寄らぬ場所と聞くが」

「分かりません」

一瞬躊躇うが、既に何度も聞かれた質問である。解に矛盾が出な
いよう、真雪は素直に答えた。

「既にその質問には何度も答えています……俺は何も自分で意図
してあの場所にいたわけじゃない。自宅の庭で不審者に襲われて……
……気がついたらあの場所にいただけです。それまでの経緯は自分で
も一切思い出せない」

「なるほどのう」

話を聞いた遠野は、おざなりな様子で頷いてみせた。だが真雪に
はむしろ、そのやる気無い態度よりも彼女の視線の方が気になった。
揺ぎ無い視線。まるで、柔らかい針にでも貫かれているような。

覚えのある感覚に、連想したのは姉だった。つまり、何を見られて
いるか分かったものではない。

「……やはり離れていると、少し声が聞きづらいな。互いの顔も見
えんようでは、真偽など探りようがない。接見を許す。近う寄れ」
「……………」

行きたくねえ。

素直にそう思った。

ヤな予感

「うん？どうした？わらわがよいと言うておるのじゃ。遠慮は無用ぞ。早う来ぬか」

「いや、あの……俺のような得体の知れない怪しい奴を近づけるなど、無用心ではありませんか？」

「なに、そなたごときが何をしようが、わらわを害せる筈もない。ぐずぐずするな。何も取って喰いなどせぬわ」

いや、喰われそうだよ。

別の意味でな。

「そなたも珍妙な奴よのう……あの明媛に平然と近づく度胸がありながら、何をそんなに臆しておる？」

あの少女とこの妖女じゃそもそも、危険値の種類が違うんだが。相手の言葉に疑問を覚え、真雪は遠野に近づかぬままに尋ねた。

「……別に、びびってるわけじゃないですけど。なんでそんな事まで知ってるんです？」

明と立ち話をしたのは、ここに来る少し前である。携帯もメールもない時代にしちや、情報展開が早すぎる。

「……あの娘は、この陰陽寮の中であってさえ立ち位置が少々特殊でな。あれに関することならば、大抵わらわの耳に入ってくる。ましてや、あの赤娘に自ら近づくような奇妙な生物がいるとなれば、何をおいても知らせが届こう」

「……まるで見張っているみたいですね」

彼女の発言はまるで。

あの少女が、常に監視されているかのような話ぶりだ。

特殊な立場。特別視される存在。幼き天才児。

どこかの姉と被るフレーズになんとなく沈黙する。

「否定はせんよ」

脳裏に微かな余韻を残すような声で、遠野は特に悪びれもせず笑

った。

「だが、あの赤娘にすら気後れなく近づく剛胆な青年が、わらわを遠ざけるというのも、些か悲しい事よ。こんな僅かで嫌われるほど、わらわとそなたに不快な事をしてしまったかのう？」

にいと笑う。そんな無造作な仕草の一つがぞつとするくらい蠱惑的で妖艶だ。

「それともそなた、まさかわらわが怖いのか？」

それが挑発の言葉だと、気づかないわけではなかったが。

それでも無視する事は出来ずに、観念して真雪は彼女の元に近づいた。とはいえ、近づきすぎることはない。――m程の間隔を開けたところで踏みとどまる。――そこで留まっていかないと色んな意味で、それ以上先に進んでしまいそうだ。

傍に寄ると遠野からは、白粉に紛れて甘く蜜やかな匂いが漂っていた。焚き染められた香とは違う、もっと濃密な。嗅いだだけで、頭の芯までばうと痺れる感覚に襲われる。だが不快さはなく、眠りにつく前まどろむような安心感があつた。ヤバイ。

遠野がにこりと笑って手を伸ばす。何をするのかと思い、だが不思議と警戒も浮かばずにいると、彼女の指先が頬を撫でた。冷えた指が熱を持った肌に心地よい。――その時点で初めて、自分がほてっている事に気づいた。

あー、なんかくらくらしてくる。

「そなたも陰陽師なれば、塵災害がなんたるやは知っておるな？」
「勿論です」

こちらの胸中になど構わず、遠野は話を続けた。落ち着け落ち着け落ち着け俺。

何かの誘惑に負けそうになっている自我を必死に奮い立たせる。何せ相手はアサフォーか、よくてアラサーだ。どう考えでも自分より一回りは年上、下手すると倍は離れている。女つつーかもはや親子だ。

高校生の時点でそんな年上キラーな能力を身に着けてどうする。

「ここ最近……丁度そなたの現れる一月ほど前からか。塵災害による被害が増大しつつある」

正気に返って背筋が伸びる。

その話は以前。

伊々美から少しだけ聞いた事があった。

だが遠野は、更に真雪の知らない先の話を続けた。

「塵災害の鎮禍は当然、我ら陰陽寮の役目。その任を果たせなんだから、帝よりの信を損ない民草からの不満も募る。が、しかし此度の塵災害では、さほどその声も大きくない。何故だが分かるか？真雪」
唐突に彼女から自分の名を呼ばれ、真雪の肩が一瞬跳ね上がった。名前を呼ばれたくらいで反応するなんて、小学生かよと胸中で自身を罵りつつも、緊張は解けない。マジで相性が悪すぎる。

「被害が拡大しているが、一般人はその被害者とはなっていない。直接的に自分に関らない事だから、対岸の火事として見過ごせる……という所ですかね」

「その通り」

慎重に導いた回答に、遠野は満足気に頷いた。どうやら及第点だったらしい。密かに胸を撫で下ろす。

「此度の塵災害で被害を受けているのはこの陰陽寮なのじゃ。奇妙な事に、一般の民草には何の被害もなく陰陽師だけが死んでおる」
「嘘だろ？」

思わず素で突っ込んだ。普通人と比べ遥かに塵への耐性を持つ異端児が率先して被害者となる理由はない。それでは理屈が通らない。
「神威能力者は普通の人間に比べ、遥か強いに塵への耐性を身につけている。ただの人間が無事なのに、神威使いにばかり被害が広がる道理はないでしょう」

「そなたの言う通りじゃ。が、現にこの陰陽寮からも既に多くの被害者が出ている。まるで塵が選別して襲っているかのようじゃ」

「それこそありえない」

真雪はきっぱりと告げた。

「塵災害は塵によつて発生するとはいえ、あくまで自然現象です。恣意的に被害対象を選別するなんて話聞いたことない」

過去の歴史を紐解いてみても、該当するような案件はない。こういった場合は大抵――

「そうじゃ。ふん……『悪意ある現象』とはよく言つたものじゃが、そういう視点で見れば此度の現象もまるで、そこに人意が介しているようではないか？」

あ、やばい。

そういう展開に進むのか？

漠然とだが。

なんだか酷く、やな予感がした。

運命？

世の中というものは出来たもので、悪い予感に関しては大抵が当たる。別に、当たって欲しくもないのだが。

「実はそなたを発見した者達も、問題の塵災害鎮禍の為に探索に出ていたところだったのじゃ。正確には、物見として放った筈の先発隊から救援の知らせが届いてな。——だが、辿り着いた時には既に手遅れだった。その場はもう災害の影もなく、残されていたのは先発隊の死体と——唯一の生存者であった異邦人のそなただけじゃ」
恐らくは伊々美達が意図的に黙っていた事まで暴露されて——

真雪は落ち込むでもなく寧ろ納得した。

行きずりの、拾っただけの他人に対する扱いにしては彼らの対処が丁寧過ぎるとは思っていたのだ。だけどそれも、理由を明かさねればなるほどと納得出来る。

つまり自分は。

この陰陽寮にとつてはたった一人の生き証人であり。

そして同時に容疑者でもあるということ。

被害者でも加害者でもある可能性のある人物だから、手厚く看護され隔離されていた。

それでも、彼らのくれた善意までもが全て偽りだったとは思わないけど。

思いたくもないけど。

「……俺の仕業だと？」

「それはまだ分からぬ。わらわはまだそなたをさほど知らぬ。判断を下すには些か性急に過ぎるが……問題はそう考える者が少なからずいる、という事実じゃ」

その問題より先に、さっきから人の太股を撫で回しているあなたの手をなんとかして句欲しい。

これはこれでかなりハイレベルな問題だろ。

「特に此度の件にて仲間を失った者達の心痛は大きい。そなた一人を排除して災厄が収まるならば、喜んで手を下そうという者達は少ない」

「それは仕方ないでしょうね。俺がそっちの立場であっても、この状況では俺が怪しいと思いますし」

思うどころか間違いなく決め付けてかかるだろう。身内を失った人間の心情を思えば、仕方ない事だ。

その発言に遠野は些か驚きを覚えたらしい。目を見張って、ついでにこちらに顔を近づけてまじまじと覗きこんでくる。だから近い距離近いって。

「なんじゃ。思ったより物分りがよいのう。その発言はつまり、そなたが非を認めるという事でよいのか？」

「まさか。単なる客観的な感想ですよ。たとえ証人がどこにもいなくても、俺の無実俺が一番よく知ってる。その事実がある限り、むざむざ犯人として罪をきせられるつもりはありません」

同情はする。だが遠慮はしない。

少なくとも、無実の罪でむざむざと汚名を被れるほど自分はお人好しではない。

「正論じゃな」

遠野は納得したように頷いた。

「とはいえ……我らも実際に手詰まりな状況には変わらない。たとえそなたが無実を主張しようと、現時点においてそなたがもっとも怪しいという事実には変わらない」

「ですね」

こちらにも納得し、仕方なく頷く。これでは平行線だ。

困ったのう……といいながら、遠野は更に彼の肉太股に手を伸ばした。奇妙にくすぐったいのと、今まで経験した事のないそれ以外の感覚が、脳の活動を疎外する。ていうかこれ、セクハラじゃねえか！

妙齡の女性に問い詰められながら身体を撫で回されるって、これ

一体なんの罫だよ！？」

「そなたは何故ここに來たのじゃ？」

唐突な質問に正氣に返る。いかん。頭がぼーっとしてきた。

「何故って言われても……さつきも言ったとおり『ここ』に來るまでの記憶はないんですよ。氣がついたらここにいたってだけで最後の記憶は自宅で途切れてますし」

改めて問われて思い出す。そう。そういえばその問題も放置していた。

「ならば質問を変えよう。そなた、ここにくる以前はどこにいたのじゃ？」

今度の質問には即答出來ずに言葉に詰まる。一体どう説明しろというのだ？この現状を。

本人にすら事情の分からぬうちに、千年後の未來から平安時代に飛ばされ、あげくそこで殺人犯扱いされるなど現実の出來事とは思えないが。原因の分からぬ状態では誰を恨みようもない。運命でも呪えばいいのだろうか。まったく。

ん？運命？

今何か、思いつきそうだったが――

「黒野の姓を持ち、陰陽師でもあるそなたを誰も知らぬというのも奇妙な話じゃ。差し支えぬなら、その辺の事情を話してくれぬか？そなたの身元の証が立てば妙な嫌疑も晴れよう」

それは實際、素晴らしく正論のように思えたが――

残念ながら続く言葉を持たず、真雪は再び沈黙した。馬鹿正直に未來から來たといったら頭の痛い奴と勘違いされそうだし、宇宙人に誘拐されて記憶を失ったのです。などと言ったところで、ネタが通じるとは思えない。寧ろ容疑が推定有罪から可及的速やかに確定有罪に変わるだけだろう。はて、どうしたものか。

ていうか、今気づいたがひょっとして『黒野』の姓はこの時代で既に確立されていたのか？遠野の話聞く限り、そんな印象を受ける。そも、黒野家は歴史の長い一族ではあるが、それが表立って

頭角を現したのはここ百年程の、つい最近に過ぎない。それまでは一血統として静かに血脈を守りつてきたのだ。

そっぴや、うちの起源も確か平安からだっけ。

いつの時代だったか細かい年代までは覚えていないが、ひょっとするところに先祖がいるのかもしれない。

否、それだけではない。もしかして、もしかするとだが。『彼女』がいる可能性も皆無ではない……のでは？

単なる思い付きに過ぎなかったが、そう思った瞬間、俄然興味が沸いてきた。

「さあね」（前書き）

本日二回目。雨でひまなので。皆さんは大丈夫ですか？

「さあね」

「どうした？やましい事がないならそなたの素性を明かしてみせよ。証人が必要というなら連れてきてもよいぞ」

「残念ながら出来ません」

結局誤魔化すことも惚けきることも出来ず。真雪は素直にそう告げた。

「仮に住んでいた場所を言ったところで、貴女にはきっと分かりません。俺がいた場所とここはあまりにも離れすぎてる。どうやって来たのか自分でも分からないし、どう帰ればいいのかも今のところ見当もつかない。身元を証明するようなものも何もないんです」

正確には鞆の中には学生証が入っているし、財布の中には免許もあるが。それが一体何の役に立つだろう。

「そうか。分かった」

残念じゃの。そう小さくばやくと、彼女はしどけなく脇息によりかかっていた姿勢を正し、ついでに彼の腿から手を離すと、きちんと座りなおして真雪に向き合った。

「ならばそなたには、これより場所を少々移動して貰いたい。今より多少手狭になり——住環境の質が落ちるが構わぬか？」

突然切り出された現実的な話に、真雪は若干面食らった。

「移動？」

「ああ。この屋敷の地下に、今ではさほど使われていない部屋があり、そこならば外から鍵がかけられる。そなたの無実を事実上証明出来ぬ以上、二次災害を防ぐためにそなたをそこに『保護』させて貰いたい」

保護って……

真雪は思わず苦笑を浮かべた。

「それ監禁っていいませんか？」

「そうともいう」

遠野は悪びれずに答えた。

「が、現に今ではこれ以上の案は思い浮かばぬ。わらわとて、このままこれ以上むざむざと同胞を死なせとうない。便宜上そなたを『閉じ込めて』おけば、騒いでいる者達も納得出来ようし、仮にそなたが犯人であつたところで被害は止まる。逆にそなた以外の何者かが、何やら手妻でも使つて凶行に及んでいたとしても、現時点でもっともあやしいそなたを隔離しておけば、その者への牽制にもなる。」

「——つまり、硬直状態を作ろうと？」

「ああ。そなたには気分の良いものではないだろうが、別に全ての因がそなただと決め付けているわけではない。些か不自由な思いをするやもしれぬが、衣食に関しては今まで通りを保障しよう。」

「……ふーん。ま、構いませんよ。仕方ないといえば仕方ないし、落ち着きどころとしてはそんなもんでしよう。」

こちらの一方的な偏見かもしれないが、予想以上に頭がいい。この時代なぞ所詮、権力者が自分の立場に物を言わせ、証拠も論理もなく拷問やらのごり押しで冤罪を押し付けるのかと思いきや……なかなかどうして、それなりに筋の通つた理論だった。

娯楽の一環として推理ものやらミステリ小説やらが跋扈している現代の自分から見ても、彼女の言にはさほど無理はない。多少、恣意的な部分が見られるが。

「——で。その『保護』とやらは一体いつまでの予定なんですか？とりあえず一年とか言われたらさすがの俺も暴れますけど。」

「そう長引かせたくはないが……一月ぐらいになるやもしれぬ。まあ、実際の罪人として閉じ込めるわけでもなし。可能な限り便宜は図ろう。——どうせ、身寄りのないそなたでは、ここを逃げたとしても行き先などあるまい？ならば屋根と食事の保障がされておるだけマシというものじゃろう。」

ぐっ……

見透かされている。

遠野からの条件を真雪が素直に呑んだ理由の一つ——というか、一つしかない理由がそれだった。

何せ、この場所にきた理由も帰る方法も知らない。勿論、知り合いなども皆無である。なんとか、なけなしの悪運を振り絞り、第一次接触で伊々美のような人間に会えたからいいもの——仮にここで放り出されたら行く場所がない。金もコネもツテもない。勝手が分からぬこの時代ではバイトで糊口を凌ぐことも出来まい。

第一。元の時代に戻るにしても、神威能力者の集まるこの施設にいた方が、ずっと情報は入手しやすいだろう。

やれやれ。つくづく災難だ。

「では女房に新しい『部屋』まで案内させよう。必要な物があれば申すがよい。大人しくしておれば、悪いようにはせぬ。ゆめゆめ妙な気などおこすでないぞ」

それで、話は終わりという事だろう。彼女が再び脇の脇息に寄りかかると、音もなく後ろの襖が開いた。驚いて振り向くとそこには、先ほどの部屋まで案内してくれた女房が立っていた。

け、気配を全く感じなかった……

ずっと部屋の外にいたのだろうか？

女房って確か、この時代のメイド的なポディションだったと思うが、なんかこの人の場合、女房っていうか忍の者みたいだ。

部屋の外へと促される。どうやら、またどこぞに連れて行かれるらしい。いや、どこぞっ——かさっきの話だとその監禁部屋とやらか。準備のよろしい事だ。

だが了承した以上、拒否する理由もない。

立ち上がり、一応遠野に礼をして去ろうとした時、その彼女が何かに気づいたように呼び止めてきた。

「待て、そなた……」

「はい？」

「そなたの、その……指と耳の飾りは——ひょっとして、精霊石ではないか？」

「さあね」

真雪は、ただ肩をすくめた。

監禁

我が心　なぐさめかねつ　更級や

この世に神はいない。

だから奇跡は起きない。

だけど運命はある。

例えばの話。

この世に生まれ、それなりの期間を生きてきたものたちの中で――少なくとも、成人近くになるまでは生存出来た者達の中で、果たして心から神の存在を信望している人間が、一体どれだけいるというのか？

無論、宗教感などは人それぞれなので、ここで強固に自説を語るつもりはない。およそ、信仰なぞについて語りだしたら、お寒い展開になるのは間違いない。そうでなくてもこの問題は結構デリケートなのだ。若造風情が気軽に手を出していいものではない。

だが、もしも真実この世界で生きてきた者ならば、誰であれ確実に神の不在を疑った瞬間が――否、確信した瞬間があるはずだ。あるに決まっている。ないわけがない。

自我を持って生まれ、人のように高度な文明と文化を持ってしまうった生物の中で、

挫折を味わった事のない人間などいない。

苦悩を抱えた事のない人間などいない。

絶望を知らない人間などいない。

つまりこの世界に絶対たる超越者はいないという事になる。否、確かにその一点のみを神の不在の根拠とするにはいかにも薄弱だ。ならば、こう言い換えよう。

この世に神がいたとして

少なくともそれは、人間を救ってくれるような、人の為の優しい奇跡をもたらしてくれる存在ではない。

本当は誰もが、心の中でその事実に気づいている。なのに、誰も祈りを止める事をしない。この世界に救いがない事を知りながら、それでも奇跡を願わずにはいられない。

故に真雪は、何があるかと決して神には祈らない。祈りが無意味な事を知っているからだ。

神の奇跡は起こらなくても、この世界には道理を捻じ曲げる力が確かに存在している。それが塵能力だ。

物理法則の全てを無視する『物質操作』

意味破壊をもたらす『精神支配』

そして——時流の因果律を崩壊させる『運命干涉』

塵能力は遺伝要素による先天性の才能で、その能力自体が既に非常に稀有なものではあるが、実際にはその能力ごとに更に希少さがある。中でも群を抜いて珍しいのは運命干涉だ。

一般的に塵能力者の生まれる確立が千人に一人というなら、運命干涉系能力者が生まれる確立は一千万人に一人と言われている。対して、真雪の扱う物質操作はもともとオーソドックスな能力だ。無論、希少さがイコールで能力値に結びつくわけではないが、それでもやはり運命干涉系がレアな事には変わりない。

過去の世界に訪れた原因。今ある自分の現状。

そして、運命干涉という神威。

それらを踏まえた上で、真雪には一つ思うことがある。ひょっとして。

元の世界に戻るために、もしかすると俺は、もう一度死ななければ

ばならないのかもしれない。

「うつわー……」

真雪が連れて行かれたのはリアル牢屋だった。

石階段を降りた先、つーかこの建物地下室とかあったのかよ、とか思いつつついて行った下にあったのは。これでもかというぐらい見事な牢屋だった。

頑丈そうな木組みの檻に、いかにも古めかしい南京錠がかかっている。地面だけはむき出しの土だったが、壁は全て石造りとなっていた。これではプリズンブレイクばりの脱獄は出来そうにない。

THIS IS THE RO-YAって感じ。

こういった地下牢などでは、ぼっこぼこに拷問とかされた罪人や死体やらが倒れてて、かなり悪臭が酷いかと思いきや、案外そうでもなかった。というよりどうやら長年使われていないらしく、人の匂いがまったくしない。が、さすがに空調整備は整っていないらしく、地下特有の黴臭さが充満していた。

「……俺、ここで暮らすのか」

「はい」

自ら了承した事とはいえ、早くもやる気を失いつつあった。

住めば都とかいうけどあれ絶対嘘だろ。

現在の状況で快適な住まいなど望むべくもないが、目の前の設備を見る限り、どうあがいたところで環境改善は出来そうにない。

てか、下世話な話これトイレとかどーすんだ？

まさかとは思うが……ここで？

胸中の不安を見透かしたかのように、付き添ってきた案内人の女房が口を開いた。

「お食事はこちらまでお運びします。二刻ごとに見回りの者が様子を伺いに参りますので、用を足す際などはその時に声をかけて頂け

れば。湯浴みにも無論、付き添いがつきます。単独行動は許可出来ませんが、御身の証となる方の付き添いがあれば外出は可能です。お会いになりたい方がいらっしゃれば、面会も自由です」

「結構融通利くんだな」

「遠野様のお決めになられた事です。貴方様はあくまで罪人として捕らえるのではないので、可能な限り便宜を図るよう仰せつかっております。必要なものがございましたら、見回りの者などになんなりと申し付け下さい」

では、と綺麗な礼をして去ろうとする彼女を、真雪が寸前で呼び止めた。

「あ、だったらさっそくあんたにも一つ頼みがあるんだけど」

「はい。なんででしょう？」

「外出したいから付き添ってくれ」

「……………」

パブロフさんち的那由多くん

とりあえず付き添って貰えた。

勿論、真雪としてもギャグで言ったわけではなく、ついでに嫌がらせで言ったわけでもない。ちゃんと目的があつての申し出だった。一つには、自分の要求が果たしてどこまで相手に通じるか、という事。

二つ目は、水差しの中身を取り替えたかつたということ。いや、それは頼んでもいいんだけど、なんとなく念のため。

あまり自分の事を他人任せにするのは得意ではない。彼はこう見えてA型なので微妙に几帳面だった。

そして三つ目は——これが最大の理由で要するに説明義務というやつである。

一ヶ月間の隔離生活——否、事実上の監禁。

一旦、前の部屋に戻ってそれを告げると、伊々美は口をあんぐりと明け（間抜け顔）呆氣にとられた顔をした。那由多は掴みかからんばかりの勢いで身を乗り出し、勢い余ってかなりの音を立ててこちらにヘッドバッドをかましてきた（痛かった）

うむ。どちらも予想通りのリアクション。

「なんでっ!？」

まだ変声期前の甲高い声で、那由多がぎゃんぎゃんと吼えている。「なんでなんでなんで!？」一体なにがどーいうわけでお前が座敷牢なんぞに閉じ込められなきゃ何ねーんだろよ!？別に真雪は何もしてないんだろ?」

「那由多、落ち着きなさい。遠野様がお決めになられた事なんだよ」罵声をあげるトイプーを師匠が横から諫めている。傍から見ていると、師弟というより飼い犬と調教師のようだった。

ていうか、やっぱあそこ本気でマジのギャグ抜きに座敷牢なんだ

……。

「だからってなんで、真雪が地下牢なんか……理由がないじゃないですか！」

「そうだな。俺がここに来てからしたことなんて、せいぜい錯乱ついでにうつかり伊々美を殺しかけた事ぐらいだし。監禁までされる覚えはねえな」

腕組みなどしながら真雪がしみじみ頷くと、なぜか師弟はそろって半眼になり互いに顔を見合わせた。

「……なんだ。そういやちゃんと理由があるんじゃない、お前」

「……ほら。御覧、那由多。火の無いところに煙は立たないんだよ」
失敬な奴らだ。

「にしてもお前、本当に何したんだよ一体。監禁って。どうせ、遠野様に対してももの凄く失礼な事でもやらかしたんだろ」

「人が犯人の前提で話を進めんな」

那由多の言に憤慨し、真雪は今までの経緯を話した。自分が容疑者として扱われる理由。遠野からの提案。そして、現在とこれからの状況。

「……なるほどね」

一通り聞き終わって、歎息を漏らしたのは伊々美だった。ふうむ、と唸り考え込むように顎下に手を添える。

「俺が犯人って説がどこまで広まってんのか知らないけど、下手にいつまでも延々疑われるくらいなら、多少不便だろうが身の潔白示しておいた方がなんぼかマシだろ。俺的にはあんま気にしないけど、俺がいつまでも疑われてちゃ、拾ってくれた伊々美にも迷惑がかかるし」

「いや、そんな事は別に気にしなくてもいいんだけど……」

伊々美は戸惑ったように口を開いた。

「真雪はいいのか？本当にそれで」

「ああ。さっき下見させて貰ったけど……ま、確かに快適空間とは言いがたいが、そこまで非人道的な扱いをされるってわけでもなさ

そうだったしな。この通り、望めば外にも出られるし、会いに来て貰う分には自由らしいから。暇なら来てくれ。退屈だし」

「そうか。君がそういうのなら仕方ないけど……それでも一日やることがないのは辛いだろう。何か書でも読むかい？」

「いや、俺字読めねえから」

青年の親切な申し出をあつさり断る。正確には字が読めないわけではないが。この時代の書物を読むなど、素で古文書を読ませられるようなものだ。それならまだ英文学でも読んでたほうがなんぼかマシというものである。

まあ、電気も電波もないしDSも携帯も使えないので、マジに暇つぶしには困るのだが。一ヶ月くらいならなんとかなるだろう。寝てるぐらいしか思いつかないけど。

「とはいえ、一月というのも結構長いからねえ。私は公務があるからそうそう頻繁には会いにいけないが……那由多。君は暫く庶務を免除するから、なるべく真雪に会いに行き話相手になってあげなさい。多少なりと気散じになるだろう」

「あ、はい。分かりました」

「そういうわけだ、真雪。何か私に用があつたら那由多に伝えてくれ」

「ああ。ありがとう。助かるよ」

社交辞令ではなく本気でそう言つて、真雪は立ち上がった。実際、伊々美の申し出は非常にありがたいものだった。恐らくこれからの自分には、うんざりするような退屈が待ち受けているのだから。「何から何まで本当に悪いな。じゃ、俺そろそろ行くわ。お前らに事情の説明もしたし、案内の人もそろそろ待ちくたびれてるみただし」

一応、気を利かせてか部屋の近くで待機してくれているのだが（相手が伊々美だったからだろう）あまり待たせすぎるのも悪い。いや、本音を言えばあまり悪いとは思っていないのだが、これ以上に自分の立場が悪化したら不味い。

襖を開いたところで、立ち去ろうとする真雪を伊々美が少し慌てたように呼び止めた。

「真雪——今の話、明媛にはお伝えしなくてもいいのか？」

「はあ？あいつに？なんで？」

唐突な発言に面食らう。が、伊々美はその反応にこそとまどったように、

「いや、なんでって……友人なんだろう？彼女」

「言われてみりゃ確かにそうだが……」

別にそこまで深い付き合いではない。ていうかあれ？俺、あいつと友達になった事とかこいつらに話したっけ？

まあ伊々美の方からこう言ってきた以上、話はしたのだろう。覚えてないだけで。

だがそう言われると、こちらから声をかけておいて相手に黙って姿を消すというのも、随分と不義理な気がする。真雪は那由多に声をかけた。

「那由多。お前、ちょっと明に伝えておいてくれないか？俺の事」

「へっ！？なんで俺？」

「だって俺、これから監禁生活だし。もう時間ねーし。いつまでも人待たせとくのも悪いだろーがよ。つっても、牢に入っちゃったらあいつに会いに行けるかも分からねえし。お前に頼むっきゃねーじゃん。伊々美に休暇も貰ったばっかなんだし、どうせ暇だろ？」

「お、俺に明様と話をしろというのか……」

那由多が顔を引きつらせ、慄いたようにぼやいた。

「なんだよ。びびんなよ。あいつ、お前と五歳も年離れてないだろ。多分」

「年齢の問題じゃねーよ！俺らにとっちゃ明様なんて、雲の上のお方なの！天上人なの！俺みたいな下っ端の見習いの雑魚がおいそれと話しかけられるお方じゃねーんだよ」

「階級意識が刷り込まれてんなあ……」

全然違うけど、なんかパブロフさん家のわんこみたいだ。

「だからって、俺がこのままも一度あいつ探しに行くわけにもいかねえだろ。これから、監禁されて自由を奪われてしまう可哀相な友人の頼みくらい聞けねえのかお前は」

「なんで頼み事してるはずのお前がそんなに偉そうなんだ……」

がつくりと力なく頂垂れるが、それ以上は反抗してこなかった。

それを幸いと承知の証にとり、真雪は今度こそ部屋を後にした。

それから暫くの生活は予想以上の退屈なものだった。

何が堪えるって、やることのない時間というのがこんなにも長く感じるものだとはい正直思いもしなかった。退屈は人を殺せるとはよく言ったものだ。

伊々美は多忙なのか顔を出さなかったが、那由多は約束通り毎日来てくれた。よっぽど暇なのか、単に義理堅いのか。多分その両方だろう。なにせ冗長な時間の中で人が尋ねてくれる瞬間というのは、それなりにありがたかった。

地下にあるため、部屋の中――否、もうはつきりと言おう。牢の中はいつも薄暗かった。一応、小さな灯取り用の窓が天井高くについているが、一つしかないため、光量もかなり限られる。日が沈み、周囲が暗くなると牢屋はほぼ真っ暗だ。蝋燭の類は支給されなかったので、暗くなる＝寝るようにしている。塵で光を作ってもいいのだが、真雪は微調整が苦手なのでやめておいた。火事にでもなったらことである。

おかげで、太陽と共に目覚め日が沈むと共に寝るという、超高齢者型生活になってしまった。健康そうだけど、生活スタイルの変更が早すぎる気がしなくもない。

とはいえ、日に一度は外に出して貰えるし、やはりこれは扱いとしては破格なのだろう。形式的に牢屋に入っているが、監視に来る人々も、到底罪人に対する態度ではない。遠野の命令か、あるいはここでも黒野の庇護か。どちらにせよ、ありがたいことにはかわりなかった。

それでも、決して牢屋での生活に慣れる事は出来ないが（やつぱり不便は不便だし、別に気分のいいものではない）しかし実際のところ、真雪はそこまで座敷牢の生活に嫌気が差しているわけではな

かった。

（ぶつちやけ、抜けだそうと思えば、いつでも脱獄できるしな。ここ）

定時ごとに見回りが来るが、別に入り口が二十四時間カメラで監視されているわけではない。牢は頑強な木枠で作られ、到底人の手で破壊出来そうにないが、掛かっている南京錠は古めかしく無骨そうでも、単純な掛け金式だ。やる気になれば、クリップ一つでピッキング出来る（ペンケースに入ってた）

そして抜け出したところで、地面に赤外線センサーが張り巡らされているわけでもなし。この時代の危機管理意識がどれほどのものなのかは知らないが、現代人の彼の目から見ればこの管理体制は隙だらけだった。まあ、セコムもない時代にそんな事を言っても仕方ないが。

そも襖一枚で仕切りを作るだけで密室になると信じていたのが、古き良き日本人の国民性である。警戒心など、期待するだけ無駄かもしれない。

「でもなあ、こんだけどこもかしこもがったがたと、逆に抜け出す気もなくなるんだよなあ……」

その気になればいつもで抜け出せる。だからこそ、必要性もないのにあえて動く気がしない。これもジレンマなのかもしれないが。

まあ、ここにいればとりあえず衣食住の保障が付いているというのも、実は大きな理由ではある。

人として何か大切なものを無くしかけた結論のような気がしなくもないが、背に腹はかえられないのだから仕方ない。

いや本気でマジに金がねえんだ。

財布に入っている（彼にしては）虎の子の一万円札とはいえ、ここではただの紙切れにすぎない。現代でなら、日本銀行に持っているけば等価分の金と代えて貰えるのに。

畜生、俺もアシタ力みたいに財産を砂金で持ち歩いていればこんな事にはならなかったのに。

今更ながらに悔やまれるが、考えてみれば、過去へのタイムワープを想定して、普段から砂金を持ち歩く生活の方が無茶な気がする。コンビニでジュースを買ってもお釣りは貰えそうにない。つーか、過去にワープとか絶対これ日常生活中で警戒しなきゃいけないイベントじゃねーだろ。

正直、無一文のこの状態で放り出されたら、一週間もかからずに餓死する自信がある。生き延びるためには、恐喝か強盗か追い剥ぎになるぐらいしか職業が思いつかない。

「あるいは親父狩り狩りとか……待てよ、そもそもこの時代に親父狩りとかあんのか？」

一時期、道場で流行った遊びで、有段者のおっさん連中が繁華街を無防備な姿でうろつき、金品を巻き上げようと寄ってきた若者達を、正当防衛と称して数々の技の実験台にしたという、どっちが悪人なのか分からない悪趣味な遊びだ。ていうか、今考えてもあれは絶対に過剰防衛だったと思う。

やられた側も自分に非があるのだから、まさか警察に訴える事も出来ず、無駄に力を持て余している現代の怪人達は、存分に猛威を振るっただけらしい。噂では、現代じゃ道場では試せないような禁技まで使われてたという。

ただの憂さ晴らしっていうか、ようはそれ体のいいサンドバックじゃねーかとは当時も思ったもんだが、言及するのはやめておいた。そもそも、相手も相手なのだから。同情する余地などない。少なくとも、俺はどんなに自分が金に困ろうと、あんな首と顔が同じ太さの和製シュワちゃんみたいなおっさんから、金を巻き上げようとは絶対に思わない。

道場では狩りの成果を自慢するのが皆の習慣になっていたが、ターゲットの年齢層から外れてしまう真雪には、そもそもカツアゲしてくる相手もおらず、成績は最下位だった事をついでにここに明記しておく。

「やくざとかならやつっちゃっても別にどっからも顰蹙こないだろ

うし、まずはそういう奴らを見つけてヤサを壊滅させるとか、シマを乗っ取るとかすりゃいいんじゃないか？そうすりゃ、金も稼げるし屋根つきの建物も手に入るし、一石二鳥だよな」

かなり真剣に今後の間違ったライフプランの設計を立て始めたところだ。

不意に何かの違和感を感じ、真雪は思考を停止させた。

前述した通り、日が沈むと牢の中はほぼ闇に沈む。とはいえ、完全な闇に閉ざされることはない。さすがに千年前だと大気汚染も排気ガスの被害もないのか、こちらの夜空は驚くほど眩しかった。

よく昔から『月のない夜には気をつけろ』とか『星灯り』とかいう言葉があるが、まさか夜の自然光で本当にものが見えるほどの明るさだとは思わなかった。単なるレトリックだとばかり。

とはいえ、地下牢ではその月光の恩恵も小さな天窓から受けるしかないのだ、結局のところたかが知れているのだが。それでも闇に慣れて目を凝らせば、物の影ぐらいいは見通せた。

白雪ならば、こんな不便を感じることもないのだろうが。

当たり前前の瞳しか持たない自分には、コンタクトもしていない（これだけははつきり自慢したい）自前の視力に頼るより他ない。気配を感じた方へ顔を向け、眇めるように闇に目を凝らす。

最初にその姿を目にした時、真雪は幽霊が出たのかと思った。

白い影。いや、影そのものが白いわけではない。地に落ちる影はいつだってどんなものでも黒々と黒い。だがその人物が幽霊に見えたのは、姿そのものが真っ白だったからだ。

闇の中。仄かな燐光を纏うように、うすばんやりとした光沢を放っている。が、別に影自身が自ら光を放っているわけではない。

しっとりと輝く絹の衣をマントのように頭から被り、すっぽりと全身を包んでいる。かなり上等な品なのだろう。夜闇の中であつてさえ、わずかな月光を反射しその布は美しく煌めいていた。丁度、布影に隠されるかたちとなっている顔は闇に沈んで伺えない。ゆつたりとした衣は闇との境界を示し、夜の中にその姿を浮かび上がら

せるが、反対に身体の輪郭を隠し影の正体を危うくしている。

気配も音も感じさせず、その影は唐突にそこにいた。

いつから、などと考ええる余裕もない。

当然のように。自然のように。

あるいは超然のように。

まるで最初からそこにいたかのように。そこにあることが至極当たり前であるかのように。

影は悠然とそこにいた。

「……マジか？」

分かってる。

あまりに唐突な展開に、頬を引きつらせながら真雪は胸中で繰り返した。——分かってる。

伊達に世界最強を冠する家族に囲まれて育ってきたわけではない。彼自身には特別非凡の才などないが、一男子高校生にしては考えられないほどの修羅場を潜り抜けてきている。経験値だけならば、イラクの帰還兵にも負けはしない。

だからこそ。

目の前の影。無論、その姿に見覚えがあるわけではないが、これによく似た空気を彼は知っていた。

直近ではここに来る寸前に。そしてそれ以前にも何度か。

デッド・オア・アライヴ。

影の姿がゆらりと傾ぐ。ふらついたわけではない。幽玄としたその立ち姿に、危ういところはまるでない。微かに重心を移動しただけだ。つまり。

それを知覚した刹那——

真雪は全力でその場を飛びのいた。

プリズンブレイク

「——っ!!」

轟音と共に粉々に碎かれた檻が、細かな木片となって頭上から降りかかる。これ自体には脅威はないが、目に刺さったら事である。眼球を腕で庇いながら、なんとか体制を建て直し——

「うつそお……」

真雪は啞然として、綺麗に開放された檻に目を向けた。否、檻とすら呼べないだろう。檻とは入り口を閉じ、中にいるものを閉じ込めるためのものである。一箇所であれ開放され、中身を封じることが出来ないのであれば、それはもう檻としての用を成さない。檻だったもの、だ。少なくとも、もう脱獄にピッキングは必要なくなってしまったわけである。

とんだプリズンブレイクだ。

引いても押しても蹴ってもびくともしなかった、それ自体が屋台骨ほどありそうなぶっとい頑強な木枠の檻が、まるで発砲スチロールか何かのように粉々に砕けているのを、ぞっとして見やる。この影一体どんな膂力をしてやがるんだ、という話である。

そう、膂力だ。

影がゆらぎ、体を入れ替えたあの瞬間——つまり、後ろに軸を入れ替えこちらに飛び掛ってきた影は、加速を乗せ振りかぶった右腕で檻の木枠を殴りつけたのだ。

閃いた白絹の中から、僅かに腕が見えた。

一瞬の事だったが、人の腕に見えた。

つまり、人だ。

思い出すのは遠野の言葉。

『此度の塵災害では陰陽師の多くが命を落としている』
『そんなわけではない。』

『まるで塵が選別して人を襲っているかのようじゃ』

そんなはずはない。

全ての事象にはそれに相当する因があり、相応しいだけの（あるいは納得のいくだけの）理由がある。

理不尽なだけの偶然なんて存在しない。

偶然の終着点には必ず必然がある。

それが——これか。

正直、今回の件ではどこかタカを括っていたところがあった。被害の拡大を抑えるためだと説明されても、内心では環境の不便さだけしか気にしていなかった。

だって思いもしなかった。部外者である自分が本当に狙われることになるなどと。

「ちつくしょー……話が違えじゃねーかよ」

まさか本当に命の危険があるなんて聞いてない（聞いてたけど）第一、元の世界でならともかくここでは——

「俺襲われる理由ねーじゃん！」

声を大にして全力で訴えてみるが、生憎と相手には通じなかった。畜生。人の話をきかない奴だ。

影が躊躇なく飛び掛ってくる。——それを認識出来たのは、視覚ではなく触覚によるものだった。流れる風の動き。知覚出来ても反応しきれるものではない。真雪は覚悟を決めると再び無様に転がりはず、腰溜めに軽く構えを取り、相手の先端部分——つまり、こちらに殴りかかって来る拳にそつと触れるように手を伸ばした。捕まえるためではない。指先が僅かに触れた瞬間、そこを支点にくるりと体を反転させる。流れる水のように無駄の無い動き。突貫の勢いをそのまま転化させられた影が、無様に石の壁に激突する。

「……あれ？自滅した？」

自分でも、あまり期待しているわけではなかったが。

恐る恐る呟くその眼前で、やはりというか予想通りというか、影は何事もなく立ち上がった。あの勢いで頭から石に激突したわけだから、相当なダメージを負っている筈なのだが。そんなことはおく

びにも出さない。

それでも勢いが強すぎたのか、見ると影の腕が壁に突き刺さっている。――しめた、これで動きを封じる事が出来た。と、喜んだのも束の間、真雪のしている前で影はあっさりと壁から腕を引っこ抜いた。

と、その刹那、腕の刺さっていた穴を起点に石の壁ががらがら――と音を立てて崩れ落ちた。

「じゃ、シャレになんねえ……」

その光景に慄きながら、今度こそはつきりと顔を引きつらせて、真雪は呻いた。

なんで生身より石の壁のほうが弱いんだよ。本当にこいつ生物か？腕だけサイボーグとか、実はお前も未来からきた鉄腕野郎じゃないのか！？

あまりの理不尽さに胸中で密かに憤慨するが、それでも一つ分かったことがある。

奴の攻撃を受け流した、あの瞬間。

正直、かなり際どかったがリスクを犯した価値はあった。真雪の手に残った感触は確かに人のものだった。加えて今の動き。多少、奇妙で理不尽なところがあるが、もはや間違いようがない。

これは塵ではない。

間違いなく人だ。

「精霊化……つてやつか」

稀にあることである。

耐性を持たない物質が長期間、塵にさらされると――あるいは高密度の塵（たとえば精霊石など）に不用意に近づくと、その物質本来の姿を失い塵に蝕まれる。この現象自体は精霊化と呼ばれる一種の意味破壊にあたり、有機物・無機物を問わず発生する。とはいえ、生物がその影響を受ける場合は大抵、自我の弱い動物になるものなのだが、人間が精霊化することもなくはない。過去にも実際、何度か症例が確認されている。

今回の話を聞いた時から、まさかとは思っていた。が、これで疑問は確信となった。

塵災害が悪意を持ち、選別して人を襲うなど聞いたことも無い。不自然な事には必ず理由がある。

状況の中に人意が見えるなら、そこにあるのはやはり人意なのだ。塵に意思などあるものか。

「さすがに初めて見た……人間の精霊化」

月日あたりに教えてやれば狂喜乱舞して喜びそうだな、とか頭の片隅で呑気な事を考えつつ。

（とはいえこいつ——どうしたもんか）

現実には直面しているのは、避け様もない危機だった。

人型——つまり原型が残っているということは、まだそこまで深刻な汚染は受けていない筈である。とはいえ、奴が既に生物の域を逸脱した存在である事には変わりない。それはこの交錯で見た身体能力だけで充分に分かった。

瞬発力や臂力——筋力では軽く人間を上回り。

肉体強度では石の壁すら貫通する。

おおよそ、この材料を考慮するだけでも生身で立ち向かえる相手だとは思えない。が、真雪にはそこまでの焦りはなかった。対抗手段がないわけではない。異端児である自分なら。

塵を使えば、精霊獣とてやりあえるだろう。もとより、神威能力者とはそのために存在するのだから。

便利な裏技が目の前にあるのに、それを使用しない手はない。それは、単に小心者が馬鹿のとする選択肢だ。必要とあれば、迷う理由はない。ただ——

ゆだん

全力をもって抗うべき危機を目の前に、思う事があった。それは。
(問題なのは……ここの強度、だよな)

それでも懸念しなければならぬのは、この場所が地下にあることだった。

千年前の建築技法など無論、真雪などには知る由もないが(正倉院などを見てみると、日本古来の建築技術もなかなか捨てたものではないようだ)さすがに現代の耐震強度クラスを期待することは出来ないだろう。こんな場所で下手に塵を使えば、精霊獣に殺されるより先に、最悪生き埋めという可能性の方が高い。

加えて問題なのが彼有能力だ。物質操作の対象を炎熱に特化している彼は、繊細さや緻密さには弱い。炎には烈火という表現があるように、本来であれば、非常に激しい性質を持つ。

真雪は微調整が苦手なのである。

地上に上げれば話も違うが、ないものねだりをしては仕方ない。

覚悟を決めるのに逡巡は必要なかった。

呼吸と共に塵を廻らし、隅々にまで行き渡らせる。高揚感と恍惚塵が満ちていく中で、体内の細胞一つ一つが活性化していく錯覚に襲われる。知覚が拡大され、髪の毛の一筋にさえ神経が行き渡るような感覚。

異端児だけが持つ絶対感。力持つことへの愉悦と快楽。

湧き上がる激情に翻弄されそうになりながら——意思の力でそれを押し止めると、今度は自分から一足飛びに真正面の相手へと向かった。

「っ！？」

駿足の踏み込み。比喻抜きに一瞬で両者の間が詰まる。眼前といえる距離まで肉薄しても、洞のような精霊獣の表情は伺えない。だがそれでも、互いを隔てる布越しには、はつきりと驚愕の気配が伝

わってきた。

（まさか塵による強化が、自分だけの特権だとも思ってたのか？）
思いついた皮肉は声には出さず胸中に止め、踏み込みの足とは逆側の腕を引き、半身を捻りながら捻体を加えた渾身の突きを放つ。
肉を打つ感覚。その奥でぐんにやりとした内蔵が潰れる触感までもが、肥大した知覚にダイレクトに伝わってくる。何度繰り返しても慣れない、怖気の立つ感触を無視して、真雪は更なる追撃をかけた――

（ここで捕まえておかなきゃ――やられる！）

いくら五感が鋭敏になろうと、光なきところで相手の姿を捉えられるわけではない。さっきの直撃はあくまで、相手が正面に立っていたのが分かっていたからという、純粋な幸運に過ぎない。

姉とは違い自分には、明りのない夜闇の中で真実を見通す目など備わっていない。

殴られた衝撃で吹っ飛んでいく精霊獣を捕まえて（布に覆われていたせいで、どこを掴んだのか分かりにくい）、多分腕だ）更なる追撃をかける。腹に突きを、下顎に掌底を、胸元に廻し蹴りを容赦なく叩き込む！

（いける――！！）

油断などするべきではない。特に、戦闘中においては。だが、この時の真雪にははつきりとした確信があった。攻撃の度、確かな手がたえがある。このままいけば遠からず自分が勝つ――

「つつ……！？」

だが結果としては、そうはならなかった。

油断をしたつもりはない。だが慢心が隙を呼んだのか。常識ではおよそ考えられない角度から伸びてきた足が、完全なく死角から真雪の脇腹を抉っていた。肋骨の隙間をつくように、体の半ばまでめり込んでいる。衝撃に、堪えきれず息が詰まる。離するつもりになった手から、一瞬力が緩んでしまう。

（ど、どうという関節構造してやがるんだ！？）

理不尽さに呪いを吐く。だがそれは確かにどうしようもなく致命的な隙であり、敵もまたそのチャンス逃す気はないようだ。殺気——などという便利な気配を感じたわけではない。風のうなる音はそんなあやふやかな感覚よりよほど明確に、迫る危険を脳裏に知らしめた。脇腹に食らったせいで、サイドが甘くなっている。自覚はあっても、対処は間に合わなかった。避けきれない。流せない。

覚悟を決めて。

真雪はその一撃を食らった。

『いいか。力に対して力で対抗しようとすんな。力同士のぶつかり合いつてえのは、てめえが勝ってるうちがいいが、それより強い相手とぶつかりや、それだけで負ける』

走馬灯のように。

激痛に耐える中で響くのは、師範代の言葉だった。

『だから絶対に力に力で張り合うな。正面からのガチンコ勝負なんざ、馬鹿のする事だ。確かにお前は体力も体格も並より優れてる。資質や才能に恵まれている。だけどそれでも最強ってわけじゃねえ。だからまず、技術も持たねえ癖に、身体能力だけに頼って対処しようとするのをやめろ』

骨の軋む音。更にその先にある、硬質の何かが砕ける音。人体の破壊される音というのは、何度聞いても慣れる事はない。ましてや、それが自分のものともなれば。

師の声音は厳しくなくとも確かに他を圧倒する力があつた。

『攻撃なんか受けるな。力でなんかぶつかるな。触れるものは全部受け流せ。ひらかわせ。やりいなせ。正面から対抗なんてすんな。常に自分の負けたケースを想定しろ。そうすりゃ、勝ちはなくとも負けはねえ』

なるほど。確かに師範代の言った通りだ。

ぶつかり合いに負けた結果がこれか……

防御が間に合わず、咄嗟に盾とした左腕には、金属バットで殴ら

れたような激しい痛みが残っている。確認するまでもなく、完全に折れているのが分かった。激痛があるだけまだマシと見るべきか。神経まではいっていない。致命傷にはなっていないが、戦闘には使えない。

（——くそっ）

無様だった。

一瞬前の自分を縊り殺したくなるほどの怒りにかられるが。生憎と、後悔に浸るほどの時間も彼には与えられなかった。

月下美人（前書き）

30話のゆだんと31話ぶざまが同じ内容になっているとのこと指摘を頂き、先程訂正致しました。ご指摘頂きまことにありがとうございます。

大変失礼致しました。

修正は本日分にはカウント致しませんので、本日はまた別に今日中に投稿したいと思います。

月下美人

攻守が一瞬で逆転する。

咄嗟の判断で横に飛んだ――瞬間、自分が最悪のジャッジをした事は分かっていたが、他にどうしようもない。飛びのいた刹那、一瞬前まで自分のいた空間の地面が、決られるように粉碎される。

（あゝ、もう、畜生っ！！）

一度下がってしまった。先制を譲ってしまった。こうなったらもう仕方ない。それが婉曲に自分の寿命を縮める結果だと分かっている。信雪はその方法以外に選びようがなかった。

暗闇の中で、一寸先も見通せない役立たずな瞳を閉じる。使えない感覚ならば、なくしても変わらない。視界を閉じ、その分の集中力を他の感覚へと回す。触覚、嗅覚、聴覚、残された全感覚を総動員して、鋭敏に研ぎ澄まします。

相手が動く。

そして――

避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける！！

全身全霊の集中を費やし、迫り来る攻撃を紙一重で交わしながらそれでも真雪は自分が圧倒的に追い詰められているのを感じていた。これはこれで一種の膠着状態ではあったが、それでもこの状態を続けられれば、どちらが不利になるのかは明白だった。

どんなに動きが速かろうと。どれほどの達人であろうと。

超人でも無い限りは、永遠に攻撃をかわし続けられるなんてことは無い。

このままではいずれ、限界が来て終わる――

打開するには手を打つしかない。まだ残っている手札を冷静に数える。何だ？今の俺にはなにが出来る――？

左腕は無残に折れている。が、全く使い物にならないわけではない。少なくとも、痛みがあると言う事は神経は生きている。骨は折れても筋肉はそう簡単に千切れはしないだろう。根性を出せば、一度ぐらいいは動かせるかもしれない。まあ、その後で果たして腕が無事に済むかどうかは不明だが。

（もう一度この腕を盾にして奴に接近し、折れた腕で相手を拘束する——出来るか？）

胸中に問いかける。だが問題は実現の可否ではない。やるかやらないかだ。

To be or not to be .

迷うほどに不利となる。仕方ない。

真雪は齒を食いしぼり、決意した。

だが結果として、その決意は無意味となった。

隠密性もなくでもない、突如辺りに響き渡った激しい轟音はそれと共に爆発的な激震を轟かせた。天井をぶち壊し、それだけじゃ飽き足らず、一部が砂塵となつて崩れ落ちる。ただの衝撃では破片はここまで細かな粒にはならない。天井の一部が崩れ去っただけでなく、そのもの全体にまで細かな罅が入っている。少しでも新たな衝撃が加われれば、容易に崩れるだろう。崩れた屋根からはぽっかりと天空が覗き、そこから見える月が浩々と光を放っている。

もう暗闇ではない。

月光に照らされた牢内は廃墟のように雑然として、酷く間抜けなものだった。

今の今まで真雪と死闘を繰り広げていた精霊獣も、さすがにこの事態には何か思うことでもあったのか。奴の思考が人間のそれとどう違うのかは知らないが。呆氣に取られたように硬直している。

その中に。

もうもうと湧き上がる粉塵が静まる頃（を恐らく見計らって）廃墟と化した牢内に、天空から降り注ぐ月光をスポットライトのように一身に浴びながら、小さな赤い人影が、音もなく優雅に舞い降り

た。

暗闇の中でお艶めきを放つ長い黒髪が、花弁のようにふわりと広がり、一瞬遅れてその背に落ちる。

月に照らされた完璧なる白貌。漆黒の髪。小柄な体躯。

真紅の衣を翻し。

陰陽師の鬼子——あるいは陰陽七星の一角を担う鬼才、明媛は、突如もたらされた破壊の跡など気にもせず、さながらそこが彼女のために詠えた舞台であるかのように、空気も読まずに堂々と降りた。

いふつやう

威風堂々。それが、当然であるかのように。

「……ふん」

辺りを見回し、鼻を鳴らす。砂煙が収まると、がれきの中、彼女の矮躯はよりいっそう目立った。が、頼りなさばまるでない。周囲を睥睨する様は、威風堂々とし、さながら王者のごとく風格を漂わせている。ついでに、その足元でがれきと一緒に下敷きにされている、真雪の頭らしきものが砂まみれになって覗いていた。

自らが踏み潰している存在に気づいたのか、少女が今更ながらに足元に視線を向ける。

「……ん？人の足元で何やってんだいまし」

「……いや、なんかもーいろいろ言いたい事は山ほどあるが、とりあえず降りろ」

砂粒を吐き出しながら真雪は呻いた。少女は存外素直に降りてくれた。

あーあ。服が汚れちゃったじゃねえか。

こうなってしまうと、選択の余地はなかったとしても、せめてジーンパンで来ればよかったと悔やまれて仕方ない。砂汚れは表面だけでなく、繊維の隙間に砂粒が入り込んでしまうので、洗ってもなかなか落ちないのだ。おまけに黒では砂汚れも目立つ。一張羅の制服なのに。どうしてくれるんだ。

こうなってはせめて、学ランを脱いでいた事を不幸中の幸いと思うしかないのだが、よく考えてみればその辺に脱ぎ捨ててあるだけなので、もれなく砂礫に埋もれている筈だ。やっぱり幸いでもなんでもねえ。

合成洗剤とクリーニングのないこの時代に、粒子の細かな汚れがどこまで落ちるのかは疑問だったが。かけはぎや染み抜きが出来るくらいだ。失われた技術の奇跡を祈ろう。

「多少の汚れなんて洗えば取れるだろ。男の癖に細かな事をごちゃごちゃと言っな」

「お前も女なら多少は周囲に気を使え」

互いに不毛な罵りあいをして、睨みあう。

まったく。

無事な右手で埃を払って体を起こす。ついでに何か人としての大事な誇りも一緒に払い落としてしまった気がするが、まあ気のせいだろう。突然空（天井）から降って来た女子中学生に足蹴にされて踏み潰され、土下座に近い姿勢を取らされるなんて、まあよくある事だ。別段、気にするようなことじゃない。少なくともイベント的には、千年前の過去世界にタイムワープするより、エンカウント率は高いだろう。

気にしない気にしない気にしない。自分に三回言い聞かせる。気にしたら負けだぞ。だから気にしない。

空から降って来たのが、ラピュタ王家の子孫ではなく、赤い小娘だったことに多少がっかりしつつ、天井を見上げ、呻く。

「……君、すごいところから出て参りましたな」

動転のあまりキャラが若干おかしくなった。

天井——というか、壁の一部は原型が分からないほど派手に打ち崩されている。まるで砲弾でも喰らったかのような跡だ。多分、外観を見たら建物の一部が抉り取られているかもしれない。遠野が見たら卒倒するかな、と他人事のように思った。

「……か、派手に壊しちゃってまあ。」

俺はなんの為に左腕を犠牲にしてまで塵使うのを控えてたんだよ。人の苦勞が台無しじゃねーか。

少女はこちらが立ち上がるのを待つと、ちゃっ手を挙げ、

「久しいな真雪。息災か？」

「……無実の罪で投獄中の友人を出会い頭に踏み潰しておいて、第一声がそれか？」

「少し太ったんじゃないか？」

「そうじゃねえだろ！？百歩譲って仮に、俺の体重がマジに増加してたとしても、今注目するところはそこじゃない！！」

衣食住は保障するというだけあって、食事は変わらないまま運動不足だったからだ。

「つか、そんな事よりもまず謝れ。」

お前が土下座しろ。

「ったく。なんでお前はそうやって、毎度毎度、都合いいタイミングで現れるんだ？どっかで監視でもしてたのか？」

「いましを拾ってきた陰陽頭がいただろ。ええと、なんだっけ——」
「伊々美？」

こちらが先に答えを投げると、明は軽く首肯した。

ていうか名前覚えてやれよ、いい加減。お前、仮にも同僚だろ。

「その弟子とかいう小煩い子供が先日、私の元にやってきていましが囚われている事を告げにきた」

「ああ、那由多な」

なるほど。つまり彼は、無事頼みを果たしてくれたわけだ。

「なんか『真雪の不在が明媛様のお心障りとなっではいけませんので伝えに参りました』だとかよく分からん事を言っていたな」

まあ分からないだろう。

人の姿が見えないからって心配するようなタマじゃなさそうだな。
な。

「一応念のために言っておくが、いましがどうなろうと、私はちっとも気にしないぞ。心配するな」

「皆まで言うな。そこは誤解してない」

畜生。誰だこいつに断りを入れた方がいいとか、余計なアドバイスしやがったのは。

かえって俺が気遣って欲しいだけの痛い人になっちまったじゃねーか。

「まあ、いましの現状などは実際どうでもよかったんで、あの小僧に聞いた一秒後に記憶から消去しておいたんだが。最近の塵災害の

せいで陰陽師の数が減り、当直の者が足りないから、急遽手伝ってくれと借り出されて。寮内の警邏するフリしながら暇つぶしの散歩をしてたら、いきなり凄い爆音と塵を察知したので、おっとり刀でここまで駆けつけてやったというわけだ。どうだ、分かったか？」

「ああ。その説明を聞いて俺は今、お前にありがとうとこのやろうのどっちの五文字を伝えるべきか非常に判断に迷っているよ」

いいタイミングで助けに来てくれた事には素直に感謝するが、それに到る経緯については感謝の欠片も感じねえ。

「つか別にこいつ、俺を助けにきたわけじゃないしな。

むしろ思いつきり忘れ去られてるじゃん。

「ただ人に関心ないんだよ。

「まあ、お前がここに来た理由は分かったが、なんで天井から入ってきたんだ？普通に階段降りて来いよ」

「丁度のこの上あたりを見回ってたからな。入り口まで行くよりこっちの方が速かった」

「さいですか。」

修理代は自腹切れよと思ったが、口には出さなかった。

「だからってわざわざ人の上に着地すんなよ。背骨とか折れたらどーしてくれんだっての」

人体の背面には脊髄を始めとし、神経など重要機関が集中している。下手すれば命にも関るし、それでなくても変なところを損傷すれば不随などの障害にもなりかねない。

「いいだろ別に。陰陽師がその程度で文句言うな。そんなん自分で治せるだろ」

当然の抗議をするこちらに対し、彼女は逆ギレという暴挙に出た。「死人以外の怪我なら塵を使えば治せる——殺されでもしない限りはな」

例えるならそれは、凍った炎のような。燃える氷のような。それまでとは打って違う、有り得ない程に乾いた、硬質の声音。

明らかな怒りを湛えたその声に、真雪は思わずぎょっとした。

本物の

そしてようやくに気づく。彼女が今、怒り狂っているのだという事に。

（考えてみれば、当然か）

この精霊獣が今回の騒ぎの原因なのだとしたら、奴は過去に陰陽師ばかりを狙って殺害している。その中に、少女の知り合いがいたとしても、別段不思議ではない。

「……ようやく尻尾を掴めたな。ちよろちよろ逃げ回りやがって。ここであつたら百年目だ。もう逃がさん」

標的を前に笑う彼女は、激怒に任せて我を失うといった様子はない。どちらかといえば、奇妙に落ち着いて見えた。忍耐から来る冷静さではなく、憤怒を一旦通り越して、辿り着いた冷静さ。

「喜べ真雪。多分、生きて奴を追いつめたのは、私達が初めてだぞ」「やっぱあいつが犯人なのか？」

「知らん。何せ奴に遭遇した者は残らず死んでいるからな。例外はいましくらいだ」

実際には真雪が負つてた怪我は目の前の精霊獣につけられたものではなく、元の時代で謎の侵入者にやられたものなので、そういう意味ではこの対面が本当に初めてとなる。

「よし」

特に気負った様子もなく。

彼女は一言だけを呟くと、眼前の敵に向かって躊躇なく突貫をかけた。

獣に向かって駆け出しながら、瞬時に塵を組み上げ前方に放つ。

以前見たものと同じ、独特の、癖のある技とも言えない大雑把な構成。投げ捨てるような無数の塵は確実に獣の動きを狭め、その隙をについて振り払われた少女の足が、軽く触れただけで獣の身体を遥か後方まで吹き飛ばす。

なんとなく。

参加するタイミングを逃し、少し離れたところで、折れた腕の治療などしながら、その攻防に見入っていた真雪は、少女の技量にただただ感心していた。

「うつわー……」

我ながら間抜けとは思いつつ、他に出来ることも無く、ただ啞然として声を漏らす。

（おっそろしく目がいいな。それに、反応も早い。あれだけ滅茶苦茶な動きをしながら隙が出来ないのはそのせいかな）

狭い牢内を縦横無尽に駆け回り、嬉々として相手を翻弄する少女の動きは、傍から見ても正直、信じがたいものだった。機動力もそうだが、平衡感覚自体もどうかしているレベルだ。精霊石で強化されている筈の精霊獣と、生身で張り合っている。異常としか言いようがない。

（これだから天才って奴は……）

今更、羨望するわけではない。既に慣れ親しんだ痛みがじわりと胸中に滲む。

彼女がやっているのは真雪が先ほど諦めた手段——ごく単純なパワーゲームだ。人体の能力を遥かに凌ぐ精霊獣に対して、それ以上の実力で対抗している。技術もクソもない、だからこそ他に避けようのない正面衝突。

身体を覆うほどに長い黒髪が、少女の動きに従ってまるで獣の尾のように跳ねる。

もはや状況は完全に明のペースだった。一旦、距離を置こうとしたのか。悪夢のような速度で迫る少女に、精霊獣が始めて攻勢に転じた。放たれる塵。迅速で強大。横に逃げて後方に飛び退いても、かわしきれないだろう。少女は一瞬でそれを判断した。そしてそれ以外の選択肢——上空へと避難した。

「へ……？」

まるで騙し絵のような光景だった。崩れかけた天井を足場に、天

地真逆の状態で少女がしゃがみ込んでいる。呆氣に取られたものの、すぐにその力の正体に気づいた。

重力制御だ。しかも上手い。この時代にはまだ、重力などという概念はない筈なのだが、あるいはそんな知識もないままに、純粹なセンスだけでコントロールをしているというのか。

才能の差に落ち込むというより、差がありすぎて比較する事も馬鹿馬鹿しくなる話だ。ともあれ、彼女の常識外れの機動力についても、これで説明がついた。天性の身体能力にプラスして、重力の加速をつけているのだろう。いや、あくまでそういう理屈上の説明がただけだけど。実際の所は大いに納得いかないのだけど。

明は天井からの落下速度に過重をかけながら、精霊獣の脳天を目掛け容赦なく踵を振り下ろした。直撃が決まれば、頭蓋骨さえ砕きかねない一撃。だが相手は避けるまでもなくかざした腕でそれを防ぐと、そのまま明の足を掴んだ。

「っ！」

捕まった。明の顔に、初めて驚愕と僅かな動揺が走る。無理な姿勢で、それでも体勢を立て直し必死に足掻くが、無論そんな事では相手も手を離さない。そのまま、彼女の華奢な体躯を床に叩きつけようとしたところで――

真雪は近場にあった壁の破片を拾い上げ、二人に向かって投げつけた。放たれた礫は狙い変わらず、吸い込まれるように丁度両者の間に飛んでいき、それを避けるため明への拘束が一瞬揺るんだ。その隙を逃さず、精霊獣から離れると、空中で器用に一回転しながら後退してくる。

にやり

こちらの隣に並んだ少女は、訝しげな口調でぼそりと呟いた。

「……奇妙だな。なんだアレ。本当に人間か？」

お前が言うかよ、とも思ったが、それは口に出さず真雪は答えた。

「人間だよ。少なくとも、元はな。精霊獣って知ってるか？」

「知ってるけど……あれは獣とかがなるもんだろ？」

怪訝そうに尋ねてくる。

この時代に、塵への正確な知識が　どこまであるのかは不安だった。

とりあえず知識の共有が図れた事に安堵しつつ、真雪は説明した。

「基本的にはな。だけど、純度の高い精霊石は稀に低級な支配を拒絶する

より高度な使用者を求め、結果として人間が取り込まれる事もある。稀有な例だけだな」

「へえ……」

明は感嘆の声を漏らした。

「いまし、変な事ばかり知ってるんだな。初めて感心したよ」

どうやらこの少女と会話するには、褒められる時まで傷つけられなきゃならんらしい。

なんで素直に感心出来ないんだ……

「んで、結局あれは人間に戻るのか？」

「さあな。寡聞にして俺も精霊化した奴が元に戻った症例は聞いた事がない。——俺が知らないだけかもしれないけど、常識的に考えてまず無理だろ

「なんだ。結局いましの知識はその程度か。まあいい。図体ばかりが無駄にでかくなって中身の伴ってないいましの頭脳なぞに、少し

でも知性を期待した私が愚かだったというだけだ」

.....

そこまで言われるような事、俺言ったか？

言ってねえだろ？

「……とにかく。そういうわけで、あれはそんじょそこらの精霊獣とはちよつと違うぞ。素体が人間なだけあつて、並の精霊獣より遥かに知識も高いし、状況への柔軟性にも優れている。一筋縄ではいかねえ相手だ」

「そうかい」

「手伝おうか？」

「いらん。超余裕だ」

それは特に裏のない、純粹な善意からの申し出だったが。こちらからの援助を、明は振り向きもせず一刀両断した。というか、超とかつて使うの？ 平安時代。

時代考証の必要性を切実に感じた。

「元が人間だと分ければ、かえってやりやすいぐらいだ」
呟くと。

相手の行動を待つつもりも無かったのだろう。

明は即座に塵を練り上げた。

見てて何度か思った事だが、練成から発動まで彼女の扱う術にはほぼタイムラグがない。

異常なまでの速度だ。

練成術は基本を大幅に無視しているが、そこに危うさはない。むしろ安定している。威力そのものには申し分もない。

神威を放つ。

限定空間のみに放出された彼女の望みは、世界の基幹をなす法則すらも歪め、ただ術者の思うままの理想が顕現される……

既に崩壊しきっていた地下牢が。

更に、音を立てて崩れた。

展開された重力場はその有機物・無機物を問わず、範囲内

にいる全ての物質に加圧をかける。

地面のひび割れる音とともに、その重力をモロに浴びた精霊獣が膝を地に着いた。

それを見て。

明はにやりと——まさにそうとしか表現のないくらいにやりと——邪悪に口元を歪ると、一瞬の躊躇もなく精霊獣の元へと踏み出した。

とうぼう

「はあ？」

呆気にとられて思わず呻く。

当然だが、指定範囲内全域に力場が展開されているため、術者本人と言えど、その領域内に入り込んだら影響を受ける。

案の定、少女の動きは目に見えて精細を欠いた。

それでも、常人と比べれば遥かに動きがいい。

重力場を中和しているのか、それとも単に彼女の身体能力を持ってすれば、この程度のハンデなどものともしないのか。

明は間合いに入り込むと、無造作な仕草で薙ぐように足を払った。

先ほどのように常識外れの動きではなく、はつきりと目で追える攻撃だったが、それでも今の精霊獣にはかわし切れずに背中から地面に倒れ込む。

更に追撃をかけようとした彼女に――

吹き飛ばされた精霊獣が、地面の何かを掴み、彼女に向かって投げつけた

砂だ。生理的な反射によって、彼女が咄嗟に目を瞑る。

顔を背け視線を戻す。まさに一瞬。

だがその一瞬だけで充分だった。

どこにそんな力があつたのか。あるいは単に温存していたのか。

全身のバネを使い、素早く身体を起こすと、後方に飛びずさって距離を取った。

そのままくると踵を返し、脇目も振らずに逃げ出していく。

一瞬、追おうかと思ったがやめた。

奴を追跡するには、明の作った重力場を抜けなければなら

ない。

潜り抜けるまでには、もう手遅れだろう。

あまりにも呆気なく。

現れた時と同じ唐突さで、精霊獣が再び夜の闇へと溶けて消えた。

まるでそんなものは最初から存在しなかったかのように。

跡には破壊された部屋と二人の少年少女が残された。

「あーあ。逃げられたか」

重力場を消した明が、さして残念そうでもなく欠伸交じりにそんな事を漏らす。

「追えばよかったじゃん」

「まあな。ただ、まさか逃げるとは思わなかったし。不意を突かれたのは本当だよ。おかげで反応が遅れた」

「言った筈だぜ？ あれは並の精霊獣じゃない。人間の知恵を持つてるんだ。状況判断ぐらい出来るだろ」

人間ではなく動物だったとしても、だ。

まがりなりにも生物としての本能が少しでも残っているなら、こんな物騒な少女を敵に回した時点でどんな奴でも逃げるだろう。

俺だったら地球の果てまで逃げるかもしれない。追ってきそうだけど。

「まあいいや。ここで尻尾は掴んだわけだし。次に会ったら容赦しねえ。今度は確実に仕留めるよ」

「さいですか」

今回の彼女の振る舞いの、一体どこに手加減容赦があったのかはかなり疑問だったが、真雪はあえてそこには触れなかった。

彼は気遣いの日本人だった。

ふと耳を澄ますと、遠くから。人の足音と気配。ざわめきと話し声が聞こえてくる。

「お、ようやく警備兵のお出ましか。まあ、こんだけ騒げは気づく

だろうけど……ちょっと出てくるのが遅いよな。いや、ある意味図つたように見事な登場なんだけど……真雪、いまし怪我はもういいのか？」

「ん？ああ、まあな。大した事ないし、さつき治した」

「よし。じゃあ荷物まとめろ。どうせ大したものなんか持っていないだろうけど、ここに監禁されていたんなら私物もまとめてあるだろう。ある意味、好都合だったな。さっさとここをズラかるぞ」

さらりと当然のように突拍子のない事を言い出す明に、思わず目を見張ると。

彼女は華奢な肩を竦めてみせた。

「なんだ？それとも、ここに残るか？私は別に構わんが……これだけぼろぼろに壊された室内を見られて、脱獄を図ろうとしたなどと妙な嫌疑をかけられても困るだろ。」

無実を証明しようにも、犯人なしでは説得力もあるまい。安心しろ。行き場がないならとりあえず我が家に招いてやる」

確かにあの精霊獣には逃げられたけど、この破壊を行ったのは間違いなく目の前の少女であり、彼女は立派にここにいるわけだ。

つまり俺の正当防衛はともかく、公共物破損については、濡れ衣どころかきっぱりとてめえのせいじゃねえか、むしろ責任を取れ責任を。

「つかお前がちゃんと状況説明と身分を保証してくれさえすれば、そもそもそんな嫌疑をかけられる事もないだろうが――」

言いたい事や思う事。それぞれに山ほどあったが。

それらを全て飲み込んで、真雪はただ溜息をついた。

かていほうもん（前書き）

昨日、一日お休みしました。

遂に毎日更新の約定が破られた…

かていほうもん

空蝉は 殻を見つつも なぐさめつ

結局逃げる事にした。

状況が状況なのでなるべく目立たぬようにと、牛車を用意するヒマもなく、馬を使って陰陽寮を離れた。

「いまし、馬に乗れるか？」

「いや無理」

自転車に電車や車と、交通機関の発達した現代で、まさか乗馬の経験などがあるはずもなく、そんな特技は持っていない。明もその回答を予測していたのか、

「そうか。仕方ないな。なら私だけ馬に乗るからいましは走れ」

「……………」

「いましと二人乗りをすると、前が見えなくなってしまうからな。それが嫌なら仕方がない。私がいましを肩に担いでいくから……………」

「いやいやいやいや。構いませんよ別に。大丈夫、俺走りますんで」

慌てて首を振る。女子中学生にリードされて馬にダンDEMする図もかなりアレだが、自分の肩ぐらいまでしか身長のない少女に、山賊よろしく肩に担がれてしまうというのは、正直もつと凹む。それくらいなら自力で馬と並走した方がなんぼかマシだ。

年上として男として、大切な何かを守るために、真雪は謹んで明の申し出を謹んで拒否した。

どっちにしろ、異端児の身体能力を持っていれば、それほど無理な話ではない。

走るのに邪魔になる荷物は、さすがに明に預けておく。それくら

いなら構わないだろう。屈伸して、膝を伸ばす。次いで伸脚、アキレス腱。軽くストレッチをして、よい、スタート。

風をなびかせ颯爽と馬を駆る少女の後を走って追いかけ、馬上から道案内をされる状況というのも、傍から見たらかなりそれなりなものがあつただろうが（お姫様と下僕、みたいな）それについてはあまり気にせず、真雪はたつたつと無言で大人しくついて行つた。

「ついたぞ。ここだ」

多少の距離があつたため、明の家に辿り着く頃には軽く汗をかいていた。シャツの襟首を掴み、ぱたぱたと風を送り込む。火照つた肌にひんやりとした夜気が心地よい。

見上げる屋敷は予想通り立派なものだった。彼の自宅もかなりのものだが。正直、自分の家に匹敵する敷地面積を持つ家というのを、生まれて初めて見た。

夜の闇に隠れて全体像ははっきり見渡せないが、良質な素材で建てられたであろう建物は、荘厳であつても華美ではなく、重厚な雰囲気がある。余計なものが排除された、シンプルな美しさ。

門を潜るだけで入館料を払ってしまいそうになる、立派な門扉を潜り抜けると、彼女は部屋に案内してくれた。この屋敷内に、無数にある客室の一つだろう。特に目立つた家具もなく、シンプルな個室だ。

部屋に落ち着くと、彼女は女房に命じて飲み物（水）と食事を出してくれた。

「なんだ？」

「……いや、めっちゃ食うなあと思って」

驚いたというよりも、むしろ感心して呟くと、彼女は軽く鼻を鳴らした。

「自分の家の食料を食べて何が悪い？」
確かにその通りだ。

時間が時間だけに、出された食事も簡単なものだったが、それ

でも彼にとっては充分に有難かった。なにせ、塵を使うと極端に腹が減る。異端児が主たるこの家でも、やはり火急に備えて常に食事が出来る体制にしてあるのだろう。

細切りにされた蕪の古漬けと、根菜と鶏肉の煮物。さすがに炊きたての白米とはいかないのか、大量の塩結び。平安時代では、おかずは少なく主食を大量に食べるのが主流だ。二十四時間電気とガスが使える現代とは違い、この時代では定時以外の食事で暖かいものを用意するのは難しいのだろう。出てきた食事はどれも冷えていたが、釜で炊いた米は、そんな事が気にならないくらいに美味だった。軽く走った後ということもあり、真雪も遠慮なくちょこちょこつまんだが、明の食欲はそれ以上だった。

多分、米だけで軽く五合分は食べてる。一般的にご飯一膳が半合だとして、十人前だ。それだけでもかなり驚異的な数字だったが、驚く無かれここにちよつとした罫がある。

今は真夜中である。当然だが、食事時ではない。本来の夕飯はもつと早い時間で、きつとこの食材は、その残りだろう。つまり彼女は普通に夕飯を食った後で、その数時間後に十人前の飯を食った計算になる。

どう考えても胃の体積より食った量の方が多い。明の小作りな顔、華奢な身体をまじまじと見つめる。ぶかぶかな服を着ているせいで分かりづらいが、全体的に身体についてる肉も薄い。

体脂肪率、一桁台って感じ。

どうなつてんだよこいつ？

胃下垂か？ギヤル曽根か？

「夜中にそんなに食って太らんねえのか、お前？」

「いや別に？太った事とかないし」

「マジか？」

「ただエネルギー効率悪いんだよ。」

「……とは言われてもな。陰陽師が大食漢なのはいましも知ってるだろ？正味な話、何時にどれだけ食べようが、それ以上の消費を繰

り返してれば、そもそも太る余剰分などないぞ」

お前の口はそこまで大きく開くのか、というほどに大口を開けて、彼女は更にかぶり握り飯にかぶりついた。

しかし、なんだろう。かなり大口で物を食べる割に、彼女の食事は全然見苦しくない。むしろ食べ方自体は非常に綺麗で、どこか気品すらあるような気がする。なんでだ？

それにしても美形って得だよな。大食いしてる姿までなんか様になってるし。

眼前の少女の存在につくづく理不尽なものを感じて、真雪は歎息を漏らした。茶碗に酌まれた水を煽る。

冷たく冷えた井戸水は、特別何かをしたわけでもないが、カルキ臭さは微塵もなく、澄んだ甘みが心地よい。走って乾いた身体に、水分が一気に染み渡るようだ。

「あの、精霊獣」

「ん？」

ぽつりと呟くと、明は聞きつけてこちらに目を向けてきた（でも食べるのはやめなかった）その視線に促されるように、続ける。

「今起こってる塵災害って、やっぱり今日出たあいつの仕業なのか？」

「さあな？とっ捕まえて確認しない事には、正確な事なぞ分からないさ。ただ、ここ最近で塵災害が発生胃している地域に、何の関連もない精霊獣が現れるってのもおかしい話だろ。それだったまだ、両者が関係してると考えた方が辻褄が合う」

辻褄、ね……

確かに、その思考の方が合理的だろう。だが決して、世界は辻褄合わせの為に回っているわけではない。

地球の自転なんて所詮、惑星誕生時の名残に過ぎないし、その中心となっているのは人間ではなくあくまで地軸だ。世界が自分を要にして回っているなんて考え方は、根本から切り捨てた方がいい。

まあ、こいつは本気でそう考えてるかも知れないけど。

でもこの時代ってまだガリレオいないしな。自転どころか地動説さえ唱えられていない。

あれ？コペルニクスはいたんだっけ？いや、どうでもいいけど。もぐもぐと、黙々と食事を続ける少女（恐ろしい事にまだ食べ続けている）向き直り、今までずっと引つかかっていた事を尋ねた。

「なあ、明」

「なんだ？」

首をかしげる少女に真雪は、確信に迫る一言を投げつけた。

「お前、今回の塵災害に襲われた奴の中に、誰か知り合いでもいたのか？」

かん

少女が、食事の手を止めた。

驚くほど真つ黒い瞳が、じつとこちらを見つめてくる。覗き込むというより、決りこむような鋭い視線。

自分に向けられる眼差しをはつきり自覚しながら、真雪は無言で煮物の器に箸を伸ばした。鶏肉と一緒に根菜を煮込んだ煮物は、煮詰めすぎたのか若干味が濃い。だが、おかずにはこのくらいが丁度いいのかもしれない。

「……なぜそう思う？」

「なんとなく」

「勘か」

「勘だ」

実際のところは、何の根拠もない、ただのあてずっぽうというわけでもない。

たとえば、先ほど自分が精霊獣に襲われた時とか。

仮にも陰陽寮の誰もが駆けつけない中で——警備兵さえも感知出来なかったあの場に、眼前の少女はいち早く駆けつけた。深夜であつたにも関わらず都合よく。あの時はただの散歩だとか適当な事を言っていたが、それよりも、本人が起こり得る異常事態に対し、常に気を配っていたからといった方が、説明としてはよほど説得力がある。考えてみれば、初めて彼女と会った時も、自分が暴れまわっていた時だ。

そしてあの激昂。静かに怒り狂う、まるで冷たい炎のような。

あの根底にあるのは義務でも責任感でもない。

つまり義憤ではなく私怨。

単純な、個人的恨みによるものだ。

「……知り合いの誰か、という表現はあまり適切じゃないな」
「あ？」

「正確には、誰かではなく知り合いが、だ」
「？」

「と、いうより、私の知人だけがあのケダモノに襲われてるといった方がより正しい」

さすがに不穏なものを感じて――

真雪はそれ以上言わず、ただ黙って説明を求めた。明はちらりとこちらを見やり、

「遠野からは何も聞いていないのか？」

「いや、特には」

彼女から教えられたのは。

陰陽師達が塵災害の被害にあっているという事と。

自分がその容疑者として疑われているという事だけだ。

その事を伝えたと、案の上、彼女は呆れ返った表情を浮かべた。

顔面の表情筋がそれはそれは豊かに『侮蔑』という色で彩られている。

「いまし、よくそれだけで素直に監禁なんぞされる気になったな」

「うつせーな。人にはいろいろ事情があるんだよ」

色香に誑かされたからとは言わない。

無論、餌付けされたからとも言わない。

世の中、言う必要の無い事というものはあるのだ。

「なんで男は皆あいつに騙されるんだろうなあ……あんな若作りで年増の婆さんより私の方が百倍美しいぞ」

それについてはノーコメントで。

彼女はどうかということもなく、続けた。

「災害で襲われたのは全員、私の知人だった者だ」

「ぜ、全員？」

「ああ」

思わず聞き返したこちらに対し、少女はどうという事もなさそうにあっさりと頷いた。本当にあっさりと。

「最初のうちは無差別だと思われてた――事実、私もそう思ってた

よ。私だけでなく誰もが皆、だな。でも襲われる人数が増えるにつれて、次第に傾向がはつきりしてきた。殺された者達は皆『ある人物』と親しく言葉を交わしていた——そいつにとって知己と呼べる人達だった」

「その人物ってのが……お前？」

「ああ」

「じゃあ……その人たちってのはつまり——お前と仲良くしてから殺されたってのか!？」

「私は、そう思ってる。——私以外の奴らもな」

自嘲でも嘲笑でもなく。

明はふつと微笑んだ。

なぜ、そんな笑顔を浮かべるんだ？

なんで、そんな風に笑えるんだ？

とてもじゃないが、そんな楽しい話をしているわけじゃないだろう？

「もっとも今や、そう考えているのは私だけじゃない。陰陽師の全員にとっての共通認識だよ。今じゃもう誰も、私と話そうしない。まあ、確かにそんな事で殺されたりしたら、堪ったものじゃないしな。知らないのは異邦人のいましぐらいだ」

別に、身内と呼べる人間が、誰もいないわけじゃないんだよ。

ただ今じゃもう、それがいなくなってしまったただけだ。

そう告げる明の声には、先刻見せた怒りや激しさの欠片もない。

とても平淡で風いだ声音だった。

だが、その内容が何を差しているかを自覚し、真雪は愕然となった。

心配してくれる友達ぐらいいるだろう、だって？

困った時には助けてくれと、自分から声をかけてみる、なんて。

何も知らない部外者の分際で、一体自分はどれだけ無神経なセリフを吐いたんだろう。

自分がそんな存在だったら。

自分と親しくした人間だけが、残らず殺されていくようなそんな状況で、一体誰に頼れというのだろう。

誰を身内と呼べるというのだろう。

慕った人が死ぬかもしれないのに。

殺されてしまうかもしれないのに。

自分のせいで。

気分が——悪い。

俺は一体、彼女になんて事を言ってしまったんだ？

「ごめん」

深い考えがあつたわけでもなく。

気づけば真雪は反射的に明に頭を下げていた。

誰に言われたわけでもなく。無論、頭上から誰かに踏み潰されたわけでもない。

彼は自らの意思で、床に手をつき額づいた。

「え？」

土下座の姿勢で首を垂れる真雪に、明は疑問の眼差しを向けた。

「何が？」

「いや俺、前に無神経な事言ったから。ごめん」

「謝るな」

「ごめん」

「だから、謝んなよ鬱陶しい」

「それでもごめん」

迷惑がられても、自己満足だといわれようと。

それ以外に謝罪の方法を知らなかった。

深く陳謝するこちらを見て、明は呆れたように歎息を漏らした。

「……別に怒ってるわけじゃないし、謝るならお互い様だ。私もいましを利用しようとしたんだから」

私、も？

も、って事は他の相手は誰だ？

「襲われたのが皆、私の知己だった事が分かった時には、もうほとんどの人間が残っていなかった。それにつれて被害もだんだん少なくなっていくんだが……反面、標的となる基準がすごく厳しくなっていた。少しでも私と会話した者、接触を持った者さえもまた狙われるようになっていった。——今ではもう、陰陽師の中で誰一人、私に話しかけてこようなどと数奇な者はいない」

明は言った。

別段、悲しんでいるようにも見えないし、何かを堪えている様子もない。

その姿に、痛みを覚えないわけでもなかったが、それよりも彼女のセリフが真雪の中でひっかった。

あれ？話しかける人がいないって……

俺、普通にこいつとトークしてるけど。

しかもなんかそれ、周囲に知れ渡ってるっぽいけど。

ちよつとヤバくね？

「誰一人つて……そんな風になる前に、誰がいなかったのかよ。お前を助けてくれる奴とか——」

「ああ、いたな。昔」

明の何気ない一言は、それ以上の質問を遮るのに充分だった。

「ま、私も陰陽寮という集団組織に属するものだ。完全に誰とも口をきかないで過ごすなんて出来はしないけどな。極力、周囲との控えるようにしてるよ。相手も怖がっちゃって可哀相だし。おかげで心ある奴は私との会話を積極的に避けるようになっていった。身分のある奴に関しては、私との用向きに代理人を立てるくらいだ。よっぽど直接話したくないらしい。いましもやっていただろ？あの子犬みたいな小僧を使つて」

「あれは……そんな意味じゃねーよ。そもそも俺、お前がそんなになつてるなんて知らなかったし」

実際、その言葉自体に嘘はなかったのだが。そういった事情を聞かされると、あの時まさに伝言を頼まれた那由多が、あそこまでビビってた理由が分かるうというものだ。それでもちゃんと頼みを聞いてくれた少年は、多分、とてつもなくいい奴なんだろう。

とはいえ、奴には本気で悪い事をした。

知つてたらちゃんと自分で伝えたのに。

「つかそれつて、俺はともかく伊々美が知らなかったわけではな
いよな。」

なんで弟子がそんな目にあつてるのに、止めなかったんだろう？
実はSなんだろうか、あいつ。

「全員つて……じゃあお前、家族とかどうなったんだ？親父さんと
かは——」

「私は父上以外に身内はいないし、彼や他の七星は無事だよ。とい
うか、手が出せないんだろうな、実際。あの精霊獣、知恵があると

は思っていたが、元人間だったつてのもすんなり納得出来た。奴は自分より強い奴は襲わないんだ」

たとえ塵の力を借りようと。自身の限界を超える力を手に入れようと。

世の中には、それだけでは絶対に越えられない壁がある。

偽者は本物に敵う事など、所詮はない。

明は何がそんなに面白いのか、堪えきれないようにくつくつと笑った。

「それって要するに、保身って事だろ。獣の生存本能とも呼べるかもしれないが、それでも保身だ。人間的だよな——もの凄く人間的だ。自分より弱い者だけを狙い、正体がバレないように姿を隠し、強い者には近づかない。打算的で、卑怯で、臆病で、常に我が身の安全を図ってる。そんな器用な事は人間じゃなきゃ出来ない」

だから——人意か。

人の意思なんて大層なものじゃない。奴の行動の裏にあるのは、獣の本能ではなく人としての保身。

打算が——働いている。

「なあ真雪。あの精霊獣はいつになったら完全に精霊化するんだ？」
彼女からの質問に、真雪は少し考え込んだ。

「この塵災害が始まったのはいつからだっけ？」

「いましの来る一月くらい前からだな。だからもう一月半ぐらい経ってる」

「もし素体となっているのが、並みの人間だったらとくに石に乗っ取られて精神が崩壊してる。よっぽど根性のある奴でも、せいぜいもって一週間だ。けど、相手が神威能力者だった場合は話が違う」

明自身、その答えを聞くまでもなく、半ば予想していた事だったのだろう。視線に促され、続ける。

「生まれつき塵に耐性のある異端児——陰陽師が素体となっている場合、どのくらい持つかは石の大きさと本人の実力次第だ。場合によっては、飲み込まれずに石を完全に同化するって事もある」

下地のある異端児と普通人ではそもそも最初に立っているステージが違う。

抵抗力を持たない人間ならば精霊石の支配下に置かれるだけだが、異端児はそれをコントロールする術を持っているからだ。

「……なるほど。てことは、やっぱ時間切れを狙うのは無理か」

「時間切れ？」

「奴が本当に獣と化したら——小賢しい浅知恵なぞ、使う余地もなく理性を失ったら、こそこそ隠れたりもせずに、私や今までは避けられ来た他の七星を狙うだろ。そうならば一瞬でケリがつくと思った」

「……すげえ自信だな」

「当然だろ」

彼女は大物っぽく堂々と、無い胸を張った。一瞬、皮肉かと思っただが、すぐにそれが掛け値なしに彼女の本心である事に気づき、真雪はそれ以上の会話を避けた。

「とはいえ、それについては諦めるしかなさそうだ。いくら生き残ってるからといって襲われもしない人間を罠にする事は出来ない。

かといって、迂闊に誰かを罠に使えばそいつが殺されてしまうかもしれない。——だから、真雪。余所者で、知り合いがなく、ほどほどの実力があり、陰陽師であるいまし。いましの存在は、今の陰陽寮にとって本当に都合がよかった」

そこで明の目つきが変わった。まるで、獲物を狙う禿鷹のように。

否、今までもそんな気配を匂わせていなかったわけじゃない。会話の端々でも彼女は、時々こちらを探るような視線を向けていた。ただ、単に今、それが露骨になったただけだ。

狙われてる狙われてる。

真雪は箸を置くと、流れるように隙のない、ごく自然な動作で立ち上がった。

「ご馳走様。じゃ、俺そろそろ終電なんで帰るから——」

「この状況になって以来、私に話しかけてくるような阿呆に会ったのは初めてだよ。おまけに鳴り物入りで現れたため、無駄に知名度

はあるし実力もなかなかだ。いましなら充分、囧としての効果を持つ」

明はこちらのボケを完膚なきまでにスルーして、完全に空気をキヤンセルすると、強引に話を進めた。

（なんで俺の周りには、こう身勝手な女が多いんだ）

うんざりしながら歎息し、眼前の少女に向かって諭すように話しかける。

「囧ってなあ……」

「実際、狙い通り『アレ』は現れた。今まで後手に回るばかりだった分、これは絶好の機会だ。なんとしてでもこれを機に『アレ』を仕留めてみせる」

とりあえず話をしようにも、彼女は一切こちらの言を聞いていなかった。あるいは、相手が拒否する事など、考えてもいないのかも知れない。幼く美麗な面立ちの中には、硬い決意の色がある。その熱意には関心するが、おおよそ理解しがたい発想でもある。

「仕留めるって意気込むのはいいけどよ、なんで俺がわざわざ自分の命を危険に晒してまで、それに協力してやらなきゃなんねーんだ？ 勝手に人を予定に組み込むのはやめてくれ」

「え？」

信じられないものを聞いたかのように、彼女はきょとんと目を瞬いてみせた。

好き

不意をつかれたように驚く彼女の顔は、いままでのものとは違いどこか無防備であどけない。そういう仕草だけを見れば年相応で、うつかりすると可愛いなどと思ってしまう。

「え？　じゃねーだろ。なんでそんなに意外そうだよ。まあ、話を聞けば大変そうだし、力になってやりたいとは思うけど、今の俺は自分の事さえままならねえんだ。理由もなく呑気に人助けしてる場合じゃねーんだよ」

誤解ないようにきっぱりと告げておく。実際、彼女の境遇についてはいささかならず気の毒に思うし、思いについても共感するところはあるが——かといって、ボランティア奉仕出来るほど今の自分には余裕がない。

明は、暫し考え込むような仕草をし——やがてぼんつと手を打つと、すすすつと音もなくにじり寄りぴたりと寄り添った。そのままこちらの肩にこてんと小さな頭を乗せて、まったく色の映らない真っ黒な瞳で酷く平淡に呟く。

「好き」

「……いや、別にそんなぞんさいに理由を作って欲しいわけじゃねーし」

こんな心無い告白は生まれて初めて聞いた。

「つか、まったく感情のない声でそんな事を言われても、信憑性は皆無である。嬉しくもなんともない。」

反論して、とりあえず肩から彼女の頭を外す。と、明は存外抵抗なく首を垂直に戻しながらやれやれとかぶりを振った。

「おいおい。どうやら自分の立場を分かってないようだな、真雪。いましは私に借りがあるんだぞ？」

「借り？」

明の唐突な言いなりに、はてなと首を傾げる。

迷惑をかけられた覚えならあるが、借りを作った覚えはない。

「しらばつくれんな。さっき、助けてやっただろうが」

「あれ、借りか？」

かなり疑わしい気持ちで、尋ねる。

プラマイで考えるなら、どちらかという助けられたプラスより
よりややこしい事に巻き込んでくれやがったマイナスの方が大きい。
こちらが礼を言うより先に、相手からの謝罪を求めたい。

「借り、だろ。助けてやったじゃん。逃亡先までご丁寧に提供した
し」

「驚くほど都合のいい記憶力をお持ちのようだから、一応忠告して
おくが、そもそも俺が脱走しなきゃならない事態に追い込んでくれ
やがったのはお前だろうが」

「食事も作ってやったし」

「飯を食わして貰った事については反論ないが、作ったのはお前じ
ゃない」

しかもほとんど自分で食ったろうが。

態度の大物っぷりに反し、意外に小さな恩をかなりしつこくふり
かざすタイプらしかった。

律儀に事実を訂正していると、やおら明は 顔をしかめた。見て
いてあからさまに表情が不機嫌になる。

「なんだよー。別にいいだろ。ごちゃごちゃ言っでないで素直に手
伝えよ。いましも陰陽師の端くれなら、この状況に思うところがあ
るだろ。大体、遠野には素直に利用されときながら、命の恩人たる
私の頼みが聞けないってのはどういうことだ!？」

「なんでいきなりキレルんだよ!?!いや、っーかちよつと待て!な
んだ、その遠野に利用されてたつてのは!？」

慌てて問いかけると、むしろその反応こそ意外だったのか、瞳に
呆れの色を浮かべた。

「……気づいてなかったのか?あんな風に、今じゃ誰にも使われて
ない座敷牢に、いましを一人で閉じ込めるなんて——どう考えても

こいつ罔なんでも好きに襲って下さい的な処置じゃん。言っとくけど、私があのお小僧に話を聞いた時には、既に陰陽寮のほとんどの者がいましの境遇を知ってたぞ。だから、誰でも襲えたんだ。ついでに、誰がその話を広めたかなんてのは——もう言うまでもないだろ？」

「ああ、ねえよ……」

くっそ、あの熟女……

どうせなんか裏があるだろうな、とは最初から思ってたけど！

勝手に人を餌にすんなよ！

マジで死ぬトコだったじゃねえか！

こちらが世間の冷たさと大人の汚さに煩悶していると、明はそんな悩みを知ってか知らずか、仕方なさそうに首をふった。清流のよくな癖のない髪の毛が、その動きに従ってさらさらと揺れる。

「まったく……頑固な奴だな、真雪は。まあ無駄に自分を安売りしないところは、好感が持てるけど」

「そっかい。ありがとよ」

「正直、私のこの人知を超えた、神をも凌ぐ麗しさと魅力を持てれば、いましごときを意のままにするなど、朝飯前だと思ってただけだな」

「ごときと言っな」

あと自分で自分をベタ褒めすんな。

ていうか、もうこいつにはきつと、何を言っても無駄だな。

「だがいましがそこまでゴネるなら仕方ない。取引をしよう。黒野真雪」

「取引？」

「ああ。どちらにしろ、遠野の姦計にハメられた以上、いましはこれからもあのお精霊獣につけ狙われる。遠野の提示した見返りが何かは知らないが、私ならそれと同等以上ものを提供出来るぞ。更に、いましの命の安全も保障してやる。どうだ？」

「……随分な自信だな」

余りに尊大な彼女の言い草に、半ば圧倒されつつも、それを認め

たなくて、力なくぼやく。事実、取引など言いながらこちらに条件を提示してくる彼女の瞳は、きらきらとまごうことない自信に満ちていた。

到底年下の、それも少女の言動とは思えない。

一体どんな育て方をしたら、この歳でこんな人間が出来上がるのだろう？

仮親だという養父に、是非ともレシピを教えて欲しい。

「だって謙遜する理由がないし」

呟きが耳に入ったのか、彼女は事もなげに答えた。続ける。

「陰陽七星を侮るな。私は仮にも陰陽師においては最高位に連なる者だ。いまして私が私に協力するというなら、私は必ずいましを守って見せる——相手が何であろうとも」

そう断言する彼女は、やはり揺ぎ無い自信に満ちていた。気負うでもなく力むでもなく。ごく自然に当たり前の事として、自分の力を信じている者の顔。それが可能であると知っているからこそその確信に満ちた瞳。

「自分に出来る事を自覚するのに、遠慮は必要ないだろ。さしあたり、当面の生活ぐらいは面倒みてやるよ。その代わりに、いましては贄として私があのかつたれな精霊獣を仕留めるのに協力する。どう？」

そう言つて、自他共に認める白貌につこりと、花のような笑みを浮かべ、こちらへと手を差し出してくる。普段は無愛想で人間味がないと思つていたが、なまじこうして表情が生まれると、それ以上に生物らしさが薄れるのは意外だった。

なんというか。

造作があまりに整いすぎていて、その表情が完成されきっているが故に、どこか造り物めいた人形のような印象を受ける。

ひよつとすると、普段の彼女が不機嫌そうな無表情をしているのは、自分でもその自覚があるからなのかもしれない。とはいえ、果然と見つめるまでもなく、明に差し出された手の意味は明白だった。

深遠を讃えた少女の瞳には、常人の理解を超える何かが映っているのか。月のない夜空のような、驚くほど黒い闇色の瞳。思わず、吸い込まれそうになる程の。純粹な漆黒。

どの道この状況で、選べる選択肢などそれほどない。覚悟を決めて、真雪は明の手を取った。

握り返された小さな手は、人間のように温かかった。

恋心

玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば

初めてその少女の存在を知ったのは、まだ彼女がほんの子供の頃だった。

酷く小さく頼りない矮躯。その身を包みこむ衣は分不相応に上等の品で、どこかちぐはぐな違和感を受ける。ただ、腰まで届く長い髪と、黒い大きな瞳だけが奇妙なくらいきらきらと美しく、その事だけが酷く印象に残っていたのを覚えている。

彼女を連れてきたのは、その養父と名乗る人物だった。大よそ、陰陽寮においては、知らぬ者のいないほどの、実力者。その事實は陰陽師達にとって、大きな波紋を呼んだ。

なぜ彼のような人物が、こんな得体の知れない子供を連れてきたのか。嫉妬と疑心、好奇心と下世話な歓心から、暫く陰陽寮はその話題で持ちきりになった。当の少女とその養父は、そんな口さがない噂などまるで聞こえもせぬように振舞った。

彼女はとことん、家名や身分に相応しくない振る舞いを好んだ。

——とは、周りの大人の言い分だったが。仮にも貴族の家に養女として引き取られながら、男言葉で話し、男性の衣装に身を包み、几帳の奥に隠れるでもなく平然と外を歩いた。そんな姿や奇矯な振る舞いを嘲笑う者も少なくなかったが、養父となった人物は特段、それを諷めようとはしなかった。また少女自身も、他人の風評など気にする事もなく、飄々としたままでも自由に振舞った。

そんな少女が珍しく、まるで新種の蝶でも愛でるかのようにつけばいつも視線で少女の姿を追っていた。

だが、少女の成長と共に、そんな周囲の目線や出自に関する噂なども徐々に収まっていった。理由の一つとしては――彼女がずば抜けた天才だったからだ。世間にとって異端となる神威能力者の中にあってさえ浮き立つほど、その才能は圧倒的だった。

事実、長じれば間違いなく、歴史に名を残す一人となるだろう。少女の才に比べると、自分を含めた他の陰陽師達の技は酷く稚拙なものに思えた。現れた当時は得体の知れない、嘲笑と侮蔑の対象でしかなかった少女は、瞬く間に陰陽寮でも頂点の一人に上り詰めた。異能者の集団である陰陽寮は、才能のある者に対して公平で平等だった。陰陽七星に選ばれたのは、それからほどなくしてすぐの事。当時の彼女はまだ十歳だった。

他の七星や大人たちに混じり、まだ年端もいかなない小さな子供が、しかめつらしく対等に振舞っている様は、傍から見ているとどこか微笑ましくもあり、また頼もしくもあった。同じ陰陽師として、嫉妬がないのかと問われれば嘘になる――少なくとも、自分で自分の才能に見切りをつける気持ちはなかったし、自分の歳の半分にも満たない子供に実力と地位で劣るという事実は、あまり気持ちのいいものではなかった。同僚の中にははつきりと嫉妬を示した者もいる。無理もない。ただ、不思議と反感は抱かなかった。否、考えてみれば、自分が彼女に悪意を抱いた事は一度もなかった。胸中を占めるのは、羨望と憧憬。

まるで恋をしているようだと思った。

一回りも年下のこの少女に。だが。

憧憬と羨望。関心と好意。好奇心と嫉妬。それが全て揃えば――それはもう、恋のようなものだった。

自覚したからとはいえ、その後、少女との距離が狭まったかとい

うとそうでもない。むしろ、周りには誰にも気づかれないう、注意して振舞った。

元より、少女自身は身分的にも立場的にも既に手の届かない存在と化していたので、本人に気づかれる心配はなかった。否、むしろ当の少女自身は自分の事など覚えてもいないだろう。彼女は常に才ある人間に囲まれていた。

その事に不快を覚えないでもなかったが、彼ら——あるいは彼女ら——もまた、自分などは足元にも及ばない力量の持ち主で、だからこそ怒りを覚える事はなかった。それは遠目から見ても、自分などよりよっぽど、彼女の周囲に立つに相応しい実力を持った者達だったからだ。

だが、そんな彼女にも同世代の友人がいなかったわけではない。多くの者は身分を弁え、立場を自覚し。少女の影すらも踏まぬように振舞っていたが、中にはそれを理解しない身の程知らずもいた。ある日、廊下を歩いていた時に、ふとした拍子でその光景を見た。彼女と一緒にいたのは、同世代くらいの見たこともない少年だった。服装からして、到底彼女に並び立つ者ではないだろう。恐らくは陰陽師の見習い生といったところか。特に目立つところのない、才能どころか凡庸極まりない、せいぜいが背が高い事ぐらいが取り得の、ただのつまらない子供。

気になったのは、その少年ではなかった。その隣で談笑する、彼女の表情。

歳の離れた大人と対等に渡り合うでもない、子供らしからぬ威厳を讃えた、厳しい顔つきでもない。そこにいたのは、対等な立場の、まるで気の置けない友人とくだらない事で笑い合う、何の特徴も変哲もない、ただの子供の姿だった。

思うに、あれを見た瞬間から、自分は引き返せなくなったのだと思う。

ヒモ生活開始

見上げる天井は寝そべっていても、やはりさほどの距離感を感じない。ご自慢の視力を持つてすれば、もつとも細かな木目までも数えられそうだった。それでも、油断していると崩れ落ちるかもしれないなどという、物騒な心配をしなくてもいいのは、まあありがたい事なのだろう。普通に考えて、天井が突如崩れ落ちる境遇というのも、思いつかないが。

与えられた部屋は特に広くもなく、かといって狭くもなく、つまりはそんなものだった。旅館——この時代では旅籠というらしいが——の主人は、愛想を振りまいてくるわけでもないが、必要なものを出し惜しむ事もない。足りないものを告げれば、それはいつの間にか用意されていた。まあ、恐らくはこちらが支払った対価を超えない限りで。

（つつても別に、払ったのは俺じゃねーけどさ）

他人が支払った料金分の恩恵をきっちり享受しつつ、出された食事を素直に頂く。

飯椀に山盛りに（比喻ではなく本当に山型になるまでみつしりと盛られている）米、汁物、煎り豆腐、漬物の千本切、小魚の佃煮、舐め味噌。基本的に味の濃いものが多く、なるほど、白い米の友としては充分以上にありがたかったが、こう食物繊維系のヘルシーな食事ばかりが続いていると、さすがにいささか飽きてくる。老人でもあるまいし。つーか肉食いてえ肉。

恐らく、この時代の食文化からすると、まだ肉をさほど食べる風習はなかったのだろう。多少は食べたかも知れないが。明治維新後、外国文化が民間にも取り入れられて以来、急速に欧米化した日本の食事ではあるが、本来の日本食は、どちらかというと動物系タンパク質より、山菜などの植物性に富んだものだったと聞く。現在、流行のメタボにかかっている患者などでも、古来からの日本食に切り替

えるところまくダイエットが出来るそうだ。

それにしても……

「あー……肉食いてえ肉」

今この瞬間に、マックか吉牛かケンタかモスか牛角かドンキか、なんかそういうジャンキーな物が食べられたら、何も文句は言わないのだが。

それはそれとして、真雪は目の前の食事をありがたく頂いた。他に食いたい物があるからといえ、出された物を残すのは勿体無いし別段、彼は日本食が嫌いなわけでもない。むしろ、出された物はなんでも食べれる雑食系だ。

「……雪はちゃんとメシ食ってんのかなー」

甘みと粘り気のある白米を噛み締めながら、唐突に思いつきぼつりと呟く。

二十一世紀の黒野家において、家事全般はほとんど真雪の仕事だった。幼い頃に母親が他界して以来、食事を始めとする黒野家の労働を一手に引き受けている。理由としては、自分以外の家族が、あまりにも生活不能者揃いだった事に気づいた為だ。

特に姉の白雪はその傾向が強い。ロクな料理も出来ない癖に、好き嫌いはやたら激しい。あの偏食欠食引きこもり女に、定期的な食事を取らせるのは、それなりに難易度が高いのだ。少しは明の問答無用な食欲を見習って欲しい。

（ま、あんな奴が普通に家にいたらそれだけでエンゲル係数が半端ない事になるけど）

その明も、今この場にはいない。ニートである自分とは違い、彼女には（如何に年下であろうと）立派な仕事があるため、真昼間から暇を持て余してごろごろしているわけにはいかないのだ。

年下の女子中学生を労働に従事させておきながら、その金で自分の生活費を賄って貰い、あげく当の本人はひがな一日寝過ごししているだけだと思つと、うっかり自分がヒモみたいに思えてきて情けない。

ていうか、ちょっと泣きたくなってくる。

「もう三日目か…… ったく、いつまでこうしてりゃいいんだか」

力なくぼやく。大幅に環境改善がされたとはいえ、やることのない日々は、やはり変わらずに退屈で、ともすれば日にちの感覚さえも忘れそうになる。

とはいえ別に、ここが牢獄のようだとか、そこまでの事を言うつもりもないが。

「牢獄との違いは、好きに出入りが出来るって事か…… でも、行く場所がなけりやどこにいても同じだよな」

結局、時代が変われど場所が変われど、人はそんな事では自由にはなれないのかもしれない。

いつぞやの、多分冒頭の導入部分あたりで交わした、姉との会話をふいに思い出す。

彼が居座っているのは、明の屋敷ではなく彼女に用意された宿泊施設だった。あのどでかい屋敷に、まさか部屋の一つや二つ、余っていないとも思えないが―― 実際、当初の明は自宅に真雪を住ませる予定だったようだが―― それに反対したのは他でもない自分だ。「あー？ なんでさ？ うちにいた方が、何かあった時にすぐ駆けつけられるし、便利じゃん。ごちゃごちゃ面倒な事言ってるどぶっ殺すぞ」

「なんでそんな短気なんだよ！？ 迂闊に意見をいうだけで、命をかなきゃなんねえのか俺は。お前、自分で言った事をもう一度よく考えてみるよ。今まで、塵災害にあつた犠牲者の中に、陰陽七星とかいう、お前と同格の能力者は含まれてなかったんだろ？」

「ああ、それが？」

何の意味があるというのか？ 不思議そうに首を傾げる明に、思わず溜息をつく。いくら大人びて見えても、こういうところはやはり子供なのだと思う。

「意図的に自分以上の実力者を避けているような相手が、当の七星であるお前の屋敷なんぞに、どうしてのこのこ近づいてくると思う

んだよ？確かに、ここにいたり俺の防御って意味じゃ鉄壁の守りかもしれないが、そもそもそれじゃ、囷としての意味がないだろうが」
「なるほど」

それなりに筋の通った話だからか、この少女にしては珍しく、特に皮肉もなく頷いた。どうやら、殺されはしないで済むようだった。にしても、会話してるだけで脅迫を受けなきゃならないとは……
キレイやすい子供というのは、現代特有の現象かと思ったが、あにはからんや千年前から子供の性質というのはあまり変わってないらしい。

正体不明の精霊獣を捕まえるより先に、まずこの小娘を取り締まる方が先なんじゃないかと、切実に思った。

「ところでお前、自分の身内が狙われる理由とかって見当ついてんのか？誰かから恨みを買った——とか」

「さあ？正直、恨み妬み嫉みなら、人一倍買ってる自信があるしなあ。心当たりなんて、掃いて捨てるほどあるよ」

「……もう少し、平穏な生き方をしようぜ」

一応、彼女の将来を思つての忠告だったが、当の本人はといえば、反省もなく軽く肩を竦めるだけだった。

「別に私が悪いわけじゃないもん。身元不明の子供が、いきなり貴族の家に引き取られ、あぐく最年少で七星の一人に選ばれたら、やつかみの一つも買つたろうさ。むしろ、この状況で恨みを買わない方が不可能だ」

「完全逆恨みじゃねーか」

否、正確に言えば逆恨みですらない。ただの嫉妬か——あるいは八つ当たりには過ぎない。

他人事ながら、その理不尽さに顔を顰める真雪に対し、明は特に怒りに示すでもなく、どうという事もなさそうにひらひらと手を振った。こういうところは器がでかい。

「ま、仕方ないのさ。そもそも、私のように人知を外れた美貌と神さえ嫉妬するであろう才能、そして天に選ばれたと思えない天

才的な頭脳を前にして、平静な心持でいられる人間の存在なぞ、この世に皆無なのだから。まあ、私と比べてあまりにも才能を持たない凡人に対し、哀れみというか憐憫というか、なんとなく悲しいものを覚えないでもないが……それもこれも、私が美しすぎるのが悪いんだ。凡俗の嫉妬や羨望など、天才の宿命として受け入れてやるう」

「はあ……」

予想外の方向に器がでかかった。

何が凄いつてこの娘、比喻でも誇張でもましてや冗談なんかでもなく、本気で掛け値抜きにこのセリフを言っているところだ。

自画絶賛、といたいところだが。

否定する要素が見つからないのも悔しい。

でもいくらなんでも褒めすぎだろ。

ナルシー明と呼ぶことにしよう。

(…ガキか俺は)

生活費を全て賄って貰っている筈の少女の悪口を、せめてもの憂さ晴らしに胸中でこっそらと呟き。真雪はその意味のなさに諦めて嘆息した。

きょうりよく？

ナルシーの話に、真雪は腕組みして呟いた。

「……じゃ、やっぱそっちの線で潰すのは無理か——ん？けど明、恨みの対象が陰陽寮の人間だと推測してるって事は、やっぱお前も陰陽師の仕業だったのは気づいてるのか？」

「気づいてたというか……あの精霊獣自体がまさか陰陽師だとは思わなかったけど、その背後にいる人間が陰陽師なのは間違いないと思ってたよ。あくまで、根拠としては消去法だけどね。第一に、私に関する人間は、陰陽寮以外に存在しない。第二に、あの精霊獣は陰陽寮の内情を知りすぎている。じゃなきゃ、いくら不意を突かれてるとはいえ、仮にも国家の精鋭たる陰陽寮の陰陽師達が、こんなにも簡単にやられるとは思えない」

「そうか……」

しかし、相手の姿が見えない事には変わらない。

正直、敵の正体が不明というのはそれだけでやりづらい。警戒すべき対象が不確定であるという状況は、それだけで容易に神経を磨り減らす。

とはいえ、明に心当りが無いのも本当だろう。少女の性格を考えるに、少しでも怪しいと思える奴がいたら、間違いなくその場で仕留めてる。その場合、知己であろうと見ず知らずの他人であろうと、相手を倒す事に一切の躊躇もしないだろう。

つまり、現在の段階では敵については『本当に』お手上げで——それなりに切羽詰っている状況なのだ。

そうでなければさすがに、いくら対象として都合がよいとはいえ、ほぼ初対面に近い自分すらを巻き込もうとは思えないだろう。

「……っ」か、気になってたんだけど。お前、家族とか大丈夫なの？お前と親しい人間っていうなら真っ先に目標になりそうなものだけど。そして手伝ってくれる奴とか俺以外にいなえのか？例えば父

ちゃんとか」

「家族の心配はしなくていい」

明は必要以上にきつぱりと断言した。

「いつぞやも言ったかもしれないが——元より私は天涯孤独の身だ。身内は父上しかいないし、その父上も今は京にはいない。帝の命で東の地へ塵の鎮禍に向かつておられし、第一、父上は曲りなりにもこの陰陽寮の長を務められる方。あの程度の下賤な獣など、出会った瞬間に五体を裂いて一瞬で仕留めて終わり、だ」

「なんかすげえ親父だな」

父親の事を語る時の彼女は、はきはきと頬を紅潮させいかにも嬉しげな様子だった。

まるで、何か大事な宝物を自慢するような。

心底、大切な物を誇るような。

思わずこちらが毒気を抜かれてしまうくらい、それは純粋な父への思慕に満ちていた。

女系の黒野家では、父親の威厳などお目にかかった事はない。偉いのも強いのも基本は女達だ。それ故にか、父親を自慢する彼女の様子は如何にも新鮮で、真雪の目には初々しく映った。

「それに、他人の助力を期待するというのもこの場合は無駄だな。言っただろう。今回の塵災害では、私と関りを持った者だけが狙われている。そんな状況で、私を手伝おうとする奇特な馬鹿などいまし以外にはいないよ」

「遠野なら？あいつとなら共同戦線張れるんじゃないか？」

つか、今どさくさに紛れてさりげなく馬鹿つつたかこのガキ？
例の妖女の名前を出すと、案の定、明ははっきりと嫌そうな顔を浮かべて断言した。

「あいつは嫌いだから組みたくない」

ストレートな理由だ。

「いや、あのな……」

「大体、あいつは年寄りだしいつも動かないしどうせいたって役に

も立たんだろう。今までだって何も出来なかった奴が、これから急に役立つと思うか？」

もっともらしく理屈をこねるが、残念ながいまいちへ理屈感是否めない。

ていうかこいつ、本当に好き嫌いがはっきりしてるよなあ……

子供だからまだいいとして、これから大人になっていくのに、この先こんな状態で、人間関係とか大丈夫なんだろうか。

他人事ながら、如何にも不安になる話だった。

「そもそも、いましは遠野から逃げてきたから私の元にいるんだろう。これであいつの助力を求めたりしたら、また座敷牢戻りだぞ」

「……それは勘弁だな」

真雪は素直にそう言って、その提案を取り下げた。

それにしても——と、思う。

それにしても、相手の正体が見えないというのは厄介だ。真雪は声に出さず、胸中で密かに独りごちた。

明自身に、相手の心当たりがない事を疑うわけではない。寧ろ、当の本人にすら意識されない相手だというのが、この場合は問題なのだ。

現代の例を取るまでもないが、ストーカーなどは大抵、本人とはまったく関係のない人物——それこそ、本人にとっては『他人』として位置づけられてしまうような、接点の低い人物のケースが圧倒的に多いと聞く。

だからこそ、情報も少なく周囲からもターゲットとして浮かび難い。

少女自身には一切の危害を加えず。

ただ自分の安全だけは計り。

彼女と親しくした者だけを狙い、順に殺していく。

その手段と方法から、感じるもの。

吐き気がするほどにどろどろとした、非常に人間的な非情に非人間的な執着心。

その思考を辿ろうとするだけで、気持ち悪い、と素直に思う。

「……で。協力者はいない方向で進めるとして、具体的な計画は何かあるのか？つーかお前の計画でいくと結局のところ、俺は一体何をすればいいんだ？」

「んー、特に何も」

明はあつさりと首をふった。

「こちらの警戒するさなかをすり抜けて、陰陽師達は次々にやられていった——無駄のない見事な手際だ。それだけの技量の持ち主相手に、下手な警戒も策も無意味だろう。どうやってるのはかは知らないが、相手はこつちの動きを掴めるようだし、いましが独りで適当にうるついていれば、探すまでもなくあつちが勝手に来てくれるさ」

「そんなもんか」

それなりに切迫した状況のわりには存外、適当な答えだった。

ま、中学生の思考能力じゃこんなもんか。

所詮、お子様だしな。

この場合、対ストーカー捕縛用のノウハウを求める方が酷というものだろう。

「ていうかそもそも、相手の居場所が分かるようなら、こんな回りでい事をせず、私自らが乗りこんでる」

「そりゃそーだ」

まったく反論の余地もないセリフに、頷く。

「……だったらなおさら、俺は何の為にここにいるんだ？」

彼女の言を聞くに、別に戦力として期待されているわけではないらしい。それはそれでム力つくが、明の実力を垣間見た以上、不満を言ったところで負け犬の遠吠えにしかかならなさそうなので、真雪は黙り込んだ。

「そうだな……とりあえず、いましが狙われてるのは確かだから、外を出歩いてくれ。なるべくあの精霊獣に襲われやすいように、人気のない、何かあっても誰も助けに来てくれなさそうな、間違っても他人に迷惑のかからない、それでいていましが殺されやすい感

じの危険な場所を選んだ。まあ、心配するなよ。いましが襲われる時に丁度ヒマで、距離的に間に合えば私が助けに行ってやるから」

「思いつきやる気の殺がれる枕だな……」

「

つまりは。自分でどうにかしろと。

至極当然のように言い張る明に、真雪は他にどうしようもなく、うんざりと呻いた。

自殺志願

で。

「なーんでお前のその自殺行為に俺まで付き合わされてんだよ!？」

「うつせーな。耳の近くできゃんきゃん騒ぐな。鼓膜が破れんだろ。あと、自殺行為とか言っつな」

「だったらなんで俺がお前の自殺に付き合わなきゃいけないんだよ」
言い直してより酷くなっていた。

自殺って……そのままじゃん。

相手との歩幅が違うせいか、並んで歩いていてもうつかりするとすぐに、連れとの距離が開いてしまう。

真雪は、相手を引き離さないよう速度を微妙に調整しながら、後ろからついてくる少年を振り返った。

「いいじゃねえかよ。だいたいお前、伊々美から仕事免除されて暇なんだろ? だったら、その時間に俺の手伝いしてもいいじゃねえか」

「別に暇じゃねーよ、お前がいなくなっただから、御勤めもいつも通りに戻ったよ。何の仕事もせず、暇してんのはお前だけだ。年下の女の子を働かせて、その報酬で生活費を賄って貰ってる真雪みたいな奴と一緒にすんな」

「……酷い事言っつなー、お前」

心の中に PTSD なりかねない深刻なダメージを受けた。

そんな事言っつ俺が傷ついたらどうすんだと、年長者らしく説教の一つでもかましてやろうかとも思ったが、相手がさして気にするとも思えなかった。止めておいた。何も自らの手で傷口に塩を塗る必要はない。真雪はそれ以上の会話を避けて、話題転換を図った。

「ていうかお前、なんでそんな事まで知ってるんだ? 俺、陰陽寮の人間には誰にも連絡を取ってねえぞ?」

「なんでも何も……」

那由多は、こちらの呑気な疑念を嘲笑うかのように、ひょいと肩を竦めてみせた。三日ぶりに会ったというのに、少年の様子にはまるで変わったところはない。いつも通りにぎやかで、ガキくさく、きゃんきゃんと喧しい。男子三日会わずれば刮目して見よ、とかいうあの格言は嘘らしい。明とは違いこちらは年相応の威厳を持つて――つまり何の迫力もない様子で――態度だけは無駄に偉そうに続ける。

「お前がいなくなった翌日に、明媛が遠野様に直談判しに行ったんだよ。陰陽寮内では安全性が疑われるため、七星として拘束中の真雪の身柄を自分が預かるってな」

「へえ」

あの時、帰宅直後に即効で出かけたと思ったら、そんな事してたのかあいつ。

個人的には、寮を破壊した張本人の癖に翌日顔を出すなんて、度胸あるなあとか思ってたが。

「何せ、呼び出しも受けずに、明媛が遠野様の元を訪れるなんて滅多にないしさー。ひよつとして殴りこみなんじゃないかって、あの時は結構、寮全体がひやひやしたもんだよ」

それはそれは、だ。

「出来れば可能な限り遭遇したくない場面だな、それ」

兩人共に、さして深い付き合いでもないが、それでも明の態度からして、あの二人が犬猿の仲である事は疑いようがない――というよりもむしろ、明が一方的に遠野を毛嫌いしているフシがあった。

遠野はああ見えて、見た目以上に（確実に）歳を食っていそうなので、あまり心配は要らないだろうが、明は外見に反し、必要以上に好戦的な性格をしているので、嫌いな人間を目の前にしたら、本気でいつ喧嘩を吹っかけるか分からない。

野放しにするにはかなりの危険人物だ。

なまじ、実力があるから始末に悪い。

…… 本当に、なんであんな物騒なのが自由に生活を送っているの
だろう？

誰か取り締まれよ。

「まあ結局、話し合い自体は何もなく、本当にただの話し合いだけで終わったんだけど。寮は今でもその話で持ちきりだからさ、真雪の居場所なんて、今の陰陽師は誰でも知ってるよ」

「なるほど」

つまり——そういうことか。

あの小娘はそうして——誰にとっても派手なパフォーマンスを取ることによって『ごく自然に』自分の居場所を周囲に伝えたのか。

周囲というより、彼女の伝えたい相手は一人だけなのだろうけど。精霊獣の狙う標的である黒野真雪が、陰陽師七星・明の庇護下にある事を世間に知らしめるため、彼女は遠野の元を訪れた。

「——で、座敷牢に監禁されてた所を謎の襲撃者に突然襲われ、偶然通りがかった明様に助けられて泣く泣く命乞いをして、お屋敷に匿って頂ける事になった筈のお前が、またどうしてこんなところをうろついてるんだ？ 自前から願い出て鎖に縛られてるんじゃないかったのか？」

「……世間ではそういう設定になつてんのか？」

なんでそんな無駄な嘘をついてるんだ、あいつ。

人の風評を貶めて、あの赤娘になんぞ特でもあるんだろうか？

「その明様からの指示でな。今回起こってる塵災害の犯人を突き止める為に、俺が囷になつて街をうろつけてよ」

「塵災害？…… って例の、うちの陰陽師が連続で被害にあつてるっていうアレか？ なんでいきなりそんな話が出てくるんだ？」

予想もしていなかったのか、きよんとした顔を浮かべ、那由多が怪訝そうに聞いてくる。明の行った無駄な情報操作のせいで、正しい状況を認識出来ていないらしい。真雪は掻い摘んで、真実を説明してやった。

「…… なるほどなるほど。そんな事になつてたのか。お前も大変だ

「つたんだな」

一通り話を聞いた那由多は、何やら難しげに腕組みなどしながら、しみじみと呟いた。

「時に真雪。事情は分かったが、それでどうして俺がお前に付き合わされてんだ？」

「しゃーねえだろ。俺、この辺の地の利とかさっぱ分かんねえし。それなりに、地元に詳しい奴がいないと、せつかくの圈作戦がただの迷子になりかねん」

「なるほど」

一応、こちらの言い分に納得する所があつたらしく、もつともらしい顔で頷いたりしている。

匿われたその後、明に言われ一旦は素直に街中をうろついてはみたものの、結果は予想通りに芳しくはなく、何の成果も上がらなかった。また加えて、情報が乏しいという点も否めない。京の都は碁盤目状に造られているため、慣れない者にも比較的歩きやすい構造にはなっているらしいが、地元民でもないのに地図もなく当てずっぽうに歩けと言われても限度がある。そんなわけで、探索を始めて早三日目にして、真雪は現状の数少ない知人であり（恐らくは）地元民っぽい那由多を助っ人として借り出す事にしたのだ。

「まあ、そういう話なら協力すんのにやぶさかじゃなけどさ——具体的に真雪は今、どの辺りを目指して歩いてんの？」

「さあ？」

「さあつて……」

「つーか、土台無理な話なんだよな。こんな風に適当にうろついてるだけで、標的を誘き出そうだなんて。こういう人海戦術的なローラー作戦ってのは、まずそれなりの人数がいて初めて成り立つものであつて……」

「ローラーってなに？」

「お前の知らねえもんだよ」

というっかり口にしてしまった横文字については、説明するもの

面倒だったので、適当に誤魔化す。こうして口にしてみると、改めて現代日本語の中に含まれる外来語の多さに驚かされる。

一方、そんなこちらの態度が気に障ったらしい。那由多がぶりぷりと怒りの表情を浮かべる。

「だからって目的もなく歩いてたんじゃ、ただの散歩と変わらないだろ。なんか目当てとかないのかよ？」

「って言われてもなあ……幽霊の正体見たり枯れ尾花じゃないけど、目的が分かっているように正体不明の奴を追いかけてる事には変わらねえし、適当に人気のない場所うついて、うまく相手が出てきてくれる事を祈るしかないだろ」

「杜撰だなあ……」

「文句があるなら明に言ってくれ。そもそもあいつの提案だ、これは」 うんざりと頭を抱える那由多の意見には、彼自身よほど同意とところだったが。誘った立場上、それも出来ずこの場にいない少女に責任転嫁する。案の定、どうやら明に対して畏怖に近い感情を抱いているらしき彼は「俺が明様に文句なんか言えるか」と小さく愚痴を零した。

感心

「まあ、そこまで完全に闇雲ってわけじゃねえよ。一応こつちも、奴と死合った事があるし身だし相手の波長ぐらいは覚えてる。それを探しながら歩いてるつもりだけど……今んとこ、それほどはつきりした手ごたえを感じないんで、なるべく塵の濃度が高そうな場所を回ってるつもりだけだな」

「なんだ。それを早く言えよ」

当てずっぽうというのがよほど不安だったらしく、一応の手がかりを教えただけで、少年は途端に安堵の表情を浮かべた。反応が素直すぎる。

「あんま期待はすんなよ。俺、探查系は得意じゃねえんだ」

塵を視認出来る異端児には、塵濃度の濃い場所——それを知覚する術を持たない普通人などには、パワースポットなどと呼ばれているが——をある程度なら感知する事が出来る。それを差し引いても、異端児の五感はある普通人のそれと比べて遥かに鋭い。更にその感覚機能を塵で強化すれば、普通人のスペックを遥かに凌駕する。

ましてや、真雪はその対象者と一度接触している。地道に探せば確かに、標的を発見出来る確立は少なくないように思えた。が、しかし――

系統別の能力差を差し引いても、真雪は元来、探查など『周囲の気配を探る』行為が徹底的に苦手だった。無論、塵による五感強化はとっくに行っているが。彼がはつきりと自覚的に把握出来る警戒範囲は、せいぜいが半径5M以内である。それは単純な能力不足などではなく、その距離内であれば、いかなる事態にも対応出来るという自負の証明でもあった。

もしもここに姉の白雪がいれば、百年後の未来でも地球の裏側でも、確実に見抜いてみせるのだろうが。

が、こちらの思惑を余所に、那由多はあっけらんとした口調で

「塵の濃い場所を探るだけでいいなら、俺にだって出来るよ。あと並列の検索条件として、人気の少ない場所つてのを付け加えればいいんだろ。だったらいくつかに絞れるかなー」

その言葉に、思わず真雪も呆氣に取られる。

「へ？何お前、ひよつとして探查系得意なのか？」

「知ってて俺を誘ったんじゃないの？」

「いや、最初に言っただじゃん。遭難防止と、単にこんなかったるい作業を一人でやるのがムカついたから。その退屈しのぎ」

「なんかすっげー帰りたくなってきた……」

言葉通り、明らかにやる気を失った様子で、那由多が懷から札を取り出す。高品質の和紙には、千年後の未来から訪れた真雪には読む事も出来ない、古い呪いがびっしりと書かれていた。

うわ、同じ日本語なのに本当に読めない。

時の流れていゝるんな意味でデカイのな。

那由多は慣れた仕草で取り出した札を扇のように広げると、残る片手で器用に印を切りながら朗々とした声で唱え始めた。

「伏して願ひ奉る。我が常にも仕え祭る四方を統べし御方へ。我が言により、此のものの行先を示す導とならしめ給へとかしこみかしこみ申し上げる……」

（音声認識か……また、えっらいレトロな）

紡がれる声と共に、那由多の指先から塵が展開していくのが見て取れた。

初めて見る——わけではないが、現代ではもはや滅多にお目にかかることのない、いにしえの技に、真雪は密かな感動を覚えた。

塵を扱うのには何も、過去の呪い師や魔女によろしく、仰々しい呪文や身振りを唱える必要はない。というか実際には、発動に声さえ必要としない。極端な話、寝ていようと身体を拘束されていようと、自我が残っている限り神威能力者は永遠に神威能力者である。使用者に意識があり、それを望めば塵はいつでも遅滞なく発動される。塵は神威能力者のみが持つ特有の変異細胞によってのみ、顕現

が可能となっており、つまりは素養さえあれば誰にでも使える。そこに方法論は必要ない。

早い話。

今、目の前で那由多が唱えている仰々しい呪文もときや札なども塵の使用においてはあまり意味のないものなのだ。無論、集中力を高めるなど所謂自己暗示的な効果はあるだろうが、それ以上の意味はない。

現代でこそ、徐々に解明されつつある神威能力ではあるが、この時代には当然、体系だった理論や技術論など存在しない。だが異端児が異能者として扱われ、神威能力が何たるかを解明されていない時代においては、こういった意味のないパフォーマンスこそが塵の発動に不可欠であると信じられていた。

事実、那由多が詠唱すると響きにそって、塵の構成が練り上げられていくのが見て取れる。現代ではもはや、この手の無意味な演出は削除される傾向にあるが、それでもこうして改めて見ると、なるほどその効果は伺えた。

（確かに、状況効果としちや結構なもんかもな。詠唱時間のロスがあるけど、視覚・聴覚面から相手に与える影響はデカい）

実際の戦闘においてはまったくハンデにしかないが、儀礼的な場においては見栄えもするだろう。だからこそ、廃れたとはいえないこういった技は未だ健在なのだが。

加えて、詠唱式と札などの媒介に起動式の基礎を練りこみ、万人に同様の術が使えるようにしてあるのが面白い。これなら確かに那由多のような工夫の足りない者であっても、ある程度までなら塵を使うことが出来るだろう。

声だけは滑らかに詠唱と終えた那由多は、それと同時に塵を完成させた。多少ぎこちなくはあるが、癖もなく基本にそった丁寧な構成。掲げた札から光の粉が湧き上がり、さらさらと崩れ去る。音もなく弾けた燐光と共に、光の欠片が収束し一定の方向を指し示す。

「うし、出来たぞ！後はこの導にそって進めば、とりあえず塵の濃

厚な場所が分かるから……って、何やってんだ真雪？」

「いや、先人の知恵と技術に感動してた」

起動までの一連をまじまじと見つめ。

腕組みなどしながら呑気に見物していた真雪に、少年が呆れの声をかける。

「阿呆な事言っでないで、とつとと行くぞ。俺はお前と違って忙しいんだから」

那由多は自分よりも遥かに身長の高い真雪の首根っこを（凄い頑張って）無理やり掴むと、ずるずると引きずりながら歩き出した。

なかよし？

「……見つからねえもんだなー、やっぱり」

「こつちを見ながら仕方なさそうに溜息ついて言うなよ！！　なんだが俺が失敗したみたいないな空気になってるだろうが！！」

「おいおい、那由多。それは被害妄想だろ。俺はそんな事、ひとつことも言ってないぜ」

「言ってるよ！口に出して言っなくても顔と態度が全霊で俺の責任を追及してる！」

「根拠ない言いがかりはよしてくれ。――ま、あれだな。仮にお前がそんな罪悪感を抱いてるんだとしたら、原因は俺じゃなく、お前自身の中に『自分が無能なばかりに、真雪様のお役に立てなくて申し訳ない』という真摯な思いがあるからだ。気にすんな」

「ねえよ。そんな勘違いな思いは欠片もねえよ。ていうか、何で善意で手伝ってやってる俺が、いつの間にか責められる立場になるんだ？」

「急いては事を仕損じる」

「意味分からんし」

那由多はぶつぶつと毒づきながら、大仰な――けど、本人にとってはそうでない――歎息をしみじみと吐いた。

那由多の案内に従って、京の街をうろついてみたものの、精霊獣の正体を掴むための手がかりらしきものは、全くと言っていいほどなかった。元より、真雪としてはさほどの散策に期待していたわけでもないで、それはそれで別にどうでもいいことだが。寧ろ、後世にも名高い平安時代の京都をリアルに見物出来た事の方が、彼にとっては遥かに価値があった。ありがとう。

と、改めてこの眼前の少年に礼を言いたいくらいである。

一方で、そんなこちらの胸中など知る由もない那由多としては、この結果に些か不満らしい。口をへの字に曲げて、不機嫌そうな面持ちで中を睨んでいる。

別に成果が出ないのはお前のせいじゃないし、那由多の神威自体が使えるなかったわけじゃないし（めばしい場所には行ったものの、単に何も見つからなかったただけだ）そもそも基本的な問題として、これだけ人死にの被害が横行している中で、少年探偵もどきが多少捜査の真似事をしたところで、都合よく見つかるわけないし。つまるところ、俺的には最初から期待してたわけでもないんで、気にすんなよ、と言つてやろうと思ったが、口に出したら確実に激怒されそうなのでやめておいた。

いい奴だなあ、こいつ。他人に無理やり付き合わされてる時も、いちいち全力だし。

若いのがバカいだけなのは知らんけど。

「――と、そうだな由多。もしこの先、運よく精霊獣を見つけれられたとしても、お前は絶対に戦闘には加わるなよ。そうになったら、とりあえず逃げる全力で」

「は？何それ？」

ふと思いついて告げた言葉に、案の定那由多は首をかしげた。

「俺は囹役なんだから、いざ遭遇した時にそのままやられたりしちゃ意味ねーだろ。だから、俺が狙われてる間に、陰陽寮に援軍を呼びにいく役が必要なんだよ」

那由多を呼んだのは、道案内よりもむしろその役を任せたかったという腹積もりもある。もとより、この気のいい少年を荒事に巻き込む気などない。

「はぁん……まあ、頼まれてやつてもいいけどさ。そうなくても、救援が来るまで真雪が呆気なくやられちゃったら、それはそれで意味ないじゃん」

「いやあ……多分、大丈夫だろ」

「およ？随分余裕な発言じゃん」

鷹揚に頷いてみせるこちらに、那由多が意外そうに目を見張る。とはいえ、別段見栄を張っているつもりもない。あくまでそれは、実際に精霊獣と対面した者としての率直な感想だった。

始めに目にしたのが明だったため、些か気づくのが遅れたが、先ほどの那由多を見てはつきりと確信した。この時代の塵には無駄が多い。

起動から発動までのタイムラグが、現代の比べてとにかくでかいのだ。だからこそ前回、塵を本格的に使用していない状態であつても、あの精霊獣にはそこそこ対抗出来た。

その弱点をうまく利用すれば、勝つのはともかく、時間稼ぎぐらいは容易に出来るだろう、というのが真雪の打算である。

せかせかと早足で並んで歩く那由多が（真雪は心持ち速度を落とした）ふと、思いついたように尋ねてくる。

「ところで真雪ってさあ、なんでそんなに明媛と仲いいの？」

「はあ？ なんだそりゃ」

真雪は思わず怪訝そうに顔を顰めたが。彼は当然のように続けた。

「だってそーじゃん。明様がお前に固執する理由は分かるけどさ。

精霊獣をおびき出すのに、有効な餌はお前しかないわけだし。でも、真雪がそれに付き合つて、こんな事する必要は全く皆無だろ？」

「別に皆無つてわけでもねえよ。少なくともこうして協力してる間の生活費やらはあいつ持ちだし」

「そんなの、陰陽寮にいたところで一緒じゃん。否、むしろその方がいいとさえ言えるかもしれないぜ。だって一応衆人の目があるし。そりゃ、環境条件は多少落ちるかもしれないけど、それだって命には代えられないだろ？」

「どっちもどっちな事には変わりねえけどなあ……」

ついでに、その衆人の目とやらもあまり当てにならない。

なにせ真雪は前回、まさにその場所において精霊獣に襲われたのだから。

「正直なところ、お前の中で遠野様と明様の違いってのがよく分らない。立場的にはお二人とも、真雪を利用しようとしてるのに、お前は一方だけに味方してるじゃん」

「……で、『仲がいい』か。単純だね、お前も」

ガキみたいなのというより、まるきり中学生あたりの子供の発想だ。まあ、子供だし仕方ないんだけど。

真雪が思わず苦笑を浮かべると、那由多は不満そうに口を尖らせた。

「違うのか？でも明様とこんな風に気兼ね那なく付き合える奴ってそうそういないんだぜ？お前の事を好いていらっしゃるのは間違いないよ」

「いや、それは真剣にどーだかな……」

「えー、間違いねえよ。だって、明様がここまで親身に面倒みてるなんて、初めての事だもん。絶対お前の事気に入ってる証拠だって」
初めての事といっても、それはあくまで必然性に駆られたからの事であって、別段そこに好意が付随するわけではない。

だが、あえてそんな事を口に出す必要はない。真雪はただ黙って肩をすくめてみせた。

いわかん

「随分と明様、明様って騒ぐなお前も。てつきりお前は、あいつが苦手なんだと思ってたけど」

言われて那由多が、心持ち口を曲げて黙り込む。が、特に急な話題転換に怒ったというわけでもなく、その仕草は単に次に吐く言葉を選んでいるだけに見えた。続ける。

「……別に、苦手ってわけじゃねーよ。なんか、恐れ多すぎて近づきがたいってだけで。明様については、陰陽寮の中でも賛否両論いろいろあるのは知ってる？そりゃ、年長者の中には身分がどーとかいう方々が多いのは確かだけど……俺らみたいな平民出の若手からすれば、明様は憧れの存在なんだ！」

「そーなのか？」

「そりゃそうさ！いくら陰陽師が実力主義つつたつて、裏を覗けばその実態は、身分や血筋に縛られた、完全な権力社会だし。その中で、血筋や家柄の確たる証もなく、掛け値なしに実力主義で七星の地位にまで上り詰めた明様は、俺達みたいな立場からすれば英雄だよ！たとえ、父君の助力があつたんだとしても、彼女の存在がずば抜けてるのは変わりない」

「へえ……」

子犬のようにくりくりとした瞳を、興奮気味にきらきらと煌めかせ、頬を僅かに紅潮させて熱心に語る那由多の様子は、なるほど確かに彼女に対する熱意が見て取れた。はつきりと分かりやすく。誤解のしようがないほどに、確かにこの少年はあの小娘に焦がれているようだった。

意外な思いもする反面、確かにあの美貌とカリスマ性を思えば、こういうファンがついても不思議ではない。

少女の立場から推測するにさしずめ、アウトローの英雄的な魅力があるのだろう。少なくともAKB48よりは美人だしな。

「そついや、伊々美も明に対して結構気を使つてたしな。そんな嫌われてるわけでもないんだな、あいつも」

孤立無援、てわけでもなさそうだ。別に、俺が心配するまでもなく。

が、それを聞いた那由多は難しげに腕を組み、いささか気まずそうに首を傾げた。

「うーん、どうだかな。伊々美様はそのへんの馬鹿どもとは違うから、そうあからさまな差別や批判はしないけど。ご実家が貴族の出ではあるし。立場的には中立に近い感じかなあ。明様の支持者はあくまで平民に多いから」

「あ、そうなのか？」

ちよつと意外な答えだった。

そついうの、差別しそうなタイプには見えないのに。

その後も根気よく探索を続けたが、結果としては芳しくなかった

——否、はつきり言つてなんの成果も出なかった。

共に幼くまだ未熟な部分もあるとはいえ、真雪も那由多も同様に異端児——陰陽師である。基礎体力たるや、普通人の比ではない。

故にこの日の探索も朝から晩まで——比喻抜きに——京の都を隅々に到るまで探し続け、途中に休みを挟みながら一日中を費やしたものの、結局は何の手掛りを得る事も出来ず、そんな彼らが漸く足を止めたのはもう日が沈み、辺りが暗ずんでからの事だった。

「つつかれたー」

さすがに疲労したのだろう。近くの茶屋に入つた途端、那由多がさつそく根を上げた。出されたお茶を煽るようにして、ずるずると力なく座り込む。

「……お疲れさん」

こちらにも声に多少の疲労を滲ませた真雪が、そんな那由多の様子を見て労う。同じ距離を歩いた事には変わらないが、彼と那由多ではそもそも、基礎体力と体格が違う。それを思えば、この強行軍についてきた那由多の苦労も、押して知るべしと言つた所だった。

まあ、半分以上は負けん気と意地だったみたいだけど。

「ありがとうな、協力して貰って。も、いーから。ここで少し休んだら、お前はもう帰れよ」

「えー、でもー、まだ何も見つかってないしー」

ぐったりと力なく机にうつ伏せていた那由多が、ゾンビのような動きでのろのろと顔をあげ呻く。その声にすら力がない。

「いいよ、もう充分だ。もともと、一日やそこらでそんな簡単に見つかるとは思ってなかったしな。また気長に探すさ。お前だって、いい加減そろそろ戻らねえと門限とかあるんだろ？」

「そりゃあるけど……」

「だったらもう帰れよ。かなりへばってるみたいだから、暫くここで休んでた方がいいだろうけど。回復したらテキトーな所で帰れ。金、先に支払っておくから」

自分がいると帰って気遣って無理をしかねない。こんな疲労満載な子供を放置するのもどうしたもんかと一瞬迷ったが、自分が傍にいた方がかえって無理をするだろうと思い、早々に引き上げる。勘定の数え方が分からなかったので、言われた分より多めに払っておいた。勿論、明に貰った金だ。

年下の女の子から生活費のみならず小遣いまで支給されている……

改めて自覚した事実にしみじみとへこんだりもしたが、気を取り直して自分も帰る事にする。とはいえ、行き先は自宅ではないが。

（しっかしまあ、一日中歩き回って手掛り皆無かよ。先はなげーなオイ）

愚痴というほどでもないが、胸中で呟く。無論、那由多にも言った通り、そんな簡単に成果が出るとはまさか思っていなかったが。問題なのは、成果がなかった事ではない。果たして本当に成果が出るか否かも分からない事を、それでも信じて続けるしかないという現実がある事だ。

（……先に心が折れそうな状況だよな）

こうなったらもう、いつその際多少の危険には目を瞑るので、

さつさと襲い掛かってきてほしいとさえ思う。

(……とはいえ、実際はこんな事やってる場合じゃないんだけどな)

実際のところ、本音を言ってしまうえば彼にとって精霊獣などは至極どうでもいい。確かに多少は命の危険に関するため、こうして明にも協力の姿勢を取ってはいるが……それよりも遥かに、優先して取り組まなければならない事が、彼にはある。

(ようするに、これもただの現実逃避みたいなもんだよな)

解決しなければならぬ問題が目の前にあったとしても、その糸口さえ見つからない。故に代償として、もっと分かりやすいゴールの定まっている問題に取りすぎり、目を逸らそうとしている。

背を向けたところで、何かが変わるわけでもないのに。

と、そこで。

「……………あれ？」

予定より長い時間をかけ(まだあまり環境に慣れていないため、建物の区別をつけづらて軽く迷ってた)仮宿ともいうべき宿舎にようやく辿り着いた真雪は、何か言いようなない違和感を感じ、宿に入る前にその足を止めた。

「なんだ……なんか――？」

具体的に、何か視覚に訴えるものがあるというわけではない。

もとより既に夜が近づき、闇に染まろうとしている光景の中では(迷子になった理由の一端だ)建物の外観などさほど明確に分かるう筈もない。それでも彼の足を止めたのは、そういった理性の声すらもを上回る、本能からの声を信じたからだ。

あるいは、より動物的な直感ともいうべきか。

人が文明を得ると共に、失われていった第六勘からの声に従い、慎重に歩みよる。だが外から見る限り、違和感以上におかしなところはない。首を傾げ、疑問を胸に残しながらも、本能からの警告を無視して中に入ろうとしたその刹那――

(あれ……？この建物ってこんなに大きかったっけ？)

気づくのと。

肌が粟立つような怖気を感じ、咄嗟にその場を飛び退くのと。

その真雪の足首を狙い、宿の壁から剥離した蔦が鞭のように撓りながら、一瞬前まで彼のいた空間を穿つのは、全てまったく同時に起こった。

わな

「んな……っ!？」

疑問の声を上げてみても、応えはどこからも返ってこない。

驚愕に混乱しながらも、身体だけは冷静に次々と襲い掛かってくる薫を避け続ける。

「……くっ!!」

知覚を拒否するかのような素早さで迫る薫は、どんどんその本数を増やしながらも、的確にこちらを狙ってくる。

避け続けるには数が多すぎる。

真雪は瞬時に判断すると、迫りくる薫を塵で一気に焼き払った。

業火に炙られた植物は、一瞬で水分を失い空气中に散布する。

「なんだってんだ、一体……」

理解するのは簡単だ。つまり、見たままの光景を信じるならばの話だが。

那由多と別れ、宿に戻ってきたところで、その宿に襲われた。正確には、宿から伸びてきた謎の薫に。

俺もついに人類以外からも襲われるようになってしまったのか、などと無駄に場違いな事を考えつつも、遠巻きにじっと建物を観察してみる。あまり不必要に近づく気にはなれなかった。——どこまで離れれば安全圏なのかは、知れたものではないが。

自慢の視力で遠距離から確認し直したところで、やはり建物自体は出掛ける前となんら変わった様子は見られなかった。

「場所も間違ってないし……間違いないここだよな」
いや。

建物自体が、出かけに見た時より一回り大きくなっているか？
間違いない。

普通にしていればあるいは見逃してしまっていたかもしれない、軽い錯覚じみた差異だったが、それでも一度気づいてしまえば見間

違えようがなかった。

元のサイズから考えて数センチほど、ほんのその程度に過ぎないが間違いなく、厚みが増している。特に変化が顕著なのは入り口部分だった。新しい壁に覆われて、元の建物の引き戸が必要以上に窪んでいる。更に目を凝らしてよく見てみれば、壁だと思っただのは実際には壁ではなく、極細の蔦が絡み合っただけのように偽造されたものだった。

「擬態……？」

なんとなく、そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

つまり――

（誰か神威能力者が……この近くにいるって事が！？）

考える事が出来たのはそこまでだった。

離れた分の間合いを見切られたのか、蔦が再び伸びてくる。確実に急所を狙ってくるそれを、触れる直前に焼き払い真雪は宿――否、蔦の集合体を睨みつけた。その程度の火力では脅威にすらならないのか、蔦は平然ととその形を保っている。総量から見ると、このままだまちなみ削り続けてもらわねえ空かないのは明らかだ。

術者がこの現状をどこかで見ているのか、それとも遠隔操作なのか――この場での判断はつかないが、どちらにしろやるべき事といえは一つしかない。

（出し渋ってる場合じゃねえか）

唯一の懸念は建物の中に、まだ誰かが生存していた場合だが。空間熱量を把握する限り、その心配もなさそうだが。少なくともこの建物の中に、人間大の熱量を持つ物体はいない。

強く拳を握り締め、一気呵成に練り上げる。

身体の内を廻り、且つまた全身を包み込むような圧倒的な支配感。大気から取り込まれた塵が彼の望む通りに姿を変えながら、手のひらの一点に集中していく。

羅炎。

解き放たれた高熱が、建物に直撃し轟音と熱気を撒き散らす。自

自然界にあるまじき異端の炎は、こんな街中つであろつと決して延焼などは起こさず、ただ彼の定めに従つて目標だけを焼き尽くす——
筈だった。

「——！？」

着弾と同時に、信じられない速度で成長・増殖した蔦が、視界を覆うほどに広がり、飛来する炎を真つ向から受け止める。そのまま、炎を押し包むように蔦の数を増やしてゆき——増殖が止まった後には、何も変わらない建物の姿があつた。

（一式じゃ……焼ききれない？）

信じがたい事ではあつたが。予想外の展開に胸中で毒づく。とはいえ、呆然としているヒマはない。

炎を消し去つた蔦は焼け焦げた後を修復しながら、再びゆっくりとこちらへと伸び始めた。ある程度まで傷ついた場合は、自動で修復するよう式を組まれているのかもしれない。が。

（羅炎を防ぐほどの防御力を持つてゐるっつーなら、要はそれ以上の火力で焼ききれればいいだけの話だろ！）

まるで踊るようなステップで迫り来る蔦を巧みに避けながら、思考を切り替え次の塵を編みだす。そして。

刹那のうちに生み出された白熱が、物理的な圧力さえ伴いながらかざした手の中に膨れ上がる。真雪の身体が、一瞬何かに押されたように後ろにさがつた。

空を白ませるほどの火炎の渦が。

彼の手のひらから解き放たれ、ひと時の自由を謳歌するように、大気を熱で支配してゆく。空間を焼き払いながら、音もなく伸びる光の帯は真つ直ぐに目標を貫き、視界を光で塗り潰す。美しくすらある爆発が、先ほどとは比較にならない威力で持つて、今度こそ建物を根こそぎ吹き飛ばした。

無獄

「……ふうつ」
神威参式、無獄しんいきしき むいく

一式と比べ基本的な術式構造には大差ないが、練り上げる塵の総量・放出される熱量が圧倒的に違う。普通、焚き火などで得られる火力は凡そ七百度〜八百度といったところだが、彼の生む神威の炎は優に千度を超える。通常であれば、まず間違いなくこんな街中では使用出来ない。

「月日にバレたら確実に殺されるよな……」

バレル以前に、ここで使わなきゃそれだけで人生の終幕になっていた可能性が高いのだが。そんな言い訳を許す祖母ではない。無獄の炎は人体はおろか鋼鉄でさえも蒸発させる。その事実を示すかのように、熱気の余韻が冷めやらぬ周囲には、瞬時に生み出された超高熱との温度差によって、陽炎のような揺らぎが来ていた。

「さて」

炭化どころか原型さえも残っていない、宿だった建物はすっかり焼き尽くされ、脅威どころか完全に原型を無くし、廃墟のように佇んでいた。宿の表面を覆っていた謎の蔦も、灰も残さず焼却してある。

それでも緊張だけは解かずに、慎重な足取りで真雪はその宿の残骸に近づいた。いつでも対応出来るように防御体制を維持しながら、ゆっくりと歩み寄る。

「こんだけ暴れても本体が出てこないって事は、やっぱり遠隔操作系の物質操作タイプの奴か……」

未だ熱波を放って燻り続ける炭化した木片を手に取り、しげしげと眺めながら真雪は考え込んだ。

長年、材木や食料として人類に虐げられてきた植物が、遂に自我を覚醒させ人類への報復乗り出した、というならば話は別だが（た

だしこの場合、彼個人が特定して襲われる理由にはならない）まさか、植物にまで恨みを買ったような覚えはない。と、なれば答えは簡単だ。物理法則を根本から大胆に無視するようなこの現象。間違はなく塵を使っている。

ちりちりと、胸を焦がすような焦燥感。なんだ。俺は何を見落としている――？

考える。

（問題は、どこのどいつがそんな事をしたのかって事だ……）

それも、自分に恨みか――それに匹敵する殺意を抱く相手。恨みつらみはともかくとして、現状では心当たりは一つしかない。

「二重尾行……？」

我知らず呟きが口から漏れる。それはつまり――

（俺らが一方的に探してるだけじゃなく、相手側でもこっちの動向を探ってたって事か？）

そして多分、あちらの方が先にこちらを捕捉した。だからこそ、（俺らが探し回ってる間に――当の目標はこっちの塹を突き止めた上で、宿に罫を仕掛けて立つてのかよ！？）

探していた相手に付け回れていた事も気づかずに、一日中歩き回っていたわけだ。見つかるわけもないのに。

「……けど妙だな、なんでそれが今なんだ？」

恐らく、時間はもつとあつた筈だ。何せ自慢じゃないが（事実、何の自慢にもならないが）この時代この世界において、自分の姿は非常に目立つ。普段なら特徴にもならない、単なる身分上の記号ですらない学生服も、この場所においては白い羊の群れに紛れ込んだ黒羊のような異彩を放っている。確かに、これならこちらの姿を見つけるのはさして苦でもなかっただろう。

先ほど、脳裏から警告を発した、胸の奥にある不自然なざわめきはまだ消えない。考える考える考える。

導き出した結論の中に潜む、鋭く尖った欠片のような違和感。なぜに今。今日このタイミングで襲われたのか。恐らくは三日間、目

視していただけの相手が動き出したのか。

全身全霊で思考しろ。

脳内に散らばる情報をパーツとしてつなぎ合わせる。とはいえ、手札が全て出揃っているわけではない。足りない欠片を想定で補いながら作業を続けていると、やがておぼろげながら相手の描く『絵』が見えてくる。

「……やられた」

那由多だ。

今までと今日で、差異があるといえばあいつの存在しかない。その事実気づいた瞬間、真雪はその場を飛び出し陰陽寮へと走り出した。

畜生、なんですぐに気づかなかった……！

精霊獣が狙いに来るとしたら、まず自分だと思っていた。が。

（那由多は俺に頼まれて——明とも何度か口をきいてるじゃねえか！）

つまり、囷としては真雪だけでなく彼自身の存在も有効となる。自覚のあるなしは別として。

もどかしさを抱えながら、コンクリ舗装もされていないようなただっ広い道を全力でひた走る。幸い、陰陽寮までの道は覚えていた。それなりに市内の中心部にあるため、京都特有の碁盤目状の範囲内である。直線と直角の道を何度か繰り返せば辿り着く。

が、結論から言えば真雪は、那由多を発見するのに陰陽寮まで走る必要はなかった。それを幸いと言えるのかは、果たして分からないが。

綺麗に切りそろえられた黒髪が無残に乱れ、ずたぼろになった身体
の四肢が、出来損ないの人形のようにあらぬ方向に折れ曲がって
いる。ぐったりと力を失った身体はもはやぴくりとも動かない。

全身の傷口から血の流れ出るままに任せ。

自ら流れ出たその血の泉に、あたかも沈み込むように地面に横た
わり。

道端で死体のように力なく倒れ伏す那由多の姿を真雪が発見した
のは、彼らが分かれてからほんの五分後の事だった。

こうかい

世の中に 絶えて桜の なかりせば

死の瞬間はいつまでも記憶に残る。

それが実際には自分で経験したものでなくとも、自らの手で与えた永遠の終焉は、たとえ錯覚であろうとも余韻となってその感触を手中に残していた。

後悔はない。元より、そんなものは決してあつてはならない。

彼女。それは至福と共にある言葉だ。

彼女のためにある事。それ以上の価値が、此の世界にある筈がない。

だから別に不満はなかった。たとえこの手がこれから先も、如何に汚れていこうと。消せない記憶が蓄積されていこうと。

それが真実彼女のためになるならば、この心臓を抉り出す事さえも厭わない。

彼女はこの世界の全てだ。それだけの価値がある。

だから今の生活にも、さしたる苦痛は感じない、何の問題も存在しない。

ただ、少しだけ疑問に思う事がある。

その思考が彼女への背徳に繋がるのではないか。

漠然とした不安がよぎるが、それでも思考をやめる事は出来なかった。果たして。

私は一体、いつまでこんな事を続けるのだろう……？

もう、いいだろ？
そろそろ終わりにしようや。

「現在は小休止してトコやな」

煙管から呑んだ煙をゆつくりと吐き出し。
彼はきっぱりとそう告げた。

「左腕の骨と、それから両足の骨が折れとる。特に酷いんは足の方やな。折れとるうちゅーよりぐっちゃぐちゃや、アレ。つーても腕の方も、そんな綺麗にいったわけやないみたいやな。肘イの部分から皮膚が破けて折れた骨が突き出しとったわ」

左腕骨折、両大腿骨複雑骨折。および、上腕二等筋の裂傷。

「おまけに臓腑もいくらかやられとる。胸を守る骨が何本か折れたのがマズかったな。尖った先が胃の腑の近くの臓腑に刺さって、腹の中でも怪我しとったわ。この辺やな」

そう言って、自分の左脇腹のあたりをぼんぽんと叩いてみる。その辺りなら腎臓か。

肋骨の骨折に腎臓損傷。そして、各種裂傷と打撲・打ち身に大量の失血。

それが、現在の那由多の状態だった。

現代風に言えば安静レベル5——絶対安静が必要とされるクラスの重体。

「……助かるのか？」

「せやから、今は小休止やうちゅーとるやろ。ま、まだかるうじて心の臓は動いとるけどな。それもかなりギリギリな感じや。正味な話、いつ状態が変化してもおかしくない」

「そっか……」

力なく頷く。言われるまでもなく予想していた言葉だが、やはり実際に聞かされると重い。

「いやー、にしても、マジやばかったで。俺の治療が適切以上だったのを差し引いても、あと一秒でもここに来んのが遅れとったらその坊、確実に死んどったわ」

「……さすがに一秒つてのはねえだろうよ」

「けどヤバかったのはホンマやで。まあ、暫くの間は毎日が峠みたいなもんやなー。とりあえず、出来る限りの治療はしといたわ。あの坊、連れてきたの自分やて？」

「ああ」

「簡単な治療術なら使えるやろ。それなのに、よーなんも手え出さなかったな。それだけは正解や」

「表面だけの軽い怪我や単純な骨折程度ならともかく、あそこまでの状態になると正直、俺程度じゃ何をしていいのか分からないからな。下手に半端な治療をするより、最初っから専門家に見せた方が早い」

たとえば、表面的にはただの打撲にしか見えなくとも、専門医の目で見れば神経に傷を負っているような、致命傷の可能性もある。いつぞやの明のように、ただ表面だけに傷があり、本体が元気に動き回っている状態ならともかく、あの段階まで傷ついた那由多に、簡単な一時治療を施すのは愚の骨頂だった。怪我を負うほどの衝撃を与えられたという事実を、診察する側が認識出来なければ、治療可能な怪我さえも見落とす可能性がある。

「分かつとるなー、自分。陰陽師なんか、なまじっか妙な力を持つとる分、図に乗る奴も多いんやけど。自分はその辺のあたりがちよいと一味違う感じやん」

「ガキの頃から周りに本物の天才が溢れてたからな。正直、自惚れるヒマがなかった」

劣等感を抱く事はあったけど。たかだか人外的能力ごときで鼻を伸ばせる余裕などなかった。

それは、別に今でも変わらないけど。

真雪は握り締めていた拳を解くと、ゆっくりと顔をあげた。加減を忘れてた手のひらの、食い込んだ爪の先から僅かに血が滴る。

布団に横たわる那由多は、発見した時と同様、ぴくりとも動かなかった。じつとよく見れば胸までかけられた布団の布が、信じられないほどに僅かながら、呼吸に合わせてゆっくりと上下しており、辛うじて生きているのだと分かる。その事に、改めて安堵する。

大量に血液を失った肌は、死人のように青ざめて、全身のあちこちを白い布で覆われた少年の身体は、普段以上に小さく見えた。

十二歳。小学生。

小さく見えるも何も、本来まだまだ子供なのだ。彼は。

それを巻き込んでしまった。俺が。

今更ながらの後悔に、胃が擦じ切れそうな嘔吐感が込み上げる。

が、苦味と共にそれを飲み込む。もとより今更。

吐く物なんて、とっくに残っていなかった。

ときたか

彼らがいるのは、陰陽寮の一室である。

那由多はそこで、つい先ほどまで陰陽師による塵の集中治療を受けていた。

施術をしたのは、以前真雪の怪我を治してくれた『治療の専

門家』——ときたか時貴だ。

すらりとした長身を妙にだらしない黒の着流し姿で包み、長い黒髪は襟足の部分で細く一つに結っている。

半天のような薄っぺらい上着を、袖も通さず肩からひっかけ、足元は素足（寒くないのか？）

陰陽寮はおるか、京の市内を歩いても見たことないような奇妙に着崩した格好をしており（人の事を言えた義理ではないが）多分、歳は二十代前半から後半。

地域柄か口調に訛りがあるが、京弁というよりむしろけったいな関西弁といった感じで、雅さよりはいかさが目立つ。

怪しさと胡散臭さが溢れんばかりに盛大に漂う、年齢不詳、正体不明の謎の兄ちゃんである。

正直、こんな機会でもなければ進んでお付き合いをしたいとは、到底思えない。

だが、塵の腕だけは抜群によい。

瀕死の那由多を連れてくる時に迷わずここを選んだのも、彼の人間的な胡乱さを凌駕する治療術という、圧倒的な事実があったからだ。

それは先日、治療をして貰った際に身をもって既に体験済みである。

とはいえ、こちらにもまた誤解と濡れ衣とはいえ半ば逃亡する形で陰陽寮を飛び出した身である。

戻ってきたとはいえ、あっさり受け入れて貰えるわけもなく、

なんやかやと派手に揉め、最終的にはほぼ殴こみに近い形で那由多を預ける事に成功した。

因みにその後、例によって真雪は不審人物として再び懐かしの座敷牢に幽閉され、遠野の取り成しを受けるまでは地下に閉じ込められていた。

開放されたのはつい先ほど。

そこで漸く那由多の容態を見に来たのである。

まだ、生きていた。昏睡状態ではあったが。

その事に思わず泣きなくなる程安堵を覚えて、真雪はやる気なく壁にもたれかかっている時貴を振り返り、深々と頭を下げた。

「……ありがとな。那由多の事、助けてくれて」

「別に自分に礼なんぞ言われる筋合いもないわ。その坊も陰陽師なんやろ？ だったら治療すんのは俺の当然の役目や。同胞助けるんはあたりまえやん」

礼を言うこちらに対し、時貴は壁に寄りかかったままぞんざいに手を振った。

「にしても、運の悪いガキやのー。こいつ、例の塵災害に巻き込まれたんやろ？ 知り合いとかに連絡せえへんでええのん？ 心配しとるんと違うか？」

「その常識人みたいな発言にはびっくりだが……こいつの師匠——伊々美つーんが外出中なんだってよ。つっても俺も、他の知り合いとかは知らねえし……くそっ！ なんで那由多なんだ！？」

込み上げてきた怒りを抑えきれず、近くの壁を力任せに殴りつける。

どごとと鈍い音と共に局地的な振動が部屋を襲い、一瞬遅れてぱらぱらと天井から粉塵が落ちてきた。

「こらこらこらこらこら。なにやっとなねん自分、いきなり。人の仕事部屋で暴れてくれんなや」

「最初に狙われてたのは俺の筈だったろうが！ 俺が襲われるならともかく、なんでよりによって、那由多がこんな目に合わなきゃなん

ねーんだよ！？なんの理由がある？意味分かんねえよ！」

一度噴出した感情は、容易には収まらなかった。

時貴の静止を無視して、がんがんと殴り続ける。

怪しげな青年はそんな彼を飽きた様子で眺めやり、ぽつりと呟いた。

「……別に、理由なんざあってもなくても同じやろ」

「あ？」

睨んだ視線のその先で、時貴がゆっくりと煙を燻らす。煙管を咥えたままで、

「いちいち理由が必要か？見習いとはいえ、そのガキも一応は陰陽師の端くれ。塵を扱っていく以上、多少の怪我や事故なんぞつきものや。たかだか塵災害に巻き込まれたぐらいで、怖なつてぎゃいのぎゃいの騒ぐなら、うつとうしいからとつとと去ね。そんな覚悟もない役立たずは、この場所にはいらん」

煙と共に吐き出される言葉は、厳しいものの毒はなく、彼にとってはそれが当然の事であるかのようにだった。

当たり前の事。陰陽師にとって。

それは、確かにそうだろう。

塵を扱う上で、塵災害を恐れるなんていうのは、ただの臆病者に過ぎない。だけど。それでも。

どげぞ

「……こいつはまだ子供だ。それに、今回は俺が助力を頼んだだけ。覚悟を決めるヒマなんてなかった」

「さやか。けど、俺から見たらその坊も自分も大して変わらん。勿論、あの赤娘もな」

「赤娘？」

「少なくともあのお嬢は、既に立派に覚悟を持つとるで？何が起ころうと絶対に誰のせいにもしいひん」

「知ってんのか、明の事」

「あん？」

あの赤い少女について語る時貴の口調には、刺や含みなど、よくある偏見は感じられない。

その事に若干の驚きを覚えて尋ねると、彼は意味を履き違えたのか、怪訝そうに眉根を顰めた。

「あつたり前やん。あん子はうちの常連やしなあ。あーんな日替わりで致命傷作ってくれる奴なんぞ、早々おらんわ。」

治しても治しても丁寧な怪我あしてくるしなあ。ここじゃ一番の顔馴染みやで。当然、俺ともマブダチや」

いや、意外だったのは以前、あの少女が眼前の青年をやたらめつたらに毛嫌いの台詞を吐いていたからなんだが。

どうもこの反応を見ると、そう険悪な仲でもないらしい。

あれ、人違い？

「なあ、こっつてアンタ以外の治療担当っている？」

「なんやねん突然？おるにはおるが、滅多に顔出さへんで。基本、ここは俺の縄張りや。自分の場所に他人が出入りするんはいまいち好かん」

そんな理由で職場を追い出された方も迷惑だろうなあ。

ていうか、他人の出入りを嫌う奴が医療施設で働こうとするなよ。

患者の出入りはどーすんだ。

「や、それはええねん。俺と同列の立場の奴がおるのが気に食わんだけで、実験材料——もとい、患者が来るのは大歓迎や」

「今お前、人道や倫理的に医者としてちよつとあるまじき台詞を吐かなかったか？」

「なんのこつちやい。言いがかりもほどにしてえな。俺は医学を修めた者の責務として、担ぎ込まれる患者を誠実に治療しとるで？ 臨床実験の済んでいない新薬を試験的に投与したり、開発中の塵治療術の模擬試験の材料になんぞしてへん」

「……………」

明が目の前を嫌う理由が初めて分かった。

知らないとはいえ、治療の為にこんな不審人物の元に追い立てるなど、本当に悪い事をした……

ていうか、こいつに任せて那由多大丈夫だったのかな？

「……まさかとは思うが、その怪しい薬やらなにやらを、那由多に投与したりしてねえだろうな」

目が覚めた時、指が一本多くなつてたりとかしたらどうしよう。

牽制の意味も込めて睨みやると、時貴はつまらなさに肩を竦めた。
「してへんよ。ちゅーかそのガキの場合、迂闊な事するとマジで冗談抜きに死にかねん。重症、やのうて重体なんや。

ま、ここまでギリギリ死体つつーか、死体ギリギリの治療も久々やつたし、それはそれでときめいたからええけどな」

医者というか、凡そ人類としてありえない本音をただ漏らしている時貴に、先ほどですら感じる事のなかった後悔が押し寄せる。

なんでこんなのにな由多の治療を任せちまつたんだ、俺は……！
今更な、そして意味のない後悔とはいえ、悔やんでも悔やみきれない失態だった。

「あ、そういえばその、目下話題沸騰中のお嬢やけどな、さっきまでここに来とつたで」

「あ？明が？なんでだよ。何しに来たんだあいつ」

「土下座しに」

平然と。

あまりにも平然とした口調で吐き出された単語に、一瞬言葉を失った。

ふこう

「ど、土下座って……」

「うん。その坊の治療が終わってからこつち、坊んの前でずっと土下座しとつたで。ひとつことも口きかずに。いやー、絵師でも読んで見本に残しときたいくらい、綺麗な土下座やったわ」

写メもない時代の癖に、少女の土下座を影像記録に残しておきたいなどと抜かす、鬼畜男がここにいた。

「つか、珍しくシリアスな場面なのに面白い事とか言ってるじゃねえよ、この野郎。」

折角のシーンが台無しだろうが。
にしても――

「……なんであいつがわざわざ那由多に土下座なんてしに来てるんだ？つか、そもそもあいつに謝罪なんて人間的な機能が備わってたのか？」

会話の端々に見えた、彼女の持つ自分自身への絶対的な自信。

明からすれば、那由多も自分も遠野も等しく、格下の存在なのだろう。

そんな、自身が対等と見做していない、蟻にも等しいと認識している相手に、頭をさげるような愁傷な人格の持ち主には到底思えない。「それは言いすぎやろ。そら、あのお嬢はやたらに尊大で自信過剰やけどな。そやかて、自分に非いがあるとなれば、素直に頭くraisげるわ。あいつは他人への配慮が足らんだけど、別に気遣いの出来ん奴やない」

「いや、だからそれがおかしいんだろ。あいつ、別に悪い事なんてしてねーじゃん」

あと、気遣い出来ないと他人への配慮が足りないって、結局同じ意味だと思っけど。まあ、それはともかく。

明には何の罪もない。

彼女は何も悪くない。

だから、謝る理由もない。

そんな事、彼女自身が一番よく分かってる筈なのに――

「そやかて、その坊が死に掛けたのって、結局はあのお嬢のせいやん」

が、そんなこちらの胸中を読みとったかのように、時貴は横たわる那由多を指差し、あっさりと言った。

「勿論、今までの被害者達も……究極的に言えば、自分のその怪我もや。元を正せばぜーんぶ、あのお嬢が原因やろ。みーんなあん子が悪いんやん」

反論を。

するべきだったのかもしれない。

本来ならば。

それでも咄嗟に何も言うことが出来なかったのは、彼の口調があまりにも自然だったからだ。

嫌味でも皮肉でもなく。

あたかもそれが、世界にとって正しい理であるかのように、何の韜晦もなく告げるその様子に、思わず反論を失った。

彼は続ける。

「その坊だけやない。今まで被害にあった奴ら全員に、お嬢は毎回、頭下げとったで。そら、中にはもう死んでしまった奴もおったし、それ以前に身内がぶちキレて、顔見せる事すら許さへん奴らもおったがな。

それでもあん子はできる限りの謝意を示しとったよ。ホンマに自分に罪がないなら、一切の業もないと思うなら、なんであいつがそんな事すんねん？

罪は――ないのかもしれない。

だが、責任はあるのかもしれない。

そんなこと、何がどう違うっていうんだ？

「考えてみれば――」

青年は煙管を啞えたまま、口の隙間からふうつと薄く煙を吐いた。

この時代のものは、まだそんな濃く精製がされてないのだろう。

空中に漂う匂いは現代のそれより遙かに弱く、怪我人の傍で吸われ
てもあまり気にならない。

「誰かのせいに出来るつちゅーのは、それだけで救いかもしれんな
あ。自分が陥った不幸の責任を、転嫁出来る相手がいるつちゅーの
は。

少なくとも、そいつらには、怒りをぶつける対象がある。八つ当た
りという手段がある。

たとえそれが筋違いのものであつたとしても、頭を下げてくれる相
手がいるつちゅーことは、自分らの不幸を正当化出来るつちゅーこ
とは、ある意味で得な事かもしれん。それによって、周りの同情が
得られるわけやしな」

「……………」

その言葉には到底頷けなかった。

その意見には一切納得出来なかった

今の那由多の現状を見た後では。

これが……こんな姿が得だと？

こんなの——ただの不幸でなくてなんだっていうんだ。

てんさい

「一方、それに比べてあのお嬢はどうや？そら、最初は彼女の同情も集まったかもしれない。気の毒に思う声もあったやろう。」

「でも、そんなの所詮一過性のものやった。被害が多くなるにつれ――期間が長引いていくにつれ、彼女自身もまた被害者やのうて加害者に、巻き込まれた部外者やのうて、首謀者にその立ち位置を変えていった。」

同情の声は怨嗟となり、やがてあん子は周囲から疎まれる存在となつた」

「……………」

「だが、そんな事是不幸ではない。その程度の事なんぞ、不幸でもなんでもない。あいつがホンマに憐れなんは……俺があん子をホンマに気の毒と思う事は、お嬢が怒る事すら出来んつちゅー事や。」

この災害の原因として考えられている彼女には、元より悲しむ事はおろか怒る事さえ許されてない。

たとえ怒りたくても、周囲がそれを許さへん。親しい身内を失つたんは、悲しむ気持ちにはきつと、あん子もなんも変わらへんのになあ」
「気の毒なこつちやで。」

彼は大きく感情もこもっていない口調でそう言つと、今度は溜息をつくように白く濁っていない透明な吐息と吐き出した。

肺に残っていた微かな煙草の匂いが、残滓となつて鼻腔を擦る。

「それでもお嬢は文句も言わん。彼女はあの歳で、自分の才能を――自分の特質性をこの上なく理解しとる。」

だから黙つて被害者達んどこへ、ただ頭を下げに来るんや。言い訳もせず、文句も言わず、な。謝罪だけが、まだ辛うじて彼女に許されとる唯一の事やから」

「そんな、事――」

悲しむ事も怒る事も許されない。

彼女に出来るのは、ただ謝る事だけ

自分に非のない被害者達に対し、惨めったらしく地面に這い蹲って、ただ一心に許しを請う事だけ。

あの——美しい存在が。そんな。

そんな理不尽な話があるか？

「そんな事……そんな話、おかしいだろ！？だってあいつは無実じゃないか」「加害者やないからて首謀者やないからて、そいつが無実とはかぎらへん。そも、有り余る才能っちゅーんはそれだけで有害なもんや。あのお嬢見とつたら分かるやろ」

理不尽な怒りに我を忘れ、思わず激昂しかける真雪に、時貴は特に宥めるでもなく平然とした様子で言った。

「こないな事態になったも、突き詰めればあのお嬢のせいやもん。特出しすぎた才能は、もはや才能やのうて罪悪や。

その存在だけで周囲にとめどなく混乱を、あらゆる不和を巻き起こす」

「……けどそんな事言つたって、そんなのどう考えてもあいつのせいじゃねえだろ」

「いいや？彼女のせいや。彼女の存在だけがただただ悪く、他に一切責任はない。この災害の因すらも、結局は彼女の特異性に引つ張られたようなもんやろうしな。ある意味、それかて被害者や。」

断言してもいいが——今回のこの件かて、そら、解決出来るんはあん子並の実力が必要なんやろが、それを言うんやつたらそも、彼女がおらんかったら始めから起こってもおらんで。こんなけつたいな事件」

「……………」

「世間一般で異端とされる陰陽師の集団の中でさえ、馴染む事の出来ない異端の中の異端。彼女は確かに天才や。天才過ぎる本物の天才。」

俺らみてーな凡人には、それこそ理解すらも出来んくらいなの、な。そして何より、本人自身がこれ以上なくその事を自覚してる」

同じ異端児からさえも、化け物と呼ばれた祖母。

その神にも等しき才能故に、人外と畏怖された姉。

あまりにも優れた才能。

悲しいくらい、優れた才能。

分かってる。

世間からはみ出してしまった異端児だからこそ、その枠にすら収まらない才能を見つけた時に、どれだけ厳しく排除するか。

自分が特別じゃないと分かってしまった才人の末路など。

「だからこそ——だからこそ、彼女は黙ってただ頭を下げてるんや。自分の存在が災いの引き金になるとる事を知っとるからな」

ねむり

「……………」
「せやからまあ、そんなお嬢の状況に比べたらその坊なんか百倍はマシやで。」

別に死んでもうたわけやないし——いやまあ正味、結構ギリギリな感じやけど、中にはホンマに死んでもうた奴もおったわけやし。それに比べたらはるかにマシやろ。生きてるだけでもめつけもんや」
結局のところ。

それは彼なりの、不器用な慰めのつもりだったのかもしれない。
酷く救われない例に対し、より酷い例を引き合いに出して、被害者感を薄めようという姑息手段ではあったが。

しかし——

「……………それでも、那由多は何も悪くない」
「んなもん分かつとるわ。別に俺かて、坊が悪いなんて一言もゆーとらんやろ？」

ただまあ、運が悪かったつちゅーのはあるけどな。それを言ったら、今までの被害者も皆そうやで。何も坊だけが特別なわけやない。そらしゃーないわ」

違う、違うんだ。

仕方ないなんて言葉で片付けないでくれ。

那由多は、そうじゃないんだよ。

彼の襲われた原因は、他の被害者達とはハッキリと違う。

あいつだけは本当に、襲われるべき因果がない。

今回の件においてはある意味、那由多だけが唯一の——本物の被害者と言ってもいい。

彼は、ただそこに居合わせたただだったのだから。

それこそまさしく、運が悪いとしか言いようもないくらい。

時貴。

いらんことをべららくつちゃべってる癖に、お前は本当に、その事に気づいていないのか……？

スラックスのポケットに突っ込んである紙を、手のひらで握り潰す。汗を吸った和紙は音も立てずにくしゃりと形を変えた。

こちらの沈黙をどう捕らえたのか——あるいは単に言いたい事を言い尽くしただけか、時貴は、変わらぬ気楽な口調で話しかけてきた「よお。それで自分は、この後どうする予定なん？」

「あ？どうするって？」

「いや自分で、元はといえばお嬢に飼われとったんやろ？せやから、このまま一旦お嬢の元に帰るんか、それともここで坊の容態を見取るか。」

まあ、ここにいたいつちゅーなら別にそれでも構わんし。いたいだけおれや。俺もちよいちよい留守にするよって、その間に留守番とかしといてくれると助かるわ」

それは体のいい雑用扱いにしか思えなかったが。

真雪はあっさりと首を振り、青年からの申し出を断った。

「いや、悪いけど俺、この後ちよつと用事があるから」

「あつそ。そんならしゃーないわな。因みに俺は、そろそろ飯食いに行くんやけど、自分はまだおるか？」

「えつと……いてもいいのか？」

「ん、構へんよ。どーせここ、基本は俺の城やし。せやったら、出て行く時の戸締りだけはきちんとしてつてや。んじゃ、ばいにゅーん」

どこで覚えたそんな言葉。

平安人らしからぬ——というよりは、おおそ成人らしからぬ、まるで雰囲気のない挨拶を口にして、ひらひらと手を振りながら時貴は去って行った

ふむ。いい加減な大人の生き見本みたいな奴だ。

自然、那由多と二人で部屋の中に残される。

「ホントにさあ……」

眩きは自然と口から漏れた。

「お前にはとんだ迷惑かけちまったよなあ……。お前に対してだけは悪いと思ってるんだよ、マジで。本気で反省してる。本当に悪かった」

眠り続ける那由多からは、何の反応も返ってこない、罵倒も恨み言も、きゃんきゃん映煩いいつもの怒鳴り声も。

当然の事だが、沈黙したまま静かに眠り続けている。——まるで永遠の眠りのように。

二度と目覚める事がないかのように。

てがみ

(……馬鹿馬鹿しい)

真雪はかぶりを振って、今しがた抱いたばかりの不吉な妄想を振り払った。

極力、音を立てないように。

身動きすらせず昏睡し続ける少年にとっては、意味のない気遣いだっただけかもしれないが。

「まったく、笑っちゃうよなあ……本当。ほんのついさっきまで、お前とくっただらねー馬鹿話して盛り上がったのによ。なんだよこのハードな展開。別れた瞬間に瀕死状態とか、一体どこでそんな死亡フラグ立ててんだよ。作者の頁の都合かよ。急すぎてついていけねーっつーの」

念のため、周囲に気配がないのを一応確認して——元よりそんな事は意味のない作業ではあったが——誰にも見られないようにそっとポケットの中から一枚の紙を取り出す。

結局、ポケットの中で握り潰した紙。

汗を吸ってたわみ、しわくちゃになった和紙を丁寧に引き伸ばす。

現代で触れるノートや本などとは、明らかに違う手触り。

繊維を梳いて作る匠の技による手作りの紙は、それでも機械製の大量生産品には滑らかさにおいて遠く及ばない。

それが、進化というものか。

あるいは、それこそが衰退なのか。

時貴にも明にも見せられなかった——まだ誰にも見せていない手紙、否、脅迫状。

文字通り半殺し状態だった那由多を発見した時、彼の傍らにその血を避けるようにして、まるで遺書のようにそっと置かれているのを発見した。

それは、滅び行く一匹の獣から託された未来への遺書。

真雪だけに分かる、他の誰にも届かない、彼だけに宛てられた呼び声。

死者からの伝言ダイイングメッセージならぬ殺人者からの伝言キリングメッセージ

けつい

君がため 惜しからざりし 命さへ

もう、いいかい？
まーただよ。

もう、いいかい？

……もう、いいだろ？

小さい頃から憧れている存在がいた。

実際に、その人物に会った事があるわけではない。

かといって、テレビや雑誌などのメディアで取りあげられていたという——いわゆる、著名人のたぐいではない。

実を言えば、会った事はおろか見た事すらない。

むしろその人物は、彼が生まれた時にはとっくに鬼籍に入っていた。
はるか彼方——千年の昔に。

彼女の名は黒姫。始まりの人。

たった一代で黒野の歴史の礎を築いた、強大で偉大なる始祖。

天才的な——ただただ天才的な才を持つ唯一無二の異端児。

黒野の名を持つ者にとって『彼女』の存在はある種、特別だった。幼い真雪にとってもそれは例外ではなく。

真雪にとって。

『彼女』は宝石だった。

『彼女』は英雄だった。

『彼女』は憧れだった。

『彼女』は目標だった。

『彼女』は——全てだった。

徹底的な女系一族である黒田家にとって、異端児の才があったとしても男子には、後継者として求められる需要はほとんどない。たとえそれが、直系血族の長男である真雪だったとしてもだ。

ましてや当代には、近年でも最強と謡われる祖母の月日に、始祖の再来とまで言われている姉の白雪がいる。

自分を遥かに凌ぐ才能——比べる事すら馬鹿馬鹿しくなるような、圧倒的な天才がもつとも身近に在中で、自分のような凡俗があえて異端児としての道を目指す必要はない。

そんな事は、物心つく頃には既に充分過ぎる程分かっていた。

今思えば、高校卒業後に実家を出るというのも、単にその柵から逃げたかっただけなのかもしれない。

絶対に及ばない天才が。

誰よりも身近な人間として、一緒に暮らしているという事実に耐えられなかっただけかもしれない。

だけど。

それでも彼が異端児としての道を目指したのは——誰にも望まれず、一切の期待もされず

時には親戚や縁戚などから嘲笑をを浴びせられながらもその道を選んだのは、幼い頃から抱いていた『彼女』——始祖・黒姫への憧れがそれだけ強かったからだ。

届かないものでも、焦がれずにはいられない。

見えないほどに遠くにいようと、目指して進まずにはいられない。

家族すらかも逃げ出した癖に、『彼女』への憧れは消せなかった。その歩みを止めないために、少しでも近づけるように、結局は同じ道を選んだ。

そこに葛藤はなかった。

そこに躊躇はなかった。

ただ当たり前の。そうであるべきであり、そうであるべきといったような。

ごくごく自然な判断として、自分は異端児として歩んで行く事を選んだ。

全ては『彼女』に近づくために。

だから分からなくはない。

お前が、あの赤い少女に焦がれる気持ちだ。

あの眩しいくらいに圧倒的な、世界そのものから選ばれたといつても過言ではない、本当に特出した本物に憧れる気持ちは。

俺もそうだったからよく分かる。

一歩踏み間違えれば。

何か掛け金が外れていれば。あるいは、もっと身近に——それこそ、手を伸ばせるほど近くに憧れた『彼女』の存在があったなら。

俺もまた、お前のようになっていたのかもしれない。

本当に、心の底からそう思う。

ああ、だから。

嘘でもなく誇張でもなく、お前の気持ちをはつきりと理解出来る。

だけど駄目なんだよ。そのやり方は

そのやり方じゃ駄目なんだ。

お前は俺にこんな事を言われたくないかもしれないけど。

本来なら、諫めるべきは俺の役目じゃないんだろうけど。

それでも、気づいてしまったのだから放っておく事は出来ない。

ましてや、お前が呼びかけるのなら。

それを無視するなんて俺には出来ない。

分かったよ。

そっちの事情は知らねえが、身内に手を出されてまで、俺も部外者を気取るわけにはいかない。

宴もたけなわ、丁度いい頃合だ。

ここらできつちり白黒つけよう。

お互いに、どんな結果になろうとも。

覚悟しろ。

まちあわせ

帯を緩めて着物を脱ぐ。

最初は一人で着れなかった和服も、今では簡単に脱ぎ着が出来るようになっていた。

構造が単純なだけに、慣れると意外に洋服より着易いかもしれない。単に、慣れただけともいえるかもしれないが。

(……そりゃ、慣れもするよな)

真雪がこの時代に訪れてから、早一ヶ月以上が経過していた。

自前で持っていた一張羅の学ランには替えがないため、服は借りざるを得なかった。——誰の着物を借りたところで、丈が短いのは相変わらずだが。

だが今は、ようやく肌に馴染み始めた着物を脱ぎ捨て、持ち前の制服に着替える。

そこに、拘り以上の何かがあるわけではない。

ただ単純に、今後の展開を考えれば少しでも動きやすい服装の方がマシだと思ったただけだ。

それが杞憂だとしても、用心に越した事はない。

久しぶりに袖を通した学ランは、三年間着た筈なのに何故か違和感があった。

日数的には夏休み明けとさして大差はないのだが。

「多少は心境の変化つてのがあるのかもな。ま、服なんてサイズがあつて寒さを凌げりゃなんでもいーんだけどな。結局」

制服の代わりに脱ぎ捨てた着物を、なるべく丁寧に畳む。

一応借り物なので、変な皺が残らないように。

ついでに、少ない私物をまとめて部屋の中をざっと片付ける。

あるいは、もう二度とこの部屋に戻って来ないのかもしれないという事を思えば、それは果たしておくべきマナーに思えた。

ここではマナーなんていう言葉は、何の意味もなさないにしても。

真雪以外の誰も、その言葉を意味を知らないとしても。

「……これで、荷物は全部だよな？忘れ物はなし、と。よしオツケ
ー」

最後に部屋をぐるりと見回し、最終確認。

鞆を肩から掛けなおし、ちらりと腕時計に視線を向ける。

約束の時間までまだ少し。けど別に、早い分には越した事はないだろう。

それに。

たとえどこに留まっていようと、今の自分にやるべき事なんて一つしかないのだから。

それ以外は全てどうでもいい。

部屋を出る寸前に、思いついて両耳のピアスを外し胸ポケットの中にしまう。

暫くこれには用はない。

特に未練も思い残す事もなく、真雪は一人静かにその部屋を後にした。

辿り着いた先は、やはり予定より早すぎたらしく誰の姿もなかった。それについては元より予想通りだったので、特に失望もなく近くに生えてる適当な木の枝に持ってきた鞆を引っ掛ける。

ついでに学ランも脱いで一緒にかけた。

着物と比べてマシとはいえ、それでも多少は堅苦しいし、やっぱりシャツだけの方がなんぼか動きやすい。

いや、肩とか結構動かし難いんだよ。

ブレザー派や着た事ない女子には分かりづらいかもしれないけど。

待つ間、特にやる事もなかったので、暇つぶしと体慣らしのために

軽くストレッチでもしていようかと思ったが、大して意味があるとも思えないのでやっぱりやめた。

手頃なサイズの石を見つけ、椅子代わりに腰掛ける。

それに、幸いにもそれほど待つ必要はなかった。

時間には正確な方らしい。

まあ、あいつらしいといえらしいといえなくもない。

初対面の時と同じく、気配も足音も消さずにゆっくりと近づいてくる。

まさかその程度の事も出来ないということはないだろうから、単に隠すつもりがないだけだろう。

然もありなん。

確かにこの状況で、気配を消す意味はない。

それでも多分、気づいたのはこちらが先だった。

「……よお」

だから声は、こちらからかけた。

それに対して彼は。

初めて会った時と同じ様に、柔和な笑顔で、人好きのする笑みを浮かべて、片手を上げながらにっこりと笑顔で答えた。

「やあ、サネユキ。待たせたね」

そう言って。

伊々美はいつも通りに微笑んだ。

おまえが

待ち合わせに伊々美が指定してきたのは、真雪が初めてこの時代に
来た時に彼に拾われた場所だった。

鬱蒼と茂る木々に囲われた広大な森。

遠野曰く、地元の民でもおいそれとは近づかないという事だったか。
なるほど。

確かにそれは、これからの舞台としては相応しい。

「……こうして二人できちんと話すのは、随分と久しぶりだねサネ
ユキ。一ヶ月ぶり——くらいかな？」

「ああ。俺が遠野に監禁されてる間、あんたとは一回も会ってねえ
からな」

初めて会った時と同じなのは、彼の表情と場所だけだ。

否、あの時はほとんど意識がなかったから表情については断言出来
ないが。

きつとあの時も今と同じような、人好きのする優しげな表情をして
いたのだろう。

だが服装は大いに違う。

普段着ている狩衣ではなく、袖の膨らみを抑えた動きやすい剣道着
のような和服の上に、どこかで見覚えのある白い光沢の絹を、まる
で羽衣かマントのように身に着けている

狩衣姿では体格がわかり難いが、こうしてシンプルな服装になると
なるほど、当時の日本人としてはずば抜けて体格に恵まれているで
あろうという事が、改めてよく分かる。

「……ああ、悪かったね。公務が忙しくて、なかなか顔を出しにも
いけなかったんだ。身寄りのない君に対して、あまりに薄情だった
と思う。ごめんよ」

「忙しかった理由はそれだけじゃねえだろ？」

あたかも、そんな事は忘れていたとでもいうように。

そんな些細など、既にとくに記憶に残してすらいなくても言うように。

「陰陽師としての仕事の合間を縫って、明の顔見知りを端からなぶり殺しにしたり、俺や那由多を襲ったりしてりゃ、確かに顔を出す暇なんかねーだろうよ」

「……誤解があるようだから先に訂正しておくけど、別に私は人を殺めて悦に浸るのが趣味というわけではないよ？」

そんな悪趣味な嗜好を持った覚えはないし、第一、人を傷つけるのが趣味なら、死に掛けの君を助けたりはしない」

そう。彼にとって殺戮とは、あくまで手段の一つであって目的ではない。

だからこそ、その回答に辿り着くまでに時間がかかった。もう二度と帰ってこない友人。恋人。家族達。

彼らの命は全て、その目的のためだけに奪われたのだ。

「それに『標的』となる対象は、もうほとんど残ってないからね。そんな四六時中、私が人を襲ってるみたいな言い方するのはやめて欲しい」

「あっそ」

一切の表情を崩さずに、悪びれもせずそう囁く青年に真雪は軽く肩を竦めた。

「でも那由多をやったのはお前だろ」

「ああ。そうだよ」

彼は何でもない事のように頷いた。

「ついでに、陰陽寮で監禁されていた俺を襲ったのもお前だ」

「ああ。そうだよ」

「そして、明に近づく人間を殺していったのもお前」

度重なる三度目の指摘にも、彼はただゆるく微笑んで肯定してみた。

まるで、恥じる事など何一つないというように。

本当に何でもないことのように。

なんで

「そうだよ。よく気づいたね。——その様子だと、あの手紙は読んでくれたのかな」

尋ねてくる伊々美に頷きを返し、真雪はポケットにしまつてあつた紙片を取り出した。

襲われた那由多の横に置かれていた手紙。

「ああ。——てかさお前、なんでこんなもの残してつたんだよ。俺、前に字イ読めないって言つてあつただろ？」

「確かに聞いてたけどね。君が持っていた書物に書かれている文字、大分直線的で分かりづらいけど、あれ一応、日本語だろう？君の書物を私が読めたんだから、君が字を読めない筈がないじゃないか」

まあ、そーなんですけど。

普通の男子高校生は平安仮名文字なんて絶対に読めないぞ。

たまたま実家に古文書があるような家だったからよかったものの。

「まあ実際、本当に字が読めるのか、読めたとしても君自身が来るかは賭けではあつたけどね。」

別に保身を考えるわけではないけど、周囲に気づかれていないならそれに越した事はない」

「越した事はない……か。もともとお前、どっちでもよかったんだろっ？」

「ああ。正直、どうして今まで誰にも気づかれなかったのかが不思議でしょうがない」

「つまりはそれだけでめえがイカれてるって事だろ。異常者の思考なんて、健常者には普通は理解出来ねえんだよ」

あつさり言い放つ。半ば、うんざりしたように。

「つーかそもそも、あんま真剣に誤魔化す気もねえよな、お前の態度って

イマイチ自覚がねえみてえだから一応言っておいてやるけど、お前

のやつてゐる事つて人殺しだぜ？ 犯罪だぜ？ 隠す努力ぐらいしたらどうよ？」

揶揄するような言葉にも、やはり変わらない笑顔で答える。

平素はただ親しみを覚えただけのその表情が、今となつてはただただ疎ましい。

笑みを浮かべる伊々美自身には変わらないのに、実態を知つた今では受ける印象ががらりと変わる。

以前は濁りない清流を思わせたそれは、今では凧いだ静謐な湖面のようだった。

水面が如何に澄んでいようと、水底には何が沈殿しているか知れたものではない。

人肌の温もりを感じさせない笑み。

「――さて。遠野様に報告もせずこうして律儀に一人でやってきてくれたぐらいだ。何か狙いがあるのだろうか？」

「……ああ。アンタにやどーしても、会つて直接聞きたい事があつてな」

「応えよう。誠意をもって」

「なんで那由多を巻き込んだ？」

問いかける声には、我知らず怒りと憤りが含まれていた。

どんな理由を聞かされても納得など出来ない。

それでもこれだけは。

この事だけは、人伝ではなく自分で確かめなければ気が済まなかった。

だって、お前の弟子だったんだろ？

これ以上ないくらい、お前にとつても大切な身内じゃなかったのか。……お前が何でこんな事をしてたのか――なんでこんな真似を始めたのかは大体、想像がつく。俺を襲つた理由も、分からなくないとは言えなくもない。――少なくとも、予想は出来てゐるつもりだし……だから、それはいい。

けど、那由多を襲つたのはいくらなんでも余計だっただろ。どうし

て俺じゃなくてアイツだったんだ！？」

「仕方ないよ、彼は不合格だったんだ」

堪え切れずに激昂するこちらに対し、伊々美は変わらずに穏やかな口調で答えた。

りゆう

「不合格、だあ？」

「ああ。彼女の傍にある資格を持つかどうかの——ね。何せあれほどの存在だ。如何にまだお若いとはいえ、身の周りに置く者にも気を配る必要がある。彼女が自覚を持つまでいい。誰かが傍にいてその選別をしないと」

ああ——なるほど。なるほどね。

「……お前、マジにそんな下らない理由でこんな事をしでかしたのか？」

尋ねる声は、自分でも驚くくらい平坦だった。

ただし、本当に冷静なわけでもない。むしろその逆だった。裡に灼熱のマグマを胎動させる、爆発寸前の怒気を含んだ声音。

だが伊々美はそんな明らかな真雪の怒りを前にしても、まるで気にする様子もなかった。

どころか何の気負いも罪悪感もなく、あくまで平然と首肯する。

「当然だろう？あの存在力。あの強さ。あの才能、あの幼さにしてあの麗しさ。どれをとっても彼女は完璧だ。完璧すぎて涙が出る。

確かに年齢故にか多少、言動に尊大な部分もあるが、それさえも彼女にとっては魅力に変わる。見る者全ての心を捕えて放さない。それほどもでに彼女の存在は絶大だ。少なくともこの私は、彼女に出会ったその瞬間に魅了された。——大袈裟なんかじゃない。まるで笑い話だ。大の大人が、自分より一回り以上年下の子供に本気で一目惚れしたんだから」

さながら詩吟でも唄うかのように。

舞台役者のような滑らかな口舌で彼は続けた。

「実際、初めてその存在を知った時には感動したものだよ。この世に果たしてこんなにも完璧な存在があるものなのか、とね。まあ私との出会いなぞ所詮、彼女にとっては取るに足らない、些細な日常

に過ぎないのだろうけど。それでもあの時の衝撃を忘れる事は出来ない。それは私の人生の中で数少ない価値ある思い出だからね」

暗闇に秘められた大切な宝物を愛でるかのように、彼女について朗々と語る伊々美の態度はどこか誇らしげで、仄暗い熱を帯びていた。

なんで、そんな顔をする。

陶然とした、当然とした表情。

何一つ恥じる事などないような。

人を殺しておきながら、何の後悔もしていないような顔。

揺らぐ事のない信念を持つ者の顔だ。

「そう。出会ったその瞬間から、私は彼女に魅入られた。この感情を愛と呼ぶか恋と呼ぶのかは分からないが、完全に彼女に魅了された。それはもう完膚なきまでに、言葉を選ぶ必要も感じないほどに私は彼女に魅せられたのだよ。だからこそ、許せなかった。許せないと感じた。完璧なる彼女の傍に、浅学非才の凡俗がいる事を」

言葉に反してその顔には怒りもなく。

ただ彼は滔々と語る。

澄んだ声は夜の闇に溶けて、ただ一人の聴衆の耳を過ぎ、陰々と此方に消えていく。

「それを嫉妬というかい？まあ、確かにそうかもしれない。単に私が狭量だった。確かにそうなのかもしれない。だが相応しくないと思ったのは本当だ。彼女の傍あるならば、が並び立つ方もそれなりの資格がなくてはならない。だってそうだろう？たとえ引き立て約にしたって、それなりの格というものがある。龍の横に蛇を並べても見苦しいだけじゃないか。存在価値の差異というものは、あまりにも決定的で明白なんだよ。そんな価値のない凡俗ごときのために彼女の価値が損なわれるなんて事あっていい筈がない。彼女と共にあるのならそれに足る、その才に耐えうる相応しい存在でなければならぬ」

「だから？」

伊々美の長講を遮るように、もはやその口が語る言葉を聞きかねるように、真雪が割り込んだ。

「だから、明の傍にいる人間を片っ端から殺してまわったのか？あいつの傍にいるのに、相応しくないなんて理由で」

「そうだよ」

「陰陽七星に手を出さなかったのは、単に勝てないって理由だけじゃなく、そもそもが試す必要のない相手だから、だったのか」

「元より明媛と同格に唄われているくらいだからね。彼らに関して言うならば、既に証明されている。それこそ、私ごときの出る幕じゃない」

「……狂ってんのか、てめえは」

まるでそれが至極当然であるかのように。

平然とした様子で首肯する伊々美に対し真雪は、唾棄するように、吐き捨てた。

かくにん

「あいつの傍に相応しくない、だあ？んなもんテメーなんぞに言われたくねえんだよ、部外者。それを決めるのは明自身であって、お前じゃねえだろが。赤の他人が調子こいてんじやねえ。何様のつもりだ、このロリコン趣味のストーカー野郎。大体、精霊石の力におんぶだつこしてやがるような頭の悪い人殺しなんぞに、人を試す資格なんざあるかよ図々しい」

「だからだよ」

真雪の糾弾にも伊々美は怯む事なく頷いた。

「たかだが精霊石を借りただけの私程度の凡人にあっさりとやられてしまうような、彼女の足元にも及ばない塵芥に、明媛のお傍にいる資格なんてないだろう？」

「知るか。なんでアイツの事をお前が勝手に決めてんだよ」

「決めてるわけじゃないよ。彼女についての何かを私ごときが決めるだなんて、そんな僭越な事はしない。」

単に、私が望む場所に自分以下の者がいるのが気に食わないだけだ」

「俺はてめエが気に入らねえよ。——ついでに一つ忠告してやるが、お前既に結構飲まれてるぜ」

相手を真っ直ぐに指差しながら、真雪は口の端に獰猛な笑みを浮かべた。

「俺たち、神威能力者にとって、塵とは自由に操れるもの——制御出来て当然のものだ。だからこそ、同じように精霊石を支配出来ると……出来ているのだと思い込んでしまう」

伊々美が僅かに訝しげな表情を浮かべる。何を言いたいのかと問いたいのだろう。

真雪は一つ頷いて続けた。

「だけど、それは大きな間違いだ。——少なくとも、精霊石は神威能力者ってだけで誰にても容易に使いこなせるもんじゃない。質の

いい精霊石は使用者を選別するし、その支配力が強いければ、逆に使用者を飲み込んでしまう。残念だが、お前にはその石は制御仕切れてねえよ。どっかで偶然見つけたんだか、どこからか盗んできたもんなのかは知らねえけど、精霊石の持ち主として、お前は相応しくなかったって事だろ。不合格だったのはためえの方だ——もう、そう長くないぜ。お前が自我を保ってられるのは」

吐き捨てるように言って、内心で激しく舌打ちをする。もっと早く気づければ。あるいは。後からの後悔に意味がないと知りつつも、湧き上がる無念は堪え切れなかった。

「お前がいつから精霊石を使い始めたのかは知らねえが、そこまで完全に石を取り込んでしまった以上、もう分離は不可能だろう。となると、あとは時間の問題だ。精霊化が完了すれば、お前の意識なんざどこにも残らない」

「……随分、知ったような口を利くじゃないか。何故君に、そんな事が分かるんだ？」

「知ってるからだよ。いや……むしろ知らないからと言った方が正しいのかもな。この場合」

例えば勇猛なるバルモア。暁の女神、沙羅。偉大なるモレーン。月の魔女、アイリス。沈黙の賢者、レオナルド・グラディス。

精霊石の支配に成功した異端児として、後の世に名声を残した先人達の中に、伊々美の名前は伝わっていない。

もしもお前がここで、本当に精霊石を御する事に成功していたら、その名を知らない筈がないのに。

たとえ千年先の未来であっても、お前の名が届かない筈がないのに。それでも知らないって事は、起こらなかった未来なんだ。

どんな形であろうと、お前が損なわれることは確定された未来の出来事なんだよ。

「……なるほど。まあ、確かに君の方が正しいのかもね。私だって何も、何の反作用もなくこれだけの力を手に入れられるなんて、そ

んな都合のいいことは考えていなかったさ」

だが仮に、事前にその事を知っていたとしても、やはり彼は同じ道を選んだだろう。

それが明のためになると信じて。同じように、彼女のために自分が失われる事を平氣の平左で選んだだろう。

それを強さと呼ぶのか、あるいは弱さと呼ぶのかは知らないが。

「時間の問題……か。まあ、別にそれもよからうさ。既にこれまでの間に、さにわとしての私の役割はほとんど終わっている。こうして『私』を保っていられるのが、あとどれくらいかは知らないが、あと一人分の審判をするには充分だろう」

言いながら、急速な勢いで伊々美の周囲に塵が集い、凝っていく。あえて口に出すまでもない。こうして向かい合っているだけで、ちりちりと肌が疼く程に好戦的で、攻撃的な氣配。

もはや殺氣を隠そうともしない彼は、それでも口調だけは変わらず穏やかに続けた。

「陰陽寮で明媛に近づきそうな人間は、既にほとんど試し終わった——ただでさえ、こ状況だ。今更、好んで彼女に近づこうという者もない。あとは君だけだ、サネユキ」

こちらを見つめる彼の瞳に、殺意の欠片でも覗けないかと思ったが、生憎とそんな都合のいいスキルは持ち合わせていなかった。

ただそこに浮かぶ、どこか熱に浮かされたような色は、見間違いないがなかった。

「私は君を過去に二回殺そうとし、結果として君はまだ生きている。一度目は明媛のお力を借り、二度目は直接の攻撃というよりは、一種の罠のようなものだったから、多分に運も混じっているけどね……が、たとえ幸運に助けられていたとしても、その実力に関しては大したものだ、と言わざるを得ない。特に塵の練成速度とその錬度は見事だよ。だが、君の力は未だに未知数だ。合格なのか不合格なのか、いまいちはつきりと分らない。曖昧であやふやで明確にならない。——だから、私はこれから君を試そうと思う。君が果たし

て、本当に明媛に仕える者として相応しいのか。それを確認しよう
と思う」

ほんき

真雪は溜息をついた。実を言えば、この展開は半ば分かりきっていた事だった。ここに来る前から。

だが一つ、どうしても伊々美に言いたい事がある。多分きつと、それを言うために自分はここに来た。

「試験の為に、出来ることはただ一つだ。私はこれから君を殺す。死にたくなければ、全力で抗ってみろ」

「お前、他にやることねえのか」

その呟きが――

果たして伊々美の耳に届いたのか、それは結局分からなかった。

分からないまま、ただ己の直感に従って彼はその場を跳び退いた。

一瞬遅れて風切り音と共に、打ち出された拳が眼前を通過していく。かするだけでそのまま致命傷に繋がりそうな一撃を寸前のところで避けながら、真雪は素早く塵を練った。

不安定な姿勢から、速度を優先させた略式の練成。参式――無獄。

（全力でやれ、か。んなもん、言われるまでもねえ）

瞬間で練成された、以前の緻密さなど欠片もない大雑把で粗雑な――だが比較にならない程の膨大な塵が、激しい炎熱を撒き散らしながら、擦れ違い様に解き放たれる。

略式でありながら、恐ろしい熱量。発生した火炎によって、あたりの温度が一瞬で数百度にまで跳ね上がり、膨張した空気が渦を巻く。深紅の光球と共に、激しい轟音を立てながら高熱と衝撃波の渦が、遙か彼方まで続く焦土を残して自分の横を過ぎていくのを。絶句しながら、呆氣に取られて見送っていく。

その間抜けな伊々美の表情に、真雪は仄かな満足を感じていた。

「あーあ、外しちゃったか」

「なっ……!？」

「なあにびびった面してんだよ。お前が言っただけ、遠慮すんな

ってよ」

熱の余韻を攪拌するように、今しがた塵を放った右手をひらひらと振ってみせる。

無論、そんな事では温度は下がりはいないが。

汗が滲むほどに急激に上昇した温度の中で、真雪は笑った。あくまで自然に。

「お前さっき俺の事、練成が速いとか錬度がどーとか褒めてくれたけどよ。勘違いしてるみてえだから自己申告しといてやるが、俺って実は技巧タイプっつーより、バリツバリのパワー型だぜ」

そもそも俺、微調整とかは苦手なんだよなあ、と。嘯く真雪を戦いた眼差しで見つめている。

「……化け物」

「その台詞、昔にさんざ聞き飽きてんだけどよ。さすがに好きこのんで自分から人間止めちまうような奴に言われると、それなりに傷つくわ」

「いや、それでも……いくらなんでもあり得ない！例え力を隠していたにしろ、以前見た時とはあまりに格段の差がありすぎる——そうか！」

伊々美の瞳が、不意に何かに気づいたように見開かれた。

その視線がじつと真雪を——正確には、ある一点だけを見つめている。

赤いピアスの外された、彼の耳元。

「君が身につけていたあの耳飾り……あれはひょっとして精霊石か。まさか君はそれを使ってわざと自分の力を封印していた……？」

「ご名答。俺って威力には定評があるんだが生憎、制御の方はイマ3くらいでな。普段は精霊石を使って、常時めえの力を押さえ込んだよ。お前とは真逆の使い方だけだな。こういう使い方もあるってこと」

苦笑を浮かべ、人差し指を相手に向けると指先だけで軽く手招きをする。挑発するように。

「ここだったら周りの被害をいちいち気にする必要もねえからな、お言葉に甘えて遠慮なくやらせてもらうぜ。とはいえ俺も、全力でやるのは久しぶりなんで、あんまうまく手加減出来る自信はねえけどな」

差

本来ならば、それは祖母から禁止されている筈だった。——永遠に『磨けない原石なんて、ただの石ころだ。自分の才能も使いこなせないようなら、お前は一生その力を使うな』

潜在能力だけで見るなら、他の誰にも負けていない。月日にも。白雪にも。

だが素養だけはあっても、それを使いこなす器がない。

白雪のようなセンスも、月日のような老練さも、自分にはない。

だからコントロールが出来ない分の力を封印した。

使用する塵は自分で完全に制御出来る範囲のみに絞り、それ以上の塵を使えないように。

精霊石の力を使って自分の塵を相殺していた。

『さもないやお前はいずれ、必ず後悔を背負う事になる。下手したら死ぬか——最悪、誰かを殺す事になるかもしれない』

——クソ喰らえだ。

脳裏で囁く幻影の祖母に毒づいて、彼は伊々美を見据えた。

たとえ誰に止められようとこんな力。

今、必要な時に使えねえってんなら、一体何のためにあるんだよ。

「てめえの事情は知ったこっちゃねえが——明と那由多にしてくれた分の借りは返させて貰うぜ！」

伊々美はもうそれ以上何も言おうとしなかった。即座に行動に移る。真雪もまた。

伊々美が無造作に突き出した右腕に、絡みつくように触手のような蔦が伸びる。

常識にある間合いを遥かに無視して迫り来る脅威を、軽く首を横にずらし最小限の動きでかわす。

が、胸中には恐怖とは違う驚きが広がっていた。

（腕が植物になって伸びるって……もう完っ全に人間やめてやがる

な、アイツ)

これでは目測の間合いは意味がない

改めて知るその事実より、それを受け入れてしまった相手の覚悟にこそ戦慄を覚える。

(けどそれでこそ、こっちも容赦なくいけるってもんだ)

攻撃のタイプからして伊々美の能力は物質操作——人間やめてる相手にこのジャンル区分が果たして意味があるかは謎だが——対象は植物だ。

(となると、このフィールドは俺的に最悪だよな)

周囲全てを植物に囲まれている。

だからこそ、相手もこの場所を選んだのだろうが。

状況としては地雷原に裸で飛び込んだようなものだ。

と、眼前に突然、太さ数十センチほどもある樹木が地面から突き出してくるのを、今更驚く事もなく仰け反ってかわす。

否、眼前だけではない。一瞬で周囲全てを意思のある枝に囲まれていた。まるで檻のように。

その枝が瞬時に膨張し、その質量に押しつぶされる。

(——ざけんなっ!!)

避ける暇はない。その隙間もない。

真雪は即座に塵を練ると己に許される最速の速さで発動させた。

一式、羅炎。

耳を劈くような爆音と共に。

今にも彼を圧殺せんと迫ってきた触手が、内側から弾けるように四散した。

悪質な腫瘍のように膨れ上がった触手の中から、まるきり無傷の真雪が姿を現す。

が、彼の攻撃はそこで留まらなかった。

密閉空間で放たれた衝撃波はそれだけでは飽き足らず、熱と炎を撒き散らしながら真っ直ぐに伊々美を目指す。

しかし標的の元に届くより先に、伊々美の腕に絡みついた触手が突如、爆発的な成長を遂げた。

何本もの触手が互いに絡まりあい、束になって森の障壁を作り出す。踊る火炎が木の壁を覆い尽くすようになってるが、衝撃そのものは防ぎきれたらしい。

代償として、一瞬で粉々になった壁の隙間から引きつるような伊々美の顔が覗いた。

「つくづく……人間とは思えないな、君は」

「テメエにだけは言われたくねえよ！」

心の底から本気で叫ぶ。掛値なく本心だった。

片や、精霊石を取り込んで人間と放棄した者と、片や人知を超えたその能力を、精霊石を使って無理やり封じ込めていた者。

石の精度にもよるが、単純に考えて地力の部分では五分五分。勝負は互角に見えたが――

（いや、違うか）

真雪は胸中で密かにそれを認めた。

仮に地力の部分では本当に互角だったにしても、相手には地の利がある。加えて、真雪はまだ己に慣れていない。

例えばそれが自身の全力だったとしても、どれほど強力であつたにしても、使いこなせなければ意味がない。

元より、己にとってアンコントロールな力だからこそ封印されていたのだ。それを開放したからといって、一朝一夕に使いこなせるものではない。

例えるならそれは、地球から突然月に放り出されたようなものだ。重力は確かに十分の一になるかもしれないが、そうかといって突然馴染めるものではない。

（なんせ、羅炎でこの威力じゃな……月日があそこまで五月蠅く言うわけだぜ）

先ほど放った参式は伊々美に直撃する事なく逸れてしまったが（一応、当てるつもりだった）その破壊後はかなり後方――彼らのいる

地点から見れば、地平の彼方まで続いている。

この延長線上に人家がない事を切に願うばかりだ。しかも略式でこれだ。

（この分だと、使えて参式までだな。それでもかなりギリだけど）果たして加減ぬきでやったら一体どれほどの威力になってしまうのか。

それを思うと、我ながら自賛ではなく素直に背筋がぞつとする。どう考えても自分には扱いかねる力だ。

つまるところ、先ほどの伊々美の軽口も結局はそういう事だ。

威力だけならばそれはさしたる事ではない——否、脅威は脅威だがこのぐらいのレベルなら使える人間は皆無ではない。

問題はそれだけの塵を扱いながら、まったく疲弊していない真雪の容量のでかさである。

（俺に扱いきれる力じゃねえって事か……）

正直、参式ですら御しきれんかは自信がない。

だがここならば、最悪制御に失敗しても死ぬのは自分と相手だけだ。被害は最小に抑えられる。

（けどまずは——距離を稼ぐ）

いくら強大な威力を使えようと、当てられなければ意味がない。

となれば、突破口は唯一つ。

無論、相手もその事に気づいている。間断をおかずに、突進をかけてきた。

きみは

腕に絡みついた触手の先が鋭く尖り、刀剣のような形になっている。切れ味まで本物のそれと等しいのか試す気にはならなかった。

そもそも、接近戦では圧倒的にこちらの分が悪い。

迷わずにその場をさがろうとして——動きを止める。

「——!？」

止めるつもりはなかった。正確には止められた。見ると、地中から伸びた蔓ががっしりと万遍なく足首まで絡みついている。引き千切るうにも、見た目の細さとは裏腹に万力のような強さだった。

不意をつかれて棒立ちになったその隙に、手に、肩に、首に、腹に、次々と蔦が巻きついていく。

舌打ちをする暇もない。四肢を拘束され完全に身動きが取れなくなる。その真雪を目掛け、伊々美の刃が振るわれる。

回避は不可能。塵で撃退するしかない。

確実に自死をもたらすであろう致死の刃を前に、ただ漫然と立ち尽くすというのは、実際遙かに忍耐を必要とした。——が、甲斐あつてかギリギリのところまで間に合った。

右腕を突き出し、意識を絞る。

もはや考えるまでもなく反射が身についた、約束された動作。

——爆ぜろ。

彼を包む炎——彼以外の全てを焼き尽くす神炎が、枷となる蔦を一瞬で焼ききった。

更には伊々美の触手も焼き尽くそうとするが、彼は舌打ちをしたただけで、焼け焦げた部分を切り捨てる。

「なんともまあ……それにしても、呆れるほど力任せだな君は。もう少し洗練された使い方は出来ないのか？」

「うるせえ。出来りややってるよ」

出来の悪い生徒の欠点を指摘する教師のような口調の伊々美に、素

つ気無く返す。

どこか聞き覚えのある喋り方は、彼が那由多に言い聞かせる時と全く同じものだった。

気づきたくもない事実に気づき苛立つ。

「なるほど……少なくとも、制御が不得手というのは嘘じゃなさそうだね。さつきから見えていても実際、練成にかなり無駄が多い。まあ、それを補って尚余りある力量があるから、なんとか術として成り立ってるというところかな」

「余計なお世話だ」

言わずもがなの事実を指摘されて毒づく。

「けどその才能だけを見るなら文句ない。まさしく一流だ。ところでサネユキ。ものは相談なんだけど、もう止めにしないか？」

「はあ？」

突然の申し出に思わず顔を顰める。

一瞬、新手的ギャグかと思ったが、相手は決して冗談で言っているわけでもなさそうだった。

「何言ってるんだお前。アホか」

「真面目だよ。言っただろう。もともと私は選別を行う為にこんな事をしてるんであって、別に殺人が趣味という訳じゃない。君のように、一度その資格が証明された相手とはわざわざ戦う必要はないんだ」

冗談を言っているふうでもなく、至極真面目そうな口調だった。真雪は怒りよりもむしろ呆れかえって言葉を失う。

「どうやら互いの力は互角のようだし、このまま続けてもどちらも無事に済まないだろう。別に今更死を恐れるわけじゃないが、どうせ死ぬならこの命を彼女の為に使いたい。少なくとも、何の意味もないところで無駄に消費したくはないんだ。——それに、必要もないのに君を殺すのも忍びない。一度はこの手で助けた命だ」

「……アンタがそれを言うべきなのは、俺に対してじゃないだろう」唇を噛み締めて呻く。脳裏に浮かんだのは、この時代の数少ない二

人の知己だった。

凜とした苛烈な瞳と、まだ子供らしさを失わない、年相応の無垢な瞳。

明と那由多。二人の少年少女達。

ふざけんな。

てめえの物差しなんかで勝手に人の生き死にを決めんなよ。

「それに、もうそんな事は関係ねえ。今はお前が俺をやるうとして
んじやなく、俺がお前をやると決めたんだよ」

「そうか」

伊々美はあつさりと頷いた。

「和議は決裂か。残念だ。——だったらサネユキ。最後に一つだけ
教えてくれないか？」

「……最後？」

繰り返したその言葉に、伊々美は薄く笑ってみせた。

「この先を続けるなら、たちえどっちが勝つにしろ、残る他方は生き残れないだろう。そういう意味でなら、最後というのもあながち冗談ではないと思うけどね」

「様は冥途の土産ってわけか。いいぜ？なんだよ」

「君は一体何者なんだ？」

おれは

その問いかけは。

特に鋭くもなく厳しくもなく、しかし今まで交わした言葉の中でもっとも真摯なものに聞こえた。

「君は不思議な人間だ。それほどの力、それほどの才能を持ちながら、誰も君の素性を知らない。陰陽師の力とはつまり、連なる血の系譜だ。力ある者、才ある者は必ず古き名のある血筋に縁がある。その唯一の例外は明媛だけだった。だが君は、彼女と同じく突然現れ、そして誰もその存在を知らない。それほどの力を持った君を、この日の本にいたる陰陽師達が誰一人知らないなんて、そんな事がある筈がないのに。まるで——」

いる筈のない人間。

誰も知らない存在。

それはまるで。

まるで——？

「まるで君は、どこか別の場所からこの世界に突然迷い込んだみたいだ」

「……………」

「だから、お願いだから教えてくれ。君は何者で——一体どこからやってきたんだ？」

どこからやってきて。

何のためにここににいるかなんて、そんなの。

俺が一番知りてえんだよ。

「……………俺は——××××××」

その囁きが、彼の耳に届いたか。

あるいはもっと単純に、聞こえたとしても信じるのか。それは分からない。

他人の気持ちなんてものは元々酷く曖昧であやふやで、相手がどう

感じているのかなんて、こちらからはどうやったって一切観測できない。

あるいは世界と同じくらいに不確かだ。

ただ伊々美は黙って頷いてみせた。恐らくはきつと、彼には何かが伝わったのだろう。ならばそれだけで充分だ。

五指を弾く。指先それぞれに灯された炎が互いに誘爆を引き起こし、迫り来る触手を焼き払った。

そしてその爆風に乗って真雪は後方へ飛んだ。

空中で回転し、風圧から得た勢いを相殺しながら着地。と、同時に走り出す。

その背後で、しなる触手がたった今まで自分がいた空間を切り裂くのが見えたが。

真雪は構わずに全力で、その場から離脱した。

回避のための逃亡ではない。

敵に背を向けて走る事への恐怖がないわけでもなかったが、それよりも優先順位が勝った。

現時点で取れる唯一の勝利条件。即ち――

遠距離からの無差別大規模。

的にうまく当てられないのなら、投げる球をでかくすればいい。

身体能力でかわされてしまうなら、逃げ場がないほど広範囲に網を張ればいい。

戦術もなくでもない、正真正銘力任せの荒業だが、今の自分にならずとも可能な筈だった。

それだけの炎術を使って、果たして自分が生き残れるかは謎ではあったが。

（んなこたあ、生き残った後にでも考える！）

逃げている間にもずっと、意識の端で築いていた構成を全力で解き放つ。己に扱いきれない分も含めて、全て。

「――っ！！」

身体を貫く衝撃に――意識のたがを吹き飛ばされそうになりながら、

それでも真雪が感じていたのは歓喜だった。

爽快な開放感と、それを上回る圧倒的な恍惚。

異端児にとって、塵とは須らく制御されているべきものだ。それをまともな制御も出来ない状態で噴出するなど、凡そ正気の沙汰ではない。

が、真雪はあえてその禁忌を犯した。

彼の身体を包み込むようにして、火柱があがる。

弾けるように広がった炎は、世界を深紅に塗りつぶし、激震に大地を震わせた。

視界を焼く光。衝撃が鼓膜を打ち据えるが何も見えない。何も聞けない。圧倒的な。ただただ圧倒的な猛威に空気すらもが焼かれ、その熱が全てを溶かし、そして。そして――

全てが収まった時、彼はたった一人で倒れていた。

意図しての事ではない。立っているのも困難な程に消耗していたのだ。

貪るように呼吸を繰り返し、酸素を求めて喘ぐがなかなか息は整わない。極度に熱された空気はもはやほとんど酸素を含んでおらず、吸い込む度に肺が焼けそうになる。

それでも、全身に負った火傷に比べれば格段にマシではあるが。

皮膚のあちこちが焼け爛れ、特に腕に到っては――正直、あまり見たくもないが――ほぼ炭化し骨まで覗いている。

が、ショックで痛覚が麻痺したのか、痛みがそれほどでもなかった

――まあ、恐らくは幸運の類なのだろう。

まともな感覚が残っていれば、悶絶程度じゃ済まない怪我だ。

いずれにしろ。生きている限り塵を使えば怪我などは治せる。

なるべく自分で治せばいいな、と真雪は思った。あまりに酷い場合はプロに任せた方が無難だが、出来れば時貴の世話にはなりたくない。奴の本性を知ってからには特に。

それでもいつまでも地面の上に倒れているわけにもいかず、なんとか身体を起こす。

そんな動作一つにさえもが酷く億劫だったが、周囲は激変していた。見渡す限りの豊かな緑だった森が、もはや見る影もない。

真雪を中心として円周状に広がるその破壊の爪あとは、広大な森を焦土と化していた。

地面の手触りに違和感を感じて見下ろすと、溶解した大地が、煙りながら炎の渦を巻いている。

伊々美の姿は見当たらない。あの火力だ。まともに喰らえば骨も残らないだろう。つまり――

「……うまくいった……のか？」

自分でも半信半疑になりながら、自信なげに呟いてなんとかふら立ち上がる。が。

「――っ!？」

突如、身体に衝撃を感じて、真雪は再び地面に沈んだ。麻痺が続いているためか、痛みはない。が、身体が何故か自由に動ない。

（何故かって……なんでだ？）

混乱した頭で自問するが、痛覚がなくとも、鼻腔をくすぐる血の臭いを嗅げば理由は明白だった。

順番に身体を動かし、ほどなく問題部分を発見する。左腕。

見ると、地中から伸びた蔦に手のひらが貫かれていた。ついでに、行きがけの駄賃といわんばかりに肘までへし折れている。

ここまでくれば、何が起こったかなどもはや考えるまでもない。

そうしている間に、絶え間なく地面から生えてくる木々が、右腕を太股を、残った四肢それぞれを、縫いとめるように貫いていく。

「がっ……ぐっ……」

悲鳴を上げる事も出来ない。

痛みを感じないのだから。

ただ、自力では身体のバランスを保てなくなり、真雪は呻き声をあげた。

彼女は

「際どかったな——あと一瞬遅れてれば、あやうく焼き殺されるところだった」

予想していなかったといえは嘘になる——が、声の聞こえていた方向に関しては全くの予想外だった。地中から響く声は、くぐもって聞き取りづらい。

だからというわけでもないだろうが、探すまでもなく声の主はすぐに姿を現した。

既に冷えて硝子のように固まった地面から、ひときわ大きな木の根と共に、中から人影がせり出してくる。

「だけどもあ、勝負は俺の勝ちだな。サネユキ」

「……みたいだな。伊々美」

男の姿を認めて、真雪は素直に同意した。

「ったく、なんつー場所に逃げ込んだよ。モグラかお前は」

毒づく声にも力がない。事実、余力はほとんど残っていなかった。

伊々美にも、それは分かっているのだろう。完全に樹木の中から抜け出すと、特に焦る様子もなくゆっくりとこちらに近づいてくる。

「地上に逃げ場がなかったからな。仕方ないさ。それにしても改めて、つくづく怪物だな君は」

一方でこちらはといえば、逃げる事はおろか、立ち上がる事すら出来そうにない。

骨折で負傷した上に、手足を拘束され、相手を睨みつけるのが精一杯だった。

「だが、こうして君にも勝った以上、まだ暫くこれが続けなきゃいけない……明媛の為に」

ここではないどこかを見据えるような眼差しで虚空を眺め、ぼんやりと独りごちる。

特に真雪に対して言ったわけでもないのだろう——どちらかという

とそれは、自身に言い聞かせているようだった。

どこか正気を欠いたその瞳には、代わりにもっと明確な狂気の欠片が見えた気がした。

（――既に……正気を失いかけてんのか？）

思った以上に進行は早かったのかもしれない。同時にざわりと――話しの間も増殖を続けていた触手が、一斉にざわめきを始める。

（俺は……ここで死ぬのか？）

なす術もなくただ迫る触手を見上げ、この期に及んでも危機感なくそんな事を思う。

あるいは。もしかしたら。

（もしもこのままここで死んだら……ひょっとして俺は、現代に戻れるのか？）

腕が動かない。足が動かない。

脳が命令を下しても、大量に失血した身体は思うように動かなかった。

動けないのだから、相手の攻撃を避けることも出来ない。

迫り来る触手を一番鋭い形で――つまりは正面から見据えて。

次の瞬間、真雪の視界は赤に塗り潰された。

左上腕部。鎖骨。右大腿骨。胸部。腹部。

腕に胸に腹に足に。次々と次々と、合計で十六本の触手が肉を貫き、骨を砕き、身体に突き刺さっていくのを、真雪はこれ以上なくはっきりと認識していた。

「――え？」

それぞれの傷が間違いなく致命傷の上、それが十六箇所である。

本来ならば、そんな事は有り得ない。

いくら痛覚が麻痺しているからといって、それまでの傷とあわせ、即死していてもおかしくない程の怪我なのだ。だがしかし。貰かれたのが自分ではないのなら。

例え身動きとれない状況であろうと、その破壊が目の前で行われたものだとしたら。

「……………え？」

彼の目の前に立ちふさがった、見覚えのある赤い衣——視界を塞いだその赤に同色の液体がじわりと滲んで広がっていく。

小柄な矮躯を精一杯に伸ばし。

その小さな背中の後ろに真雪を守るようにして。

明媛が両腕を広げて立っていた。

彼を庇って、串刺しになった姿で。

「……………え？」

馬鹿みたいにその母音だけを繰り返し、呆然と呟く。

「あかる？」

眼前の光景が理解出来ない。

否、理解は出来たが、脳がその事実を拒否した。意味が分からない

……

緩慢な仕草で明がこちらを振り返る。

全身を貫かれ、致命傷を負った筈の少女は、それでも笑みを浮かべていた。

どこかふてぶてしい、だけど不思議と見る者を安堵させるようなむずがる子供をあやすような笑み。

そして彼女は。

「よお……………息災か、サネユキ」

にやりと口の端を持ち上げ、そのままぐらりと身体が傾ぐ。枯れ木のように呆気なく。

赤い衣をふわりと翻し、力を失った少女の身体は真雪の方に向かって、そのままあっさりと仰向けに倒れた。

艶やかな彼女の黒髪がさらさらと、違いなくらい優雅に広がる。

真雪は。

しゃにむに動いて、倒れてくるその身体をなんとか受け止めた。

彼自身、既に満身創痍と言っても過言ではないくらいの傷を負っていたが、そんな事に構ってられなかった。

動きと共に触手が肉に食い込み、血が溢れ出る。

それを無視して、明の真下に自分の身体を潜り込ませ——受け止めるというよりは、彼女を支えるクッションになるように。

全身を使って、まるで抱きとめるように、明の身体を受け止めた。

「おまつ……なん——!？」

驚愕に言葉がつかえるが、彼女にはそれでも通じたらしい。真雪の胸の上に仰向けに重なった、苦しげな吐息の中で、

「……馬鹿か、いまし。罔に使う人間に単独行動をさせるわけがあるか。見張りくらい、つけとくさ」

彫刻めいた、少女の美貌。

淡雪のごとき白い肌は血の気を失い、その事がより一層、彼女の非人間的な美しさを際出せている。

抱きしめるその身体の軽さに、ぞつとしながら真雪は齒噛みした。

「だからってなんでこんなマネしてんだよ!？ 見張りつけてんなら、わざわざお前が来なくても——」

「言った筈だぞ。言った筈だ」

声を荒げる真雪を遮って。

瀕死の少女の身体にはもはやどんな力も残されていないと思ったが、それでもこちらを見つめる目には、普段と変わらぬ鋭利な強さがあった。

「いましに何かあった時には、わたしが助けにいつてやる。」と
そして彼女は。

ゆっくりと、億劫そうに顔をあげ、視界のぎりぎり伊々美の姿を

捕らえると、

「……まったく。いい加減にしろよ、いまし」

愚痴るようにそれだけを呟き、そこでそのまま力尽きた。

長い睫に縁取られた黒い瞳が、ゆっくりと閉ざされる。

蕾のごとき唇が、何かを伝えるように微かに震え——止まった。

じゃあな（前書き）

皆さま、ご存じかと思いますが、本日なろう様のサーバーがパンクしていたらしく、朝からログイン出来ませんでした。
更新遅れてすいません。

じゃあな

「あああああああああああああああつ！！」

絶叫があがった。

その声が誰のものかなど、考えるまでもない。

伊々美のあげる悲鳴は、たとえ事情を知らない者が聞いたとしても、思わず耳を塞ぎたくなる程、悲痛さに満ちていた。

恐怖に血走った目はこれ以上なく見開かれ、恐怖か、畏怖か、あるいはもつと複雑な——単純な——何かによって、瘡にかかったように、全身ががくがくと震えている。

血の気の失せた顔面は、蒼白を通り越して土気色になり、そこにはあからさまな悲壮が張り付いていた。

「あああああああああああああああつ！！」

伊々美が泣き叫ぶ。

見得も恥も外聞も何もなく。

ただ感情のままに、声の無き絶叫が響き渡る。

耳を劈くようなその絶叫にも、明はもう何の反応も示さない。

髪の一筋さえも揺らす事なく、彼女はまるで永遠のように静止していた。

「あああああああああああああつ——！！」

彼の慟哭に呼応して、あらゆる地面から巨大な木々が次々に『噴出』してくる。

無作為に伸びる大木の間を、更に細分化された細い木々が埋め尽くし、互いに音を立てて絡まりながら増殖していく様は、もはや何の意図も映しておらず、伊々美が完全に錯乱しているのがはっきりと分かった。

恐怖と畏怖に戦く彼の瞳には、もう何も映っていない……

周囲を取り巻く空隙が狭まり、増殖する森が彼らを飲み込むその寸前で。

真雪の炎が、自身に絡みつく蔦ごと木の壁を焼き尽くした。

大した威力があるわけでもないが、それでもほんの一瞬だけ、伊々美と真雪達の間に一本の道が出来る。

と、同時に真雪は全力で駆け出した。既に余力はほとんど残っていなかったが、それでも自分がこの場で何をすべきなのか、はつきりと分かっていた

伊々美までの距離はほんの僅かなものだったが、それでも恐ろしく長く感じた——まともに阻まれれば、近づく事も出来なかっただろう。

だが、伊々美の瞳は真雪を捉えていなかった。

狂乱した彼はただ、横たわる明だけを見つめていた。

そのまま全速で駆け寄り、ぎりぎりまで肉薄する。

手を伸ばせば触れ合えるような、そんな距離。そして。

「——じゃあな。伊々美」

小さく呟き、そして。

膨れ上がった炎が彼ら二人を包み込み——

空を紅蓮に染め上げた。

葬儀

> i 3 4 0 8 0 — 3 9 2 6 <

逢いみでの

後の心に

比ぶれば

葬儀はしめやかに行われた。

塵災害にみまわれた者の中には、遺体さえまともに残らぬ事もある。伊々美の死体もまたその一つだった。焼け滓のような遺体はもうほとんど人型をなしていなかったが、それでも他の人々と同様に、犠牲者として弔いの参列に加えて貰えた。その事に、真雪はただ感謝した。

「礼を言われるほどの事でもないがな」
頭をさげる真雪に、遠野はどうという事もさそうな口調でそう言った。恩にきせる事もなく。

犠牲者の数が多かった為、楔の意味も兼ねて合同の？を行う事になった。

なんで今までやらなかったのか、と聞いたら災害に終焉の兆しが無かったため、機を掴めなかったらしい。

それが今回、無事鎮禍されたので、ようやくの運びとなったとの事だった。

送られる人数が多いため、参加は特に制限もなく自由なものだった。特に、今回の鎮禍の立役者である真雪には、参加を呼びかけてくれる声もあったが、さほど知り合いも多くなり、平安時代の冠婚葬祭のマナーなど知りもしない真雪は、空気を読み謹んで出席を辞退した。

誰にどんな説明がなされたのかは知らないが、いつの間にか真雪は、今回の鎮禍の功労者となっていた。

まさか真相を言いふらしてまわるわけもないので、恐らくは遠野あたりが適当に周りを言いくるめたのだろう。

実際には当たらずとも遠からずといった所なのだが、おかげで陰陽寮に居座れるとなれば単純にありがたかった。とはいえ、最初はかなり気まずかったが、まあ人の噂も七十五日だ。

まさか今更、再び明の屋敷に行くわけにもいかないし。

葬儀には参加しなかったものの、彼なりに弔意だけは示したく思い、あたりを探し回って見つけてき白い花を捧げた。（花の咲いている場所が分からなかったので、嵐山まで行って摘んできた。異端児の身体能力をもつてすれば、さほど困難な事ではない）

果たしてそれが、礼に適った事なのかは分からなかったが。

全ての事情を説明した後で、野草の花束を渡す真雪に、遠野は柔らかに微笑んだ。

母が子に向けるような慈愛の色宿る眼差しは、不思議と彼女に相應しく、以前見た嫣然たる笑みよりよほど魅力的だった。

体調も既に問題ない。

一時は命まで危ぶまれる程の重傷だったが――例によって、自力で治せる怪我也治せない怪我也全部まとめて、治療は時貴がやってくれた（頼んではいないが）全身からあからさまな狂喜の波動を漲らせた彼に、治療を任せるのは正直、かなり不安だったが（素直に心底嫌だったが）選べるような状況でもないので、妥協した。

ただ不思議な事に、どんな治療を施されたのかは今を持ってさっぱり分からないのだが（脳が再生を拒絶するぐらいの術式を受けたらしいという事には、気づかなかった事にした）まあ、おおむね問題ない。

花を摘みに行ったのも、半分はリハビリのつもりだったのだが、回復は思った以上に順調なようだ。

時折、腕に痺れるような違和感があるが――骨まで炭化した事を思えば、治った事自体が奇跡だろう。

そんなわけで真雪は一人、まるで仲間はずれのように陰陽寮の屋根

の上に寝そべりながら、眼下に追悼の人々の群れを眺めていた。見上げる空はただ遠く、太陽はもっとも高い位置からやや角度をずらしている。

たとえいつの時代であっても、空だけは変わらない。世界のどこから見ても同じ空。

時が流れ、どんなに文明が進もうとも、決して触れることの出来ない永遠の領域――

「シケた面してんな」

突然話しかけられて――真雪は無感動に驚きながら、そちらに目を向けた。

矛盾があるように聞こえるが、別に嘘ではない。

理性が驚いていようと、感情が波立たなければ心は動かない。

そして実のところ、その姿を見る前から気づいていたという事もある。ちらりと視線だけを向ける真雪に、

「よお。息災か？サネユキ」

言って、屋根の端からひょっこりと顔を出していた明媛は、にっと笑みを浮かべた。

私を助けた事だ

小さな身体からは、むせ返るほど濃密な薬草の匂いがする。

先ほど、目にするより前に彼女の存在に気づいたのも、実はこの匂いが原因だった。

小さくても女相手に匂いで気づいたなどと言ったら、ど突き倒されそうな気がしたため、あえて口にはしないが。

どこまでも赤い深紅の着物。

それと対照的な白い布が顔といわず身体といわず、傷だらけの全身をくまなく覆っており、着物とのコントラストを描いている。長い黒髪だけが、変わらずに艶やかで美しかった。

「当代きつての英雄殿が、こんなところで何してんだよ？ いまし、今回の祭の主役だろ」

「葬式だろ。祭りじゃねえだろ」

「似たようなもんだろ。凶事も善事も一種の祭りことには違いないさ」

軽い口調で不謹慎な事をぬかしながら、どっころしよと、やけに年寄りじみた掛け声などあげて屋根の上にあがり、真雪の横にちよこんと腰かける。

動きそのものは軽快だが、やはり多少の痛みがあるらしく、普段に比べてなんとなく大人しい。

「まーだ治さねえのかお前。その怪我。さつさと観念して時貴のところにやって来いよ」

「うるせえ。いましには関係ねえだろ」
口を尖らせたまま、憮然として呟く。

例によって時貴を毛嫌いしているらしいこの少女は、彼の塵による治癒を拒んでいるため、未だに傷だらけだった。

なまじ明自身が秀麗な顔をしているだけに、あちこちに残る無数の傷跡が酷く痛々しい。

それだけでなく、年端のいかぬ子供が傷だらけの様子を見るのは、あまり気分がいいものではない。

「お前な、なんぼなんでも命かかってる状態でまで、好き嫌いごときで治療拒否とかしてんなよ。んな事ばっかしてると、いつか本気で手遅れな事態になるぞ」

「だったらいましは時貴の治療を自分から受けたいと思うか？」
真雪は黙って。

瞳を閉じて、自分の受けた彼の治療方法を思い出そうとし、思い出せない事を確認し、最後に一つ息を吐いた。

「まあ、確かに進んで受けたいものでもないかもしれんが」

「進んでというか、勧められても絶対に受けたくない。以前、奴が治療の一環だといって施しやがった術によって、私のこの白磁のとき美しい肌が、何故か十日間ほど黒と赤紫の斑に変色した事を、私は決して忘れない」

なにやらかしてやがるんだ、あいつ。

「……つくづく思うんだが、なんであいつが治療担当なんだ？他に人材がいねえのか、ここ」

「そんなの、腕がいいからに決まっているだろう。如何に人格に問題があるうと、実力があれば大抵は許されるのが陰陽師だ」

「うーん。合理的なような、そうでないような……」

「そもそも、人格を問題視するなら、私や遠野がこの組織内で重要な地位につける筈もなからう」

「ああ、一応自覚はあったんだ」

改善に活かされない自覚に、多少の残念さを感じて呻くが、少女は全く聞いたそぶりも見せなかった。

「つつても、痛みを抱えて我慢するのも馬鹿げた話だと思うけどな、実際。女なんだから見た目は大事にしるよ」

「それは性差別か？」

「なんでその方向になる」

この時代にそんな概念があつてたまるか。

「まあ、確かに私の、神に愛されたとしかい言えない完璧なる美貌に傷がつくのは、この世界そのものにとっての損失としか言いようがないがな……」

やけに真面目くさった顔で、もつともらしく頷く。真面目くさった顔で、心底真面目に言っているのだから始末に悪い。

「とはいえ、私ほどの美形ともなると、こんな痛ましい傷ですら、その美を彩る装飾へと変えてしまうので、余計な心配は無用だ」

「……………」

「ま、今回は命に関する怪我は父上に治して頂けたからな。塵が回復したら、残りは自分で治すさ」

そういや、いつぞやもこんな会話をしたなあ、などと思いながら、つらつらと続く明の自分への賛辞を適当に聞き流す。

以前から気づいていたが、やはり彼女は、自分以外の事は基本どうでもいいらしい。

まあ、自己中だからなあこいつ。

まったく意外性もない結論に納得し、賛辞の終了を待つのも面倒なので、こちらから話を向ける。

「つーか、さらつと聞き流したけど、英雄って何の事だ？」

「知らないのか？今回の塵災害はいましが鎮禍したようなもんだろ。あの異邦人は英雄だと、陰陽師の間じゃもっぱらの評判だぜ。

もともと、被害者が多かった分、過大評価になっているくらいがあるけどな」

「あつそ」

賛辞なのかけなしてるのか、微妙にわかり難い少女の言葉に、あえて反論もせず真雪はは起き上がった。

隣に並ぶ小さな顔を見て、呻く。

「立役者ってんならお互い様だろ。お前こそ、こんな場所をうろついてていいのかよ？やる事あんじゃねえの？」

「いや、特にない。雑用などしかるべき人間に任せとけばいいしな」
「いや、そうじゃなくて」

歎息まじりに真雪は、完全に身体の向きを変えて正面から少女に向き直った。

余計なお世話かもしれないが、告げる。

「ちゃんと送り出してやらなくていいのだったってんだ。俺は。――知り合いだったんだろ。お前の」

「……葬送は既に済ませた。今更、こんな形だけのままごとに付き合う気はないさ」

特に感情のない声で呟きながら、彼女は軽く肩をすくめた。眼下に鉛色の群れを見つめ、こちらに視線を移す。「そんな事より先に、一つやり忘れていた事に気づいてな」

「やり忘れてた事？」

「ああ。いましに礼を言っていなかった」
「礼？」

質問のループに嵌って、問い返す。

「ああ。いましへの過大評価はともかくとして、少なくとも一つは、価値のある仕事を成し遂げていた事を思い出したのでな」

「……？なんだよそれ？」

意味が分からない。嫌味でもくるのかと身構えていると、彼女は至極真面目な顔で、

「私を助けた事だ」

唐突な言葉に、思わず絶句する。

宣言通りに頭を下げようとする明に、真雪はむしろ慌てて手を振った。

「やめろって。そういう事なら頭さげる必要はねえよ。つか――」
これについては言おうか言うまいか迷ったが、結局素直に告げる事にする。

「覚えてねえんだよ。俺」

「……………」

唐突な告白に、明がきょとんとした面持ちではちくりとまばたきをする。長い睫が動きに添って揺れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3336w/>

お前はいつペン死んでこい！

2011年11月4日09時24分発行